九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Quantificational Phrases and Interrogatives : A Unified Analysis in terms of the types of Group and its relations with Individuals

王, 慶
九州大学大学院人文科学府言語学専攻

https://doi.org/10.15017/25297

出版情報：九州大学, 2012, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

量化解釈と疑問解釈

―集合と個体の関係に基づく統一的分析―

九州大学大学院人文科学府

王　慶

2012 年

本 论 文 谨 献 给 我 的 母 亲。

要　旨

実存世界は、無限の個体、および、個体と個体からなる集合で構成されている。集合は個体を含み、また、集合はそれ自体が個体となり更なる集合を構成しうる。そして、個体も集合も、何らかの形で事態に参与する。一方、言語表現は、実存世界を記述し、コミュニケーションに介在しうる記号の体系である。言語表現の中では、集合と個体は、常に顕然たる存在ではなく、「実（顕然）」である側面と「虚（隠然）」である側面とがある。

本論文では、名詞句が指示する集合を、そのメンバー同士の関係により AND 集合、WITH 集合、OR 集合という３つのタイプに区別する。そして、その集合のタイプによって、量化解釈（分配解釈、集団解釈、全称量化解釈、存在量化解釈）と疑問解釈が生まれるという分析を提案する。AND 集合とは、メンバーが並列等位関係でつながっている集合である。事態に参与しているのは、個体であり、これは、AND 集合に含まれるメンバーにあまねく当てはまるというところから、分配解釈や全称量化解釈が生じる。WITH 集合は、メンバーが主従非等位関係でつながっている集合であり、この場合は、AND 集合とは異なり、集団解釈が生じる。OR 集合は、包含的選言関係で成立している場合に存在量化解釈が可能となり、排他的選言関係で成立している場合に疑問解釈が可能になる。従来の形式意味論では、このような解釈の違いは、集合のタイプを区別しないまま、量化子(quantifier)の違いによって表現されてきた。これに対して、本論文では、これらの解釈の違いは、集合のタイプの違いとしてとらえたほうが、言語表現との対応がより体系的に一貫性を持って説明できることを示した。

本論文は、五つの章から構成されている。第一章では、問題提起を行った上で、本論文の理論背景を説明した。

第二章では、介詞もしくは連詞と呼ばれる he(和), huo(或), haishi(还是)などを取り上げ、それぞれ上記のどのタイプの集合を形づくるのか考察した。その結果、he(和)は、AND 集合を形成する場合と WITH 集合を形成する場合とがあるということ、それに対して、huo(或), haishi(还是)は、それぞれ OR 集合しか形成しないことを明らかにした。さらに、wulun(无论)という連詞は、排他的選言関係からなる OR 集合を AND 集合に変換する働きがあると仮定することによって、huo(或)と haishi(还是)の間の違いも説明できることを示した。そのほかにも、「结婚了（結婚した）」という述語と「夫妻（夫婦）」という複合語の違いを、集合の３つのタイプという観点からとらえなおし、そこから予測される結果が正しいことを示し、一般に複数を表すとされる men(们)や lian(连)といった接辞の機能についても述べた。

第三章では、分配解釈に特徴的にあらわれる mei(每)という要素に注目した。mei(每)は AND 集合としか結ばれないが、その構造に３種類のパターンがあるため、総称文、全称量化文、割り当て構文という異なる解釈が生じる。この mei(每)の働きと、３種類の集合のタイプとが相互に作用を及ぼし、さらに、それぞれの表現が生起する主語位置・目的語位置・主部位置の違いの結果、異なる解釈が生じることが説明された。あわせて、個体量詞と集合量詞の違い、

suoyou(所有)と mei(每)の違い、「大家（みんな）」と「个个（それぞれ）」の比較も行った。

第四章では、特に不定語の解釈を考察した。中国語でも、日本語と同様、不定語は存在量化解釈、全称量化解釈、疑問解釈、複数疑問解釈という、いくつかの解釈を生じさせる。本論文では、その対応関係についても、集合のタイプという観点から分析した。不定語「谁」は、排他的選言関係もしくは包含的選言関係で結ばれる構成素からなる OR 集合であるが、排他的選言関係からなる場合には疑問素性[QF]を付与されることがある。包含的選言関係で結ばれる場合、存在量化解釈が生まれ、存在を表す機能範疇 you(有)と共起可能になる。一方、排他的選言関係で結ばれている場合、wulun(无论)によって AND 集合に変換されると、全称量化解釈が可能になるが、疑問素性[QF]を付与されると、「特指问（疑問詞疑問文）」となる。これと同様に、「正反问（反復疑問文）」、「选择问（選択疑問文）」も排他的選言関係に基づくため、疑問素性[QF]の付与が可能となり、疑問文解釈が生まれる。「是非问（諾否疑問文」の場合は、中国語の疑問語気助詞「吗」が否定素性[Neg]を作り出す機能を持っており、この[Neg]との間に排他的選言関係が形成されるために、疑問素性[QF]の生起および疑問文解釈が可能になる。

第五章では、第二章から第四章までのまとめを行い、修飾関係の分析、中国語のスコープ解釈の一義性、多義性などの研究を今後の課題として提示した。

このように、集合のタイプの違いは、文法の様々な側面に影響を与えている。従来の形式意味論では、分配解釈、全称量化解釈、存在量化解釈それぞれに対して異なった量化子を仮定して説明する。量化子そのものは、集合を形成する機能は持たないため、he(和), huo(或), haishi(还是)などの違いは説明できない。men(们)や lian(连)についても同様である。さらに、suoyou(所有)と mei(每)は、どちらも全称量化子で説明するしかないが、3.8 節で述べたように、この２つには様々な違いがある。量化子を中心とした理論では、これらの違いを述べる手段がないのである。逆に、不定語「谁」の場合は、存在量化解釈・全称量化解釈・疑問解釈を許すが、その事実は、単に異なるタイプの量化子と共起できると規定されるだけになり、なぜ、この３つの解釈に不定語が関わるのかということが説明できない。このように、量化子だけに頼って意味解釈の違いを記述するアプローチでは、語彙と解釈との対応関係を十分に体系化することができない。また、中国における言語研究の分野では、「語」本来の意味、さらに歴史をたどってきた語源が徹底的に追及されてきたが、そういった材料を統合し、論理的な分析により、語と語を結びつけ、文全体の意味解釈を体系づける理論に欠けていた。言うなれば、西洋の形式意味論は、「森を見て木を見ず」という状態であり、中国の伝統的な研究は「木を見て森を見ず」という状態だったことになる。集合と個体は、その両面が同時に言語表現に映し出されることはない。一方が「実」であれば他方は「虚」となる。しかし、集合と個体は表裏一体の存在であり、解釈においては、その「実」と「虚」の両面が必要不可欠である。本論文では、この集合と個体の関係を理論化することによって、「木」と「森」の両方を視野に入れ、論理学・中国語学・生成文法の間にある接点を模索した。「実」と「虚」という伝統的な中国哲学思想の概念は、理論言語学においてもまた深く根ざしているのである。

目　次

第一章　序章 1

1.1. 導入 1

1.2. 本論文のねらい 2

1.2.1. 中国語学の立場 3

1.2.2. 生成文法の立場 4

1.2.3. 問題提起 6

1.3. 本論文の理論背景 7

1.4. 本論文の主な主張 11

1.4.1. 個体 12

1.4.2. 集合 13

1.4.3. α-GIC 16

1.5. 本論文の構成 20

第二章　「和」，「或」，「还是」から構成される **α-GIC 21**

2.1. 本章の問題提起 21

2.1.1. he(和)、huo(或)と haishi(还是) 21

2.1.2. wulun(无论) 22

2.1.3. 「是夫妻」と「结婚了」 23

2.1.4. 現象のまとめ 24

2.2. 前提 25

2.2.1. 叙述関係 25

2.2.2. α-GIC 26

2.3. he(和)と huo(或) 28

2.3.1. 先行研究 28

2.3.2. 本章の提案 35

2.4. 分配解釈と集団解釈 38

2.4.1. dou(都)との共起 39

2.4.2. yiqi(一起)との共起 45

2.5. 二種類の述語 50

2.5.1. 先行研究 50

2.5.2. 「结婚」という述語 55

2.5.3. 「是夫妻」という述部 60

2.6. α-GIC の派生 65

2.6.1. lian(连)....65
2.6.2. men(们)....69
2.7. まとめ....74

第三章　**mei(毎)，QP から構成される α-GIC....75**
3.1. 本章の問題提起....75
3.2. 前提....78
3.2.1. 叙述関係....78
3.2.2. 個体と集合....78
3.2.3. Dou と Yiqi....81
3.3. mei(毎)と QP....81
3.3.1. mei (毎)....81
3.3.2. QP....89
3.4. 主語位置に生起する場合....91
3.4.1. mei(毎)....91
3.4.2. 複数解釈の QP....95
3.4.3. mei(毎)と複数解釈の QP の共起....96
3.5. 目的語位置に生起する場合....97
3.5.1. Mei-and-GIC....97
3.5.2. 複数解釈の QP....100
3.6. 主部位置に生起する場合....102
3.6.1. Mei....103
3.6.2. 複数解釈の QP....107
3.7. 個体量詞と集合量詞....109
3.8. mei(毎)と suoyou(所有)の違い....115
3.9. 先行研究....119
3.9.1. 英語の研究....119
3.9.2. 中国語の研究....122
3.10. まとめ....125

第四章　不定語から構成される **α-GIC....126**
4.1. 本章の問題提起....126
4.1.1. 不定語平叙文....126
4.1.2. 不定語疑問文....128
4.2. 前提....131
4.2.1. 叙述関係....131

4.2.2. 集合 132
4.2.3. α-GIC 132
4.2.4. you(有)と wulun(无论) 134
4.3. 不定語平叙文 135
4.3.1. huo(或)と haishi(还是) 135
4.3.2. 存在量化解釈 137
4.3.3. 全称量化解釈 139
4.3.4. 集団解釈の場合 142
4.4. 不定語疑問文 142
4.4.1. 先行研究 143
4.4.2. dou(都)が生起しない疑問文 148
4.4.3. dou(都)が生起する疑問文 162
4.5.まとめ 168
4.5.1. 不定語 168
4.5.2. 疑問マーカー 169
4.5.3. 疑問文 169
第五章　終章 **171**
5.1. 虚実からなる中国思想 171
5.1. 提案の総まとめ 173
5.2. 課題の総まとめ 175
5.3. 今後の研究の方向性 176
あとがき **178**
参考文献 **181**

第一章　序章

1.1. 導入

歴史は、約 2300 年前の中国の戦国時代にさかのぼる。荘子（紀元前 369 年 - 286 年）は、宋国の思想家であり、老子と並んで道教の始祖の一人とされている。荘子の思想は、無為自然を基本とし、人為を忌み嫌うものである。ここで、荘子の思想を表す代表的な説話として「庄周梦蝶（胡蝶の夢）」を紹介する。

(1)　《庄子・齐物论・十三》

昔者庄周梦为胡蝶，栩栩然胡蝶也。自喻适志与！不知周也。俄然觉，则蘧蘧然周也。不知周之梦为胡蝶与？胡蝶之梦为周与？周与胡蝶，则必有分矣。此之谓物化。　[王夫之 (1964): p.29]

昔者（むかし）、荘周（そうしゅう）、夢に胡蝶と為る。栩栩然（くくぜん）として胡蝶なり。自ら喩（愉）しみて志に適うか、周となることを知らざるなり。俄然として覚むれば、即ち蘧蘧然（きょきょぜん）として周なり。知らず、周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか。周と胡蝶とは、即ち必ず分あらん。此れをこれ物化と謂う。　[金谷治訳 (1971): p.89] [1]

この説話は、いったい何を言い伝えようとしているのか。解釈は実に百人百様である。「無為自然、一切斉同」と考える人もいれば、「夢と現実の対立」と捉える人もいる。是と非、生と死、大と小、美と醜、貴と賤など、現実に相対しているかに見えるものも、荘子はそれを「ただの見せかけに過ぎない」と説いている、と解釈する人すらいる。近年では、方法としての寓話という観点や、同時代の論理学派や言語哲学的傾向に着目した研究も現れている。しかし、この中国哲学思想の根源には、荘子が自分に向かって発した「己は誰だ？」という問いがあることを忘れてはならない[2]。それは、荘子という一人の人間の「個体」としての、人生に対する深い感慨の表れだと、筆者は理解している。

古代ギリシアに目を移せば、アリストテレスは、人間を「ポリス的（社会的）な動物」とみなしている[3]。社会において、個々の存在（個人）は各々に与えられた役割を果たし、

---

[1] 日本語訳は、金谷治訳 (1971)を参照されたい。なお、以下では特に明記しない限り、gloss と翻訳に関して、日本語訳は、筆者によるものであり、英語訳は、出典の引用である。

[2]「荘子が問うているのは、『わたしがわたしであることは、ほんとうに自明だろうか』ということである。」山田 (2007, p.23)を参照されたい。

[3] Aristoteles (Politik, 1253a)を参照されたい。

人間の集団によって構造化された社会は、個々の存在である個体を保護する機能を持つ。個体は社会に寄与する形で社会や他の個体に関係する。この地球の 70 億もの生命体は、お互いに身を寄せ合いつつ、生息している。

誕生してから約 46 億年経過しているこの地球は、相当孤独感を感じているだろう。この広大な宇宙に、はたして地球以外に知的生物がいる星はないのか。1969 年 7 月 20 日の月面着陸が成功して以来、人類は、一刻も宇宙開発の夢をあきらめていない。いや、むしろ加速させている。世界的に著名な英国の物理学者のホーキング博士 (Hawking, Stephen William)は、智恵を持つエイリアン (alien)の存在を肯定している。一方、同氏は、2010 年 4 月 25 日放送の米テレビ番組「ディスカバリー・チャンネル (Discovery Channel)」で、エイリアンは人類にとって脅威であるとし、人類がエイリアンと接触すれば、地球の資源が狙われ、攻撃を受ける可能性が高いと警告した[4]。人間は、人間同士だけでなく、異星人との間でも、関係を持とうとしていながら、一方で警戒して距離を置こうともしている。

1.2. 本論文のねらい

本論文は、そういった目に見えない、「エイリアン的な」人を扱うものである。もう少し精確に言えば、中国語で不定の「人」を表すことば—「谁」の解明を目指すものである。

1998 年に Johnson Spencer が書いた一冊の本が、世界的なベストセラーとなった。その名は、(2a)の「Who moved my cheese?」である。その本が中国市場に出回っていたころに、筆者は、ある出版社のタイトルの中国語訳に目を引かれた。それは、(2b)である。英語のタイトルとの比較からも分かるように、中国語訳のほうには、「？」という符号が抜けていた。

(2) a. Who moved my cheese? [5]

b. 谁 动 了 我 的 奶酪
誰 触る Asp 私 De チーズ

i. <u>誰かが</u>私のチーズを触ったのだ。

ii. <u>誰かが</u>私のチーズを触ったのか？

iii. <u>誰が</u>私のチーズを触ったの？

---

[4] What are the chances that we will encounter some alien form of life, as we explore the galaxy. If the argument about the time scale for the appearance of life on Earth is correct, there ought to be many other stars, whose planets have life on them.…中略…Meeting a more advanced civilization, at our present stage, might be a bit like the original inhabitants of America meeting Columbus. I don't think they were better off for it.（Stephen Hawking の Homepage より）

[5] おもしろいことに、このタイトルの日本語訳は、英語のタイトルをそのまま直訳したものではなく、『チーズはどこへ消えた？』となっているらしい。

(2b)は、三つの解釈ができる。(2b-i)のように、単に不特定の人が「动了我的奶酪（私のチーズを触った」という不定解釈もあれば、そのことすら疑わしくなる(2b-ii)のような疑問解釈、さらに、そのことにかかわっている人物が疑問解釈の対象になる(2b-iii)もある。では、なぜこの「谁」ということばに解釈が三通りあるのだろうか？

1.2.1. 中国語学の立場

中国語学の研究分野では、吕叔湘 (2002, p.182)[6]をはじめ、「谁」のようなことばが疑問も不定も表すことができることから、(3)のように、疑問を表す用法を「疑问指称词（疑問指示代名詞）」、不定を表す用法を「无定指称词（不定指示代名詞）」と称している。

(3) “谁”，“什么”，“哪儿”等词平常称为“疑问指称词”，因为他们的主要用途是询问人，物，情状等疑点。可是这些词也可以不作疑问用：“谁”可以代表不知或不论是谁的一个人，“什么”可以代表不知或不论是什么的一件东西。这样用法的时候，可以称之为“无定指称词”。
（「谁」、「什么」、「哪儿」などのことばは、人、もの、状態に関する疑問点を問うことから、通常「疑问指称词」と呼ばれている。ただし、この種のことばは疑問以外にも使われることがある。「谁」は、知らない人を表したり、誰でもいいような人を指したり、また、「什么」は、知らないもの、あるいは、どんなものでもいいということを表す用法がある。そういった用法は「无定指称词」と呼ばれる。） [吕叔湘 (2002): p.182]

そして、「无定指称词（不定指示代名詞）」には、さらに(4)のような二つの用法がある。

(4) 无定指称词用途有二：表不论的可称为任指，表不知的可称为虚指。
（さらに、「无定指称词」には、二つの用途があり、任意の対象をさす場合の「任指（任意指定）」と、未知のものをさす場合の「虚指（不定指示）」がある。） [吕叔湘 (2002): p.183]

たとえば、(2b-i)は、「虚指（不定指示）」の用法であるが、(5)は、「任指（任意指定）」の例である。つまり、「谁」という一語でも、その中に、実は、ある範囲内で任意に指してもいいくらい多数の人が含意されている。

---

[6] 本論文で取り上げている吕叔湘 (2002)は、吕叔湘 (1942)の初版をベースに、1956 年、1958 年、1982 年の再版を経て、2002 年に『吕叔湘全集（第一卷）』として上梓されたものである。

(5)　　谁 **都** 动 了 我 的 奶酪。
誰 Dou 触る Asp 私 De チーズ
誰でも私のチーズを触ったのだ。

1.2.2. 生成文法の立場

また、生成文法の研究分野でも、Huang (1982)をはじめ、表現の仕方こそ違うが、(2)と似たような観察が得られている。

(6)　　他 不 想 吃 <u>什么</u>（？）
彼 Neg たい 食べる 何

a. 彼は、何を食べたくないの？
'What didn't he want to eat?'

b. 彼は、何も食べたくない。
'He didn't want to eat anything.'　　[Huang (1982): p.242, (109)]

Huang (1982)は、(6)のような文で、「？」がつくかどうかによって、疑問文解釈と陳述文解釈の揺れが生じることに着目して、「wh-words」と「quantifiers」の対立を、(7)の表のようにまとめた。

(7)　　[Huang (1982): p.241, (108)]

examples	as question words	as quantifiers
谁	who	anybody
什么	what	anything
哪	which	any
何时	when	any time
哪里	where	any place
怎么	how	any way
为什么	why	any reason
A-not-A(来不来)	whether A or not	no matter whether A or not

Huang (1982, pp.241-242)によると、(7)にある要素は、文法上の独立規則 (independent principle of grammar)を免れれば、どんな環境におかれても、wh-words として解釈できる。

(8) 你 想 吃 什么 ？
あなた たい 食べる 何
あなたは、何を食べたいの？
'What do you want to eat?' [Huang (1982): p.247, (129)]

(9) 谁 喜欢 他 ？
誰 好きだ 彼
誰が彼のことを好きなの？
'Who likes him?' [Huang (1982): p.247, (130)]

そして、この文法上の独立規則 (independent principle of grammar)とは、(10)と(14)の二つの文脈 (contexts)だとされており、その環境におかれると、「quantifiers」としての用法が生じるという。

(10) The first is what is commonly called the "affective" context, i.e., an appropriate position in a negative sentence, a yes/no question, an A-not-A question, or a conditional clause. In this case, in other words, they are "negative polarity items" (cf. Klima, 1964). [7] [Huang (1982): p.242]

(11)～(13)は、それぞれ「negative sentence」、「yes/no question」、「A-not-A question」の例である。

(11) 他 不 想 吃 什么 。
彼 Neg たい 食べる 何
彼は何も食べたくない。
'He doesn't want to eat anything.' [Huang (1982): p.248, (133)]

(12) 你 想 吃 什么 吗 ？
あなた たい 食べる 何 Ma
あなたは何かを食べたいの？

[7] Huang (1982)は、この解釈の揺れは、下線の wh-words が「not (negative polarity items)」の領域内に生起していることに起因していると帰結しているが、これは必ずしも正しくない。多くの先行研究もあり、(2)の例でも見られるように、「not」がなくても、三種類の解釈が生じうる。したがって、本論文では、否定との相関に関して、これ以上議論しない。また、仮定を表す用法に関する議論も別の機会に譲る。

'Would you like to eat anything?' [Huang (1982): p.243, (112)]

(13) 你 想 不 想 吃 什么 ？
あなた たい Neg たい 食べる 何
あなたは何かを食べたいの？
'Would you like to eat anything?' [Huang (1982): p.243, (113)]

また、二番目の「context」は、(14)のようなものであり、その例は、(15)である。

(14) The second context in which the items in (7) may be used as quantifiers is when they occur in a position preceding the scope marker *dou*, which marks universal quantification: __ X *dou*. [Huang (1982): p.242]

(15) 谁 **都** 喜欢 他 。
誰 Dou 好きだ 彼
誰もが彼のことが好きだ。
'Everyone likes him.' [Huang (1982): p.244, (117)]

Huang (1982)は、(10)のような用法を「negative polarity existential quantifier」、(14)のような用法を「free-choice universal」と呼んでいる。

1.2.3. 問題提起

吕叔湘 (2002)と Huang (1982)は、命名の仕方こそ異なるものの、同じ現象に着目していると言える。すなわち、吕叔湘 (2002)でいう「虚指（不定指示）」と「任指（任意指定）」は、それぞれ Huang (1982)の「negative polarity existential quantifier」と「free-choice universal」に近い。しかし、命名したからといって、問題解決につながったわけではない。本質的な問題として、「虚指（不定指示）」と「任指（任意指定）」、もしくは、「negative polarity existential quantifier」と「free-choice universal」とは何であるか、その中身がなお不明のままになっていると言わざるを得ない。そこで、本論文では、「谁」のようなことばに関して、吕叔湘 (2002)と Huang (1982)の用語を「不定語」[8]という言い方に一本化して、以下の問いを設定して議論を展開していく。

[8] 英語の世界では、疑問詞 (interrogative word) が疑問文に使われることが多いため、wh-words と呼ばれているが、本論文では、英語の wh-words に相当する中国語のことばを「不定語」と呼ぶ。

(16)　　不定語とは、いったいどういうものだろうか？

(17)　　不定語から、なぜ全称量化 (universal quantification)、存在量化 (existential quantification) の解釈が生まれるのか[9]？

1.3. 本論文の理論背景

さて、本論文の理論の枠組みを提示しよう。上述した中国古代の哲学思想家荘子の話にしろ、古代ギリシア・アリストテレスの格言にしろ、さらに現代社会におけるホーキング博士の警告にしろ、古今東西を問わず、森羅万象が正確に言い伝えられ、理解されているということは、「ことば」というコミュニケーションの道具を借りる目的の根源には「意味の理解」があるということである。したがって、言語研究という分野において、「意味 (meaning)」が情報伝達の最重要部門とされても何の不思議もない。さらに言ってしまえば、「意味表示 (semantic representation, SR)」の研究が言語研究の究極の目標と言っても過言ではない。上山（2011b, p.1 (2)）によると、「意味」には、次の３つの側面がある。

(18)　「意味」の３つの source

a.　各語彙について Lexicon で指定されている「意味」

b.　a.を材料として、構造構築によって加えられた／変更された「意味」

c.　b.と自分の「知識」を統合して（推論等によって）得られる「意味」

本論文は、(18)に提示されている３つの source のうちの a と b を扱うものである[10]。つまり、文の意味を考えるには、その言語の語彙に本来備わっている「意味」もさることながら、意味構造について考える必要もある。これは、フレーゲの構成性原理 (principle of compositionality)によると、文の意味は不可分の意味概念ではなく、構成要素の意味と統語構造から合成的に得られるからである。

(19)　　The Principle of Compositionality:
The meaning of a complex expression is a function of the meanings of its parts and of the syntactic rules by which they are combined.　　[Partee et al. (1990): p.318]

---

[9] 全称量化と存在量化とは何か、その由来、意味解釈に関しては、別の章で詳述する。

[10] (18c)については、力が及ばないため、今後の研究課題としておく。

しかし、現実問題として、言語研究に際し、いわゆる「語法」、語彙レベルのみでの研究に偏重している分野もあれば、いわゆる「文法」、文レベルのみでの研究に偏る分野もある。一方、意味論の研究を掲げ、フレーゲやモンタギューが構築しようとしていた形式言語 (formal languages)は、われわれ人間が司る自然言語 (natural languages)との間に大きなギャップがあると言わざるを得ない。論理学の世界では、二つのシステム、いわゆる命題論理 (propositional logic)と述語論理 (predicate logic)が観察 (examine) されており、もっぱら真理値 (truth values)が真 (true)であるか、偽 (false)であるかが求められてきた。当然のことながら、このような論理を用いる手法は、その内容が真か偽かはっきり断言できる叙述文の処理には適しているのに対して、真か偽か判断できない言語現象（たとえば、疑問文、命令文、遂行文など）の処理では、難しい局面に直面することは言うまでもない[11]。

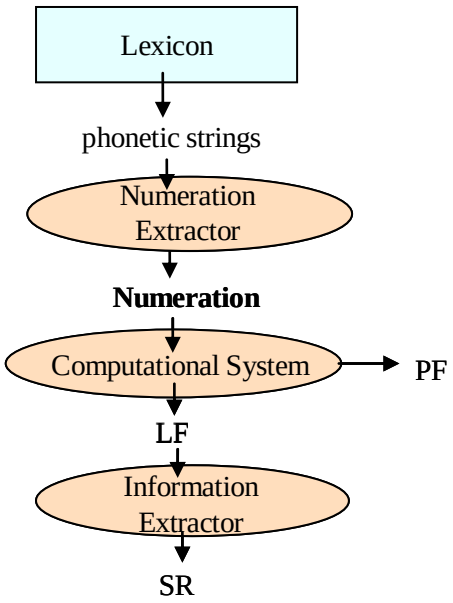
そこで、本論文では、文の意味を理解するには、構成要素に本来備わっている意味と、統語構造の構築によって得られる意味をいくつかのモジュールから分析する必要があると考え、(20)のようなモデルを想定する。まず、SR を得るためには、Lexicon からスタートした音連鎖 (phonetic strings)が三つのモジュールを経なければならない。それぞれ「Numeration Extractor」、「Computational System」と「Information Extractor」である。また、各モジュールの中で起きている操作はそれぞれ異なる。Linguistic SR は、「Information Extractor」の産物であり、形式表示 LF (Logical Form)と音韻表示 PF (Phonological Form)は、「Computational System」の出力である。Computational System においては、numeration を入力とし、それらを結合して１つの構成素にしたり (Merge)、構造関係を変えたり (Move)、組み合わせ可能かどうかをチェックしたり (Agree)、などの操作が行われる。

---

[11] 具体的には、Partee et al. (1990, p.95)を参考にされたい。

(i) For instance, the sentences of our logical languages are all declaratives - there are no interrogatives, imperatives, per-formatives, etc.

(20)　　本論文の理論背景[12]：



しかし、中国語の場合、ロマンス諸語のように、Agree や Move などの現象が多々見られるわけではないので、本論文では、Merge[13]という操作について詳しく述べる。Merge で構成された構成素の間には、解釈のしかたによって、３種類の関係ができあがる。

(21)　a.　主題関係 (thematic relations)

　　b.　修飾関係 (modification relations)

　　c.　叙述関係 (predicational relations)

(22)　主題関係[14]:

---

[12] これは上山 (2011b)に基づいて仮定したものである。詳細は、上山 (2011b)を参照されたい。

[13] Merge に関して、本論文では、Chomsky (1999)の定義を用いる。

(i)　Merge:
The indispensable operation of a recursive system is Merge (or some variant of it), which takes two syntactic objects α and β and forms the new object r = {α, β}.
[Chomsky (1999): p.2]

[14] 具体的には、Gruber (1965), Jackendoff (1972), Grimshaw (1991)などを参考にされたい。Jackendoff (1972), Grimshaw (1991)は、それぞれ以下のような階層性を作っている。

(i)　The Thematic Hierarchy:
1. Agent
2. Location, Source, Goal
3. Theme　[Jackendoff (1972): p.43, (2.64)]

(ii)　The proto-argument-structure:
(Agent (Experiencer (Goal/ Source/ Location (Theme))))　[Grimshaw (1991): p.8, (1)]

述語の θ-grid[15]に NP が持っている index を書き込むことにより、NP と述語間に作られる関係。

(23) 修飾関係[16]：

被修飾部 (modifiee)と修飾部 (modifier)の間に結ばれる関係。

(24) 叙述関係[17]：

二つの構成素が Merge によって結ばれる「aboutness」な関係[18]。

(25) 叙述関係で結ばれる二つの構成素は、主部 (A=Topic)と述部 (B=Predicate)に

---

[15] θ-grid は、Stowell (1981)の用語である。

(i) θ-grid (=thematic grid):
Suppose that every entry for a verb contains an explicit representation of all of the θ-roles that it assigns to its complements. Let us call this internal representation of the verb's argument structure its *thematic grid*, or *θ-grid.* [Stowell (1981): p.34]

Chomsky (1986)は、CSR(canonical structural realization)という概念を用いて、個々の意味範疇（意味役割）の CSR を一般的に規定しておけば、述語 (predicate) の項 (argument) の選択特性に関する情報としては、意味解釈 (s-selection) のみを指定しておけばよく、統語範疇の選択 (c-selection) に関する情報は CSR によって得られるとしている。

(ii) Let us assume that if a verb (or other head) s-selects a semantic category C, then it c-selects a syntactic category that is the "canonical structural realization of C" (CSR(C)) [Chomsky (1986): p.87]

[16] 本論文では、修飾関係に関して、考察が不十分なため、議論をしない。

[17] Chao (1968)と Li and Thompson (1981)は、叙述関係に関して、(24)の定義と似たような記述をしている。

(i) Subject and Predicate as Topic and Comment. The grammatical meaning of subject and predicate in a Chinese sentence is topic and comment, rather than actor and action. [Chao (1968): p.69]

(ii) One of the most striking features of Mandarin sentence structure and one that sets Mandarin apart from other languages, is that in addition to the grammatical relations of "subject" and "direct object," the description of Mandarin must also include the element "topic," Because of the importance of "topic" in the grammar of Mandarin, it can be termed a *topic-prominent* language. [Li and Thompson (1981): p.15]

[18] 具体的な内容は、上山 (2011b)を参照されたい。「人間は、Information Database の中の特定の範囲の情報について意見を述べることもできる。「A は B だ」という叙述関係（predication）は、人間の認識／判断を表わす基本的な形式である。主部（A）で Information Database の中のどの範囲に注目しているかを示し、述部（B）でその範囲の中から注目するべき情報を取り出して示したり、その範囲を見渡して認識したことを述べたりするのである。」と上山 (2011b: p.36)にある。

なる[19]。

(26) 叙述関係が構築される条件[20]：

a. 叙述関係を誘発 (induce) する要素

b. 関連構成素が QR (Quantifier Raising)する操作

(27) 述部に生起する空範疇 (empty category)[以下：φ] は、主部要素と同一指標を持たなければならない[21]。

(28) 叙述関係の主部になる集合が、連続的スキャニング (Sequential Scanning) [22]という操作を受けなければならない。

(29) 連続的スキャニングとは：
集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作である。

(30) 連続的スキャニングを経て構成された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によって結ばれる。

1.4. 本論文の主な主張

上述した例から分かるように、中国語の不定語、たとえば、「谁」の一語に、単数解釈もあれば、複数解釈もあるということは、「谁」のように、Lexicon の指定として、「单 (singular)」、「複 (plural)」の二つの素性を一身に集める範疇があると仮定せざるを得ない。

---

[19] 上山 (2011b)では、主部（A）＝Subject、述部（B）=Predicate と定義されているが、本論文では、いわゆる主語位置と区別をつけるために、主部（A）= Topic、いわゆる主語を Subject と称する。

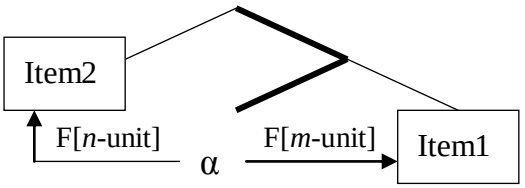
[20] ここでいう二つの条件は、同時に満たす必要はない。いずれか一つを満たせば、叙述関係が構築される。

[21] Huang et al. (2009) によると、主題構造 (topic structures)は、移動によってできるものなのか、それとも、基底生成するものなのか、様々な議論があり今一つ納得できる分析が見られない。本論文では、そういった議論を展開せずに、基本的には基底生成だと仮定する。

[22] これは、杨凯荣 (2003)が「量词重叠（量詞の重ね型）」の説明に使った概念である。「这种逐个扫描的过程其实就是把每个成员与 VP 所表示的状态逐一地进行核查的过程（この連続的なスキャニングは、集合に含まれるメンバーを VP が表している状態と逐一確認するプロセスをさしている）。」（杨凯荣 2003, p.15）

(31)　素性 (feature) の F[*n*-unit]と F[*m*-unit]を付与 (assign) する α がある[23]。

(32)　F[*n*-unit]と F[*m*-unit]の付与[24]：



($n, m \geqq 1$)

(33)　F[*n*-unit]、F[*m*-unit]は、解釈可能素性 (interpretable features) であり、何らかの構成素に付与されなければならない[25]。

α を主要部とする(32)のような仕組みを α-GIC (Group-Individual-Construction)と呼ぶ。

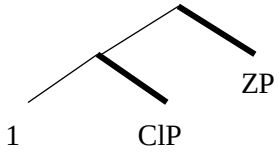
(34)　α-GIC は、Numeration Extractor の結果物 (=Numeration)として、Computational System に導入される。

(35)　α は、個体 (individual) と集合 (group)の仲介役である。

1.4.1. 個体

(36)　個体は、[1-ClP-ZP]の構造をなすものである。

(37)　[1-ClP-ZP]とは：
数詞「1」と量詞 (ClP)と ZP からなる構造[26]。



---

[23] 以下では、便宜上、complement 位置に生起する構成素を第１アイテム (Item1)、specifier 位置に生起する構成素を第２アイテム (Item2)と呼ぶ。

[24] 本論文では、主要部につながる branch を太線で表すことにする。

[25] F[*n*-unit]と F[*m*-unit]は、平易に説明すれば、母集団（＝集合）と母集団を構成するメンバー（＝個体）に付与されるものである。

[26] 劉月華 他 (1988, p.35)によると、「名詞は数量フレーズの修飾を受けることができる。中国語では、人或いは事物の数量を表そうとする時には、ふつう数詞を直接名詞の前に置くことはできず、数詞と名詞の間に量詞を入れなければならない。」という。

(38)　量詞 ClP には、個体を表す $ClP_{-Individual}$ と、集合を表す ClP_{-Group} とがある[27]。

(39)　[1-ClP-ZP]において、数詞が「1」の場合、数詞「1」と量詞の ClP は、省略可能である[28]。

(40)　[1-ClP-ZP]は、直接述語の項になれる。

1.4.2. 集合

以下では、集合を(41)のように定義する。

(41)　集合は、構成素と構成素が and や with や or（２種類[29]）の関係で結ばれる接続構造(Conjunctional Construction)である[30]。

---

[27] 中国語の「量词（助数詞）」の分け方は、研究者によって異なる。劉月華 他 (1988)は、６種類の量詞があると述べているが、吕叔湘等 (1980)は、９種類あると述べている。いずれにしても、本論文で取り扱っている以下の(1), (2)に当たる量詞については、吕叔湘等 (1980)にしろ、劉月華 他 (1988)にしろ、特に違いはない。本論文では、個体量詞（個体を表す量詞）として「个（個）」、集合量詞（集合を表す量詞）として「组（組）」を用いる。

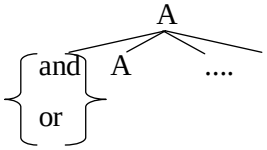
(i)　吕叔湘等 (1980: p.8)：
(1) **个体量词**：个（個）, 跟，面，粒，项，只，枝，件，管，项
(2) **集合量词**：组（組），对，双，串，排，群，捆，包，种，类，套，批，伙，帮
(3) 部分量词：些，把，卷，片，滴，剂，篇，页，层，点儿
(4) 容器量词：杯，盘，碗，盆，篮，瓶，罐，缸，桶，车，口袋
(5) 临时量词：身，头，脸，手，脚，院子，地，桌子
(6) 度量量词：丈，尺，里，米（公尺），亩，斤，两，公分
(7) 自主量词：国，省，区，县，科，系，年，月，星期，倍
(8) 动　量词：次，遍，趟，下，步，圈，眼，口，巴掌
(9) 复合量词：人次，吨公里，秒立方米

[28] 詳述は、劉月華 他 (1988, p.119)、吕叔湘 (2002, p.133)を参照されたい。

[29] Chao (1968)は、二種類の'or'-words について、以下のように記述している。

(i)　For the 'or'-words in Chinese, it makes a difference whether it is a disjunctive 'or' (the 'or' of 'whether or') or an alternative 'or' (the 'or' of 'whether or') or an alternative 'or' (the 'or' of 'either or'). In the former case the word usually regarded as the equivalent conjunction to 'or' is 还是, in the later case the equivalent to 'or' is 或者，或是。　[Chao (1968): p.265]

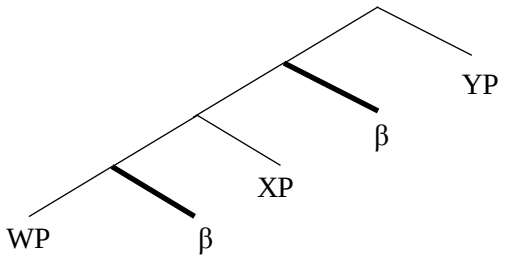
[30] この考え方は、基本的には Ross (1967)に近い。しかし、ふつう英語では、and と or しか接続関係を作らないと思われているようであるが、本論文では、いわゆる前置詞 (preposition)の with も接続関係を作るとみなす。

(i)


[Ross (1967): p.89, (4.85)]

(41)は、(42)のような基底形をなしている。

(42)　　接続構造の基底形：



(43)　　接続構造において、各構成素の間にある関係 β が主要部である。

そして、接続構造は、さらに、等位接続句[31]と非等位接続句に分けられる。

(44)　　等位接続句 (Coordinating Conjunctions):

a. and 関係で結ばれる構造（連結等位接続）[以下：AND 集合]

b. or 関係で結ばれる構造（選言等位接続）[以下：OR 集合]

(45)　　非等位接続句 (Non-Coordinating Conjunctions):

with 関係で結ばれる構造（連結非等位接続）[以下：WITH 集合]

1.4.2.1. AND 集合

(46)　　AND 集合：

---

[31] 等位接続 (Coordinating Conjunctions) に関して、英語では恐らく Curme (1931)の研究が発端であろう。

(i)　The members are connected by coordinating conjunctions. The commonest are *and*, *or*, *but*, for:

e.g. John is in the garden working *and* Mary is sitting at the window reading.

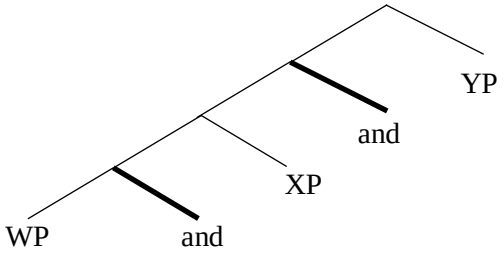
[Curme (1931): p.161]

Curme (1931)は、英語の Conjunctions を 6 つに分けた。（Curme (1931), pp.162-169）

(ii)
a. Copulative: and; both-and; alike-and; at once-and; not-nor; not-not; either; either-or, etc.
b. Disjunctive: or; either-or; either-or-or; other-or; other-other; either-either, etc.
c. Adversative: but; but then; only; still; yet; and yet; however; on the other hand; again, etc.
d. Causal: for
e. Illative: therefore, consequently, accordingly, for that reason, so, then, hence, thence, etc.
f. Explanatory: namely, to wit, wiz, that is, such as, as, like, for example, for instance, say, etc.

並列関係 (paratactic) を表す and が主要部である接続構造[32]。

(47) AND 集合の基底形[33]：



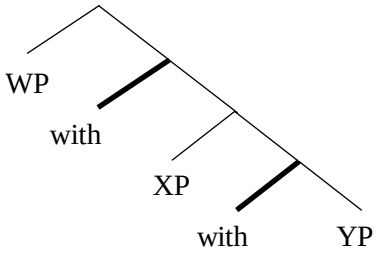
(48) AND 集合は、F[*n*-unit] (*n* > 1)素性しか付与されない[34]。

1.4.2.2. WITH 集合

(49) WITH 集合：

協力関係 (collaborative) を表す with が主要部である接続構造。

(50) WITH 集合の基底形：



(51) WITH 集合は、F[*n*-unit] (*n* > 1) 素性しか付与されない。

---

[32] Partee et al. (1990, p.99)によると、命題論理学では「p, q, r, s, ...,」のような「atomic statements」が存在していると仮定されており、以下のような definition が必要とされている。

(i) Definition:
  a. Any atomic statement itself is a sentence or well-formed formula (*wff*).
  b. Any *wff* preceded by the symbol '~' (negation) is also a *wff*.
  c. Any two (not necessarily distinct) *wffs* can be made into another *wff* by writing the symbol '&' (conjunction), '∨' (disjunction), '→' (conditional), or '←' (bi-conditional) between them and enclosing the result in parentheses. [Partee et al. (1990): p.99, 1-3]

[33] 以下では、β を主要部とする集合を略して、β {WP, XP, YP}と記す。

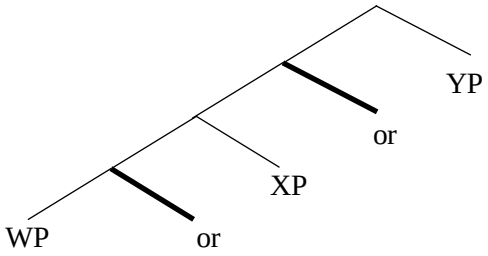
[34] F[*n*-unit] (*n* > 1)素性を付与されると、何らかの母集団の生起が求められる。これに対して、F[1-unit] 素性を付与されると、個体の生起が求められることとなる。

(52)　WITH 集合は、直接述語の項になれる。

1.4.2.3. OR 集合

(53)　OR 集合：
選言関係 (disjunctive) を表す or が主要部である接続構造。

(54)　OR 集合の基底形：



(55)　OR 集合は、F[*n*-unit] ($n > 1$) 素性しか付与されない。

(56)　or には、排他的選言 (exclusive disjunction)の or (eor) と包含的選言 (inclusive disjunction) の or (ior)の２種類の異形態がある[35]。

(57)　eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

(58)　ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

1.4.3. α-GIC

(59)　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、ふつう、直接述語の項として *θ*-role の付与を受けるができない。

---

[35] 朱德熙 (1999, pp.332-333)は、中国語には選択関係を表す表現が２種類あると述べている。(i-a)の例は、「相容性的 (inclusive)」を表す選択関係であり、(i-b)は、「互斥性的 (exclusive)」を表す選択関係である。(i-c)にある「还是」は、疑問文にしか使われない「互斥性的 (exclusive)」を表す選択関係だとされている。

(i)　a.　你上这家铺子去，总能买着牛肉或是羊肉。
（このお店へ行くと、必ず牛肉、または、羊肉が買える。）
b.　大水把铁路冲坏了，你只能坐飞机或是坐船去。
（洪水によって鉄道が壊れたので、君は、飛行機、または船で行くしかないでしょう。）
c.　你是南方人还是北方人？（あなたは、南の人なの？北の人なの？）

(60)　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として *θ*-role の付与を受けることができない[36]。

(61)　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 は主部へ QR しなければならない。

(62)　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 は述部にある空範疇 [以下：φ]と同一指標を持つことができる[37]。

(63)　Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 は叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

(64)　α は、音形を持たないものであり、PF において、AND 集合、OR 集合、WITH 集合の主要部に投射して、音形的に具現化する。

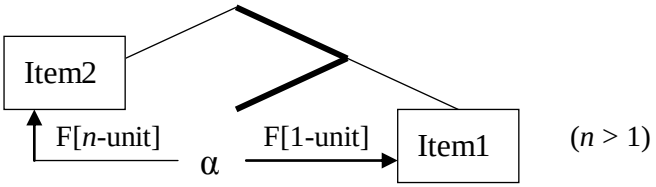
α-GIC には、α-and-GIC, α-with-GIC と α-or-GIC の三種類がある。

1.4.3.1. α-and-GIC

(65)　α-and-GIC において、α は、Item1 に F[1-unit]を付与する。

(66)　α-and-GIC において、α は、Item2 に F[*n*-unit]を付与する。

(67)　α-and-GIC における素性付与：



(68)　α-and-GIC において、F[*n*-unit]は、AND 集合に付与されなければならない。

---

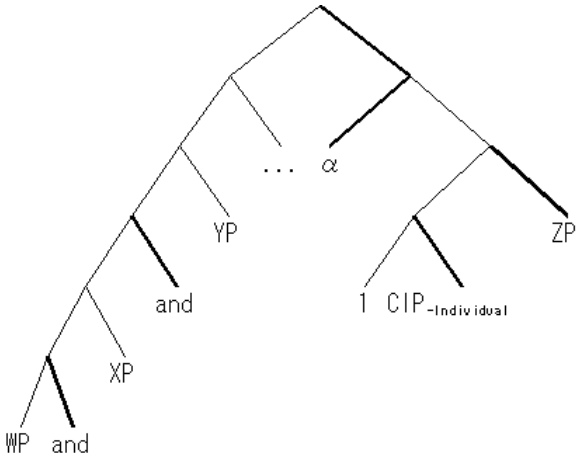
[36] *θ*-role の付与は、Chomsky (1981)の *θ*-criterion を守らなければならない。

(i)　*θ*-criterion：
Each argument bears one and only one *θ*-role, and each *θ*-role is assigned to one and only one argument.　[Chomsky (1981): p.36, (4)]

[37] 本来なら、なぜ、どういう条件の下で、どう同一指標を持つかが、考慮すべき点であるが、考えが不十分なため、今後の課題としておく。

(69)　　α-and-GIC において、F[1-unit]は、[1-ClP-ZP]に付与されなければならない。

(70)　　α-and-GIC の基底形：

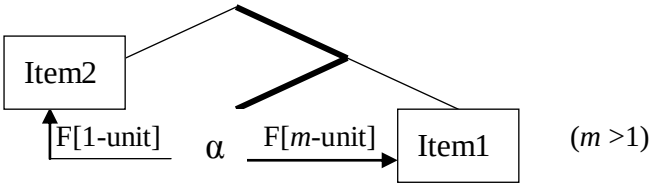


1.4.3.2. α-with-GIC

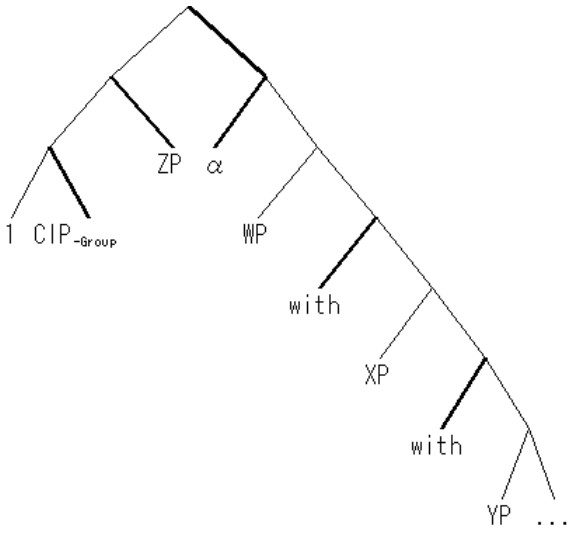
(71)　　α-with-GIC において、α は、Item1 に F[*m*-unit]を付与する。

(72)　　α-with-GIC において、α は、Item2 に F[1-unit]を付与する。

(73)　　α-with-GIC における素性付与：



(74)　　α-with-GIC の基底形：



1.4.3.3. α-or-GIC

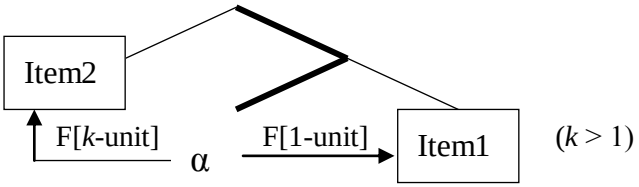
(75)　　α-or-GIC において、α は、Item2 に F[*k*-unit]を付与する。

(76)　　α-or-GIC において、α は、Item1 に F[1-unit]を付与する。

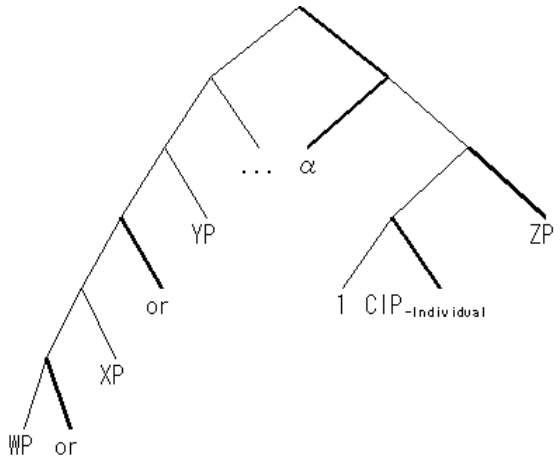
(77)　　α-or-GIC において、F[*k*-unit]は、OR 集合に付与されなければならない。

(78)　　α-or-GIC において、F[1-unit]は、[1-ClP-ZP]に付与されなければならない。

(79)　　α-or-GIC における素性付与：



(80)　　α-or-GIC の基底形：



(81)　　α-or-GIC には、α-ior-GIC と α-eor-GIC の二つの異形態がある。

1.5. 本論文の構成

本論文は、本章を入れて、五つの章から構成されている。

まず、第二章では、「和」、「或」、「还是」という三つの要素を用いて、α-GIC が実在することを検証する。それと同時に、「都」による分配解釈と、「一起」による集団解釈のプロセス、そして、述語「是夫妻」と「结婚了」の相違を解明する。また、派生として、「连」，「们」の構造も取り上げる。

続いて、第三章では、分配解釈しかとれない「每」にも、分配解釈と集団解釈が両方とれる複数 QP にも、α-GIC が適用できることを説明する。そして、個体量詞と集合量詞による区別、「每」と「所有」の対立について検討する。

第四章では、本論文のメイン・ターゲットである不定語の構造を分析した上で、存在量化解釈、全称量化解釈、そして、疑問文解釈が生まれる原因を分析する。

最後に、第五章では、本論文のまとめを行うとともに、今後の課題を提示する。

第二章　「和」,「或」,「还是」から構成される α-GIC

2.1. 本章の問題提起

中国語の dou(都)は、分配解釈 (distributive interpretation)にかかわる要素だと言われており、長年議論の的となっている（Lee (1986), Chiu (1993), Cheng (1995), Huang (1996), Wu (1999), 黄 (2004), 袁 (2005), Hsu (2010)など）。一方、集団解釈 (collective interpretation)にかかわる要素として、yiqi(一起)は、必ずしも十分な検討が行われてきたわけではない。本論文の主張にかかわる、α-GIC の存在を検証する手立てとして、分配解釈の dou(都)と集団解釈の yiqi(一起)を用いることが有効な手段である。そのため、本章はまず「和」,「或」,「还是」を用いて、分配、集団解釈が生成するプロセスを解明することを目的とする。

2.1.1. he(和)、huo(或)と haishi(还是)

たとえば、(1a)のように、dou(都)が生起すれば、いわゆる主語「张三和李四」に含まれる「张三」と「李四」は、単独で、それぞれ、述語の「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」という event に加わる参与者になる。このような読みは、しばしば**分配解釈 (distributive interpretation)**と呼ばれる。一方、これに対して、(1b)のように、同じ主語でも、dou(都)が yiqi(一起)に換わると、「张三」と「李四」は、協力して、一緒に、「抬起了一架钢琴」という event に加わるという解釈になる。このような読みは、**集団解釈 (collective interpretation)**と呼ばれる。他方では、(1c)のように、dou(都)も yiqi(一起)も生起していなければ、両方の解釈ができるが、(1c-ii)の分配解釈より(1c-i)の集団解釈になりやすい。

(1)　a.　[张三 和 李四] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　張三 He 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　張三と李四は、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

　　b.　[张三 和 李四] **一起** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　張三 He 李四　Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　張三と李四は、一緒に、一台のピアノを持ち上げた。

　　c.　[张三 和 李四] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　張三 He 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　i.　張三と李四は、一緒に、一台のピアノを持ち上げた。

　　ii.　張三と李四は、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

ところが、(1)と違って、(2)の場合、「张三」と「李四」をつなぐ要素「和」を「或」に換えると、容認可能性がまったく異なってしまう。dou(都)が生起する(2a)も、yiqi(一起)が生起する(2b)も、容認できなくなる。そして、(1c)と違って、(2c)は一つの解釈しかできなくなり、しかも、分配解釈でも集団解釈でもなく、二者択一という解釈をもつ、ふつうの平叙文になるのである。

(2) a. *[张三 或 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1a)
張三 Huo 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *[张三 或 李四] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1b)
張三 Huo 李四 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. [张三 或 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1c)
張三 Huo 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

張三、もしくは、李四が一台のピアノを持ち上げた。

一方、(2)の「或」と意味が近く、同じ選択表現である「还是」が「或」に換わると、(3a, b)では、分配解釈も集団解釈もできない。そして、(3c)のようになると、分配解釈、集団解釈はもちろん、二者択一の解釈を持つ平叙文でもなく、疑問文解釈になる[1]。

(3) a. *[张三 还是 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1a)
張三 Haishi 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *[张三 还是 李四] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1b)
張三 Haishi 李四 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. [张三 还是 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1c)
張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

i. *張三、もしくは、李四が一台のピアノを持ち上げた。

ii. 張三、それとも、李四が一台のピアノを持ち上げたの？

2.1.2. wulun(无论)

ところで、(3)の文頭に wulun(无论)ということばを入れると、(4a)のように、(3a)から容認性が著しく向上して、dou(都)による分配解釈はできるようになるが、(4b)のように、yiqi(一起)による集団解釈は依然としてできない。また、(3c)は容認できるのに対して、(4c)のように、(3c)の文頭に wulun(无论)をつけると、容認できなくなる。

---

[1] 疑問文解釈に関しては、第四章で詳述するので、ここでは詳しく展開しない。

(4) a. 无论 [张三 还是 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (2a)
Wulun 張三 Haishi 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

張三にしても、李四にしても、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

b. *无论 [张三 还是 李四] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (2b)
Wulun 張三 Haishi 李四 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *无论 [张三 还是 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (2c)
Wulun 張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

一方、(1)と(2)の文頭に wulun(无论)が生起すると、いずれも容認できなくなる。

(5) a. *无论 [张三 和 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1a)
Wulun 張三 He 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *无论 [张三 和 李四] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1b)
Wulun 張三 He 李四 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *无论 [张三 和 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (1c)
Wulun 張三 He 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

(6) a. *无论 [张三 或 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴]。 cf. (2a)
Wulun 張三 Huo 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *无论 [张三 或 李四] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (2b)
Wulun 張三 Huo 李四 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *无论 [张三 或 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。 cf. (2c)
Wulun 張三 Huo 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

2.1.3. 「是夫妻」と「结婚了」

しかし、上述した例文の述語の部分、「抬起了一架钢琴」を「是夫妻（夫婦である）」に換えると、(7a)と(7b)のように、dou(都)の分配解釈も、yiqi(一起)の集団解釈も、容認できなくなる。(7c)は、容認可能であるが、その解釈は分配解釈、集団解釈のどちらでもない。

(7) a. *[张三 和 李四] **都** [是 夫妻] 。
張三 He 李四 Dou Shi 夫婦

b. *[张三 和 李四] **一起** [是 夫妻] 。

張三 He　李四　Yiqi　Shi 夫婦

c.　[张三 和 李四] [是 夫妻] 。
張三 He　李四 Shi 夫婦

張三と李四は、夫婦である。

ところが、意味的に、(8)の述語「结婚了（結婚した）」は(7)の「是夫妻」に近いにもかかわらず、yiqi(一起)が生起する(8b)は容認しにくいが、dou(都)と共起する(8a)、もしくは、yiqi(一起)も dou(都)も共起しない(8c)は容認できる。(8c)は、分配解釈、集団解釈のどちらでもない。

(8)　a.　[张三 和 李四] **都** [结婚　了] 。
張三 He 李四 Dou 結婚する Asp

張三と李四は、それぞれ（他人と）結婚した。

b.　?[张三 和 李四] **一起** [结婚　了] 。
張三 He　李四　Yiqi 結婚する Asp

c.　[张三 和 李四] [结婚　了] 。
張三 He 李四 結婚する Asp

張三と李四（二人）は、結婚した。

2.1.4. 現象のまとめ

上記 2.1.1 節, 2.1.2 節, 2.1.3 節で述べた現象をまとめてみると、それらに現れる容認性の対立には、以下の(9), (10), (11)のような条件がからんでいるようである。

(9)　いわゆる主語位置に生起する要素は何か？

a.　he(和)が生起する場合

b.　huo(或)が生起する場合

c.　wulun(无论)が生起する場合

(10)　いわゆる主語と共起する要素は何か？

a.　dou(都)が共起する場合

b.　yiqi(一起)が共起する場合

c.　共起する要素がない場合

(11)　いわゆる述語の部分に生起する動詞は何か？

a. 「抬起了一架钢琴」のようなタイプの動詞
b. 「是夫妻」のようなタイプの動詞
c. 「结婚了」のようなタイプの動詞

以下では、これらの問いに回答できるよう、議論を展開していくが、その前に、まず、以下の根本的な問題を解かなければならない。

(12) he(和)と huo(或)は、そもそもどういうものだろうか？

(12)の問いに対して、本論文では、以下のように提案する。

(13) he(和)と huo(或)は、α-GIC における主要部 α の音形の具現形である。

2.2. 前提

まず、前章で提案した理論の枠組みを再掲する。

2.2.1. 叙述関係

(14) 叙述関係：
二つの構成素が Merge によって結ばれる「aboutness」な関係。

(15) 叙述関係で結ばれる二つの構成素は、主部 (A=Topic)と、述部 (B=Predicate)になる。

(16) 叙述関係が構築される条件[2]：
a. 叙述関係を誘発 (induce) する要素
b. 関連構成素が QR (Quantifier Raising)する操作

(17) 述部に生起する空範疇 φ は、主部要素と同一指標を持たなければならない。

(18) 叙述関係の主部になる集合は、連続的スキャニング (Sequential Scanning)という操作を受けなければならない。

---

[2] ここでいう二つの条件は、同時に満たす必要はない。いずれか一つを満たせば、叙述関係が構築される。

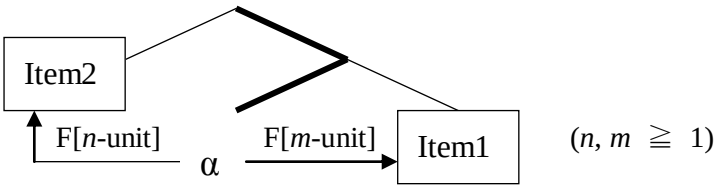
(19)　連続的スキャニングとは：
集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作。

(20)　連続的スキャニングを経て構成された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によって結ばれる。

2.2.2. α-GIC

(21)　Item1 位置と Item2 位置に生起する構成素に素性 (feature) の F[*m*-unit]と F[*n*-unit]を付与 (assign) する α がある。

(22)　F[*n*-unit]と F[*m*-unit]の付与：



(23)　F[*n*-unit]、F[*m*-unit]は、解釈可能素性 (interpretable features) であり、何かの構成素に付与されなければならない。

α を主要部とする(22)のような仕組みを α-GIC (Group-Individual-Construction)と呼ぶ。

(24)　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、ふつう、直接述語の項として *θ*-role を付与されることはできない。

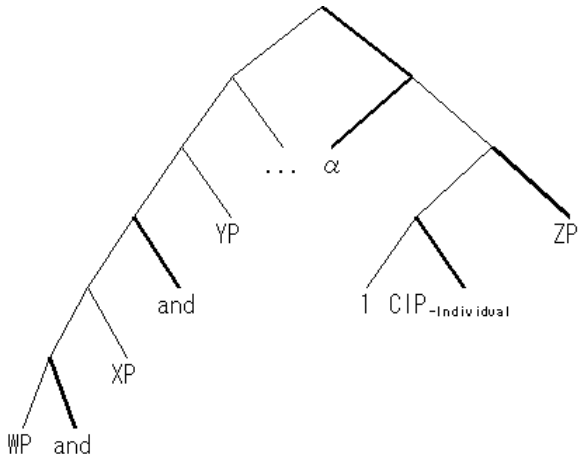
(25)　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 は述部にある空範疇 φ と同一指標を持つことができる。

(26)　Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 は叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

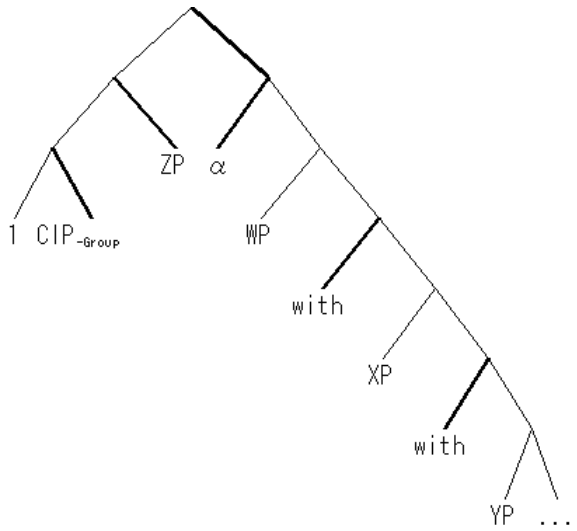
(27)　α は、音形を持たないものであり、PF において、AND 集合、OR 集合、WITH 集合の主要部に投射して、音形的に具現化する。

α-GIC は、α-and-GIC, α-with-GIC と α-or-GIC の３種類がある。

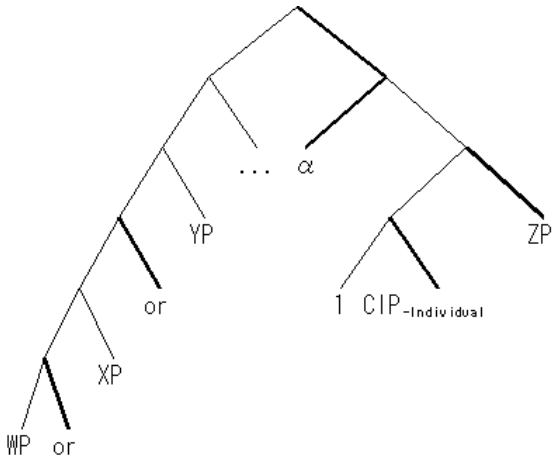
(28)　　α-and-GIC の基底形：



(29)　　α-with-GIC の基底形：



(30)　　α-or-GIC の基底形[3]：



[3] α-or-GIC には、α-ior-GIC と α-eor-GIC の二つの異形態がある。

2.2.2.1. 個体

(31) 個体は、[1-ClP-ZP]をなす構造。

(32) 量詞 ClP は、個体を表す $ClP_{-Individual}$ と、集合を表す ClP_{-Group} とがある。

(33) [1-ClP-ZP]は、直接述語の項になれる。

2.2.2.2. 集合

(34) 集合は、構成素と構成素が and や with や or（２種類）の関係で結ばれる構造。

(35) 等位接続 (Coordinating Conjunctions)：
a. AND 集合：and 関係で結ばれる構造（連結等位接続）
b. OR 集合：or 関係で結ばれる構造（選言等位接続）

(36) 非等位接続 (Non-Coordinating Conjunctions)：
WITH 集合：with 関係で結ばれる構造（連結非等位接続）

(37) ３種類の集合のうち、直接述語の項になれるのは、WITH 集合しかない。

(38) or には、排他的選言 (exclusive disjunction)の or (eor) と包含的選言 (inclusive disjunction) の or (ior)の２種類の異形態がある。

(39) eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

(40) ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

2.3. he(和)と huo(或)

2.3.1. 先行研究

2.3.1.1. Dougherty (1968)

英語の研究分野では、Coordinating conjunction に関して、Curme (1931)をはじめとして、Gleitman (1965), Peters (1966), Dougherty (1968), Lakoff and Peters (1969)など数多くの研究成

果がある。ここでは、Dougherty (1968)の分析を一部概観する。Dougherty (1968)は、(41)を観察対象として、(42)を目標とした。

(41) a. co-ordinating conjunctions: and, or, nor
b. distributive quantifiers: each, all, both, none, either, neither
c. distributive adverbs: alone, simultaneously, together, along with, together with
d. reciprocal constructions
e. plural reflexives
f. respectively constructions [Dougherty (1968): p.i]

(42) This thesis attempts to account for the distribution of the coordinating conjunctions and to provide explicit rules to assign structural descriptions to coordinate constructions so that the grammaticality or non-grammaticality of a sentence will be determinable on the basis of the grammatical description. [Dougherty (1968): p.iv]

Dougherty (1968: p.15)は、英語の「and」のような coordinate conjunction には２種類あると述べ、(43a)を「sentence conjunction」、(43b)を「phrasal conjunction」と名づけている。

(43) a. one in which the elements of the conjoined structure are regarded as independenly functioning elements,
b. and the other in which the elements of the conjoined are conceived as comprising a unity.

(43a, b)に対応する例として、それぞれ(44)と(45)が挙げられている。

(44) Sentence Conjunction:
a. John, Bill, and Tom (each) know the answer.
b. John, Bill, and Tom (each) died. [Dougherty (1968): p.15, (1, 2)]

(45) Phrasal Conjunction:
a. John, Bill, and Tom (all) met in Bonston.
b. John, Bill, and Tom are (all) identical. [Dougherty (1968): p.15, (3, 4)]

そして、Sentence Conjunction である(44a)は、(46a)のようにいくつかの文で連結された形(conjoined sentence)で言い換えられるのに対して、Phrasal Conjunction である(45a)は、(46b)

のように、連結された文の形では言い換えられない。

(46) a. John knows the answer & Bill knows the answer & Tom knows the answer.
b. *John met in Boston & Bill met in Boston & Tom met in Boston.
[Dougherty (1968): pp.15-16, (5, 6)]

また、(47)は、(48)のように二つの文が and でつながる形に言い換えられるのに対して、(49)のような together が現れている構文では、それができない。このような場合、(50)のように、with でつながる形でしか言い換えられない[4]。

(47) Sentence Conjunction:
a. Both John and Mary left.
b. Both Shakespeare and Marlowe wrote plays. [Dougherty (1968): p.19, (10)]

(48) a. John left and Mary left.
b. Shakespeare wrote plays and Marlowe wrote plays. [Dougherty (1968): p.19, (11)]

(49) Phrasal Conjunction:
a. John and Mary left together.
b. Shakespeare and Marlowe wrote plays together. [Dougherty (1968): p.19, (8)]

(50) a. John left with Mary.
b. Shakespeare wrote plays with Marlowe. [Dougherty (1968): p.19, (9)]

2.3.1.2. Chao (1968)

中国語の研究分野では、He(和)に２種類あるということは衆目の一致するところである。Chao (1968)は、Coordinative Construction と命名して、he(和)と huo(或)について研究を行った。

[4] Lakoff and Peters (1969)も似たような考察を行った。

(51) Definition of a Coordinative Construction:

A coordinative construction is an endocentric construction with two or more centers, each of which has approximately the same function as the whole construction.

[Chao (1968): p.262]

Coordinative Construction には、四種類の表記 (Markers)があり、その四番目に he(和)と huo(或)と haishi(还是)が挙げられている[5]。

(52) Conjunctions as markers of coordinate construtions are not as common as one would gather from reading translations of foreign languages or form writings in the style of such translations, where and is equated to 和 (or one of its homographic synonyms) and or is equated to 或者 (or one of its synonyms) or to 还是.

[Chao (1968): p.264]

しかし、Chao (1968)は、and に似たものとして、gen(跟), he(和), tong(同), yu(与) [6]を挙げていながら、中国語には英語の and タイプの primarily coordinate conjunction がないと述べている。

(53) Thus there seems to be no primarily coordinate conjunction of the English 'and'-type which simply joins two expressions in logical conjunction.

[Chao (1968): pp.264-265]

その理由として、中国語の gen(跟)が with に訳されたり、and に訳されたりと、さまざまな訳し方があることが挙げられている。たとえば、(54)の場合、gen(跟)は with にしか訳せない。これに対して、(55a)は、and と together with の両方の訳し方ができる。(55b)は、and

---

[5] Chao (1968, pp.262-263)は、その他の Marker として、以下のようなものを挙げている。

(i) (1) Zero and pauses.
(2) Particles mark off coordinate expressions with special implications of liveliness or impressiveness.
(3) The falling ending, symbolized "↘", consisting of an added falling of the pitch at the end of the last syllable of a phrase, sounds like a feature of sentence intonation, but functions like a particle.

[6] 本論文では、この４つのアイテム「gen(跟), he(和), tong(同), yu(与)」の違いの分析には立ち入らずに、he (和)を代表例に取り上げる。

のほうがより自然な訳だという[7]。

(54) a. 我 要 跟 你 说话。 (I want to talk with you.)
b. 你 得 跟 他 一 块 儿 走。 (You must go with him.)[8]
c. 我 要 同 你 说话。 (I want to talk with you.) [Chao (1968): p.264]

(55) a. 先生 跟 学生 在课堂里 上课 呐。
(The teacher and the students are having a class in the classroom.)
b. 现在 我 要 做 的 两件事 是 吃饭 跟 睡觉。
(The two things I want to do now are eating and sleeping.)
[Chao (1968): pp.264-265]

一方、中国語の'or'-words については、haishi(还是)-disjunctive 'or' (the 'or' of 'whether or')と、huozhe(或者)-alternative 'or' (the 'or' of 'either or')が取り上げられている。

(56) a. 你 在 那儿 做 事 还是 玩 儿? (Are you working or playing?)
b. 做 事 或者 玩儿 都 行。 (It's all right to either work or play.)
[Chao (1968): p.265]

2.3.1.3. 劉月華 他 (1988)

劉月華 他 (1988)など多くの研究者は、gen(跟)を同一形態の、２種類の異なる品詞（“介词”と“连词”）として捉えている[9]。(58)は、介詞としての gen(跟)の使い方である。

(57) “介词”（介詞）とは：
名詞や代詞或いは一部のフレーズの前に置かれて、介詞フレーズを構成し、

---

[7] gen(跟) is more naturally translated as 'and' though 'together with' is also possible. (Chao 1968: p.265)

[8] Chao (1968)は、中国語の Conjunctions について、実際 Prepositions、Adverbs と、あまり簡単に区別できないものだと述べている。

(i) Chinese conjunctions, as we have noted before, are hardly distinguishable from prepositions or adverbs.
例 你 跟 他 一块儿 走。
i. You go with him.
ii. You and he go together. [Chao (1968): p.790]

[9] 「“跟”,“和”,“同”,“与”等のいくつかの語は、介詞と連詞をかねている。」（劉月華 他 (1988, p.257)）

動詞や形容詞を修飾するのに用いられる語である。[劉月華 他 (1988): p.320]

(58) 介詞としての gen(跟)[10]：

“跟”は必ず、甲，乙双方が参与する動作・行為や事柄，状態を述べる表現中に用いられる。ここで、甲は主導的はたらきをするものであって、前文の主語である。一方、乙は動作・行為或いは事物の参与者であったり、関係者或いは動作の対象であったりし、“跟”によって導入されるものである。甲と乙の位置は互いに入れ替えることができない。

[劉月華 他 (1988): p.244, ch 3.6.1]

(58)の例として、(59)のようなものが挙げられている。

(59) a. 我们要跟中国同学开一个联欢会。
我々は中国の学生と交歓会を開く。

b. 中国人民要加强跟世界各国人民的友谊。
中国の人民は世界各国の人民との友情を深めなければならない。

c. 毕业以后，我跟他的联系就中断了。
卒業後、私と彼との連絡は途絶えてしまった。

[劉月華 他 (1988): p.244, ①③④]

また、連詞としての使い方もある。

(60) “连词”（連詞）とは：

虚詞の一類であるので、虚詞としての一般的な特徴を持つ。

a. 具体的な語彙的意味を表さず、ある種の文法的意味しか表さない。

b. 文成分になることができない。

c. 単独では問いに対する答になれない。 [劉月華 他 (1988): p.256, 1,2,3]

---

[10] 劉月華 他 (1988)は、介詞としての gen(跟)を３種類挙げているが、以下の２つは、本論文では直接扱わないものである。

(i) a. “跟”はただ一方の甲だけによってなしとげられる動作･行為にも使うことができる。この場合も“跟”の働きはやはり参与者・共同行為者或いは動作の対象を紹介することである。 [劉月華 他 (1988): p.244, ch 3.6.2]

b. 比較を表す文では、“跟”は比較の対象をもち出すのに使う。二人の人や二つの物の異同を比較する場合、後ろにはよく“相同（同様）”“不同（同様ではない）” “相似（似ている）”“相反（相反する）”“相等（等しい）”“差不多（ほとんど同じ）”などが用いられる。 [劉月華 他 (1988): p.246, ch 3.6.3]

連詞である“和”の例として、以下の(61)が挙げられている[11]。

(61) a. 长江和黄河是中国最大的两条河。
長江と黄河は中国最大の二つの川である。
b. 去年的十月和今年的三月他都出差到上海去了。
去年の十月と今年の三月、彼は上海に出張に行った。
c. 他和我都是华侨。
彼と私は二人とも華僑です。 [劉月華 他 (1988): p.259, ①②③]

上述した介詞と連詞の線引きは紛らわしいようであるが、劉月華 他 (1988)によると、[X 跟 Y]の X と Y の位置を入れ替えられるかどうかで判別がつくという。

(62) 連詞である「跟」:
a. 我跟方强都会英语。
私と方強は二人とも英語ができる。
b. 长久以来，海员和渔民们度么希望能在礁顶上设有一座航标灯呀！
長い間、船乗りや漁師達はあの岩礁の上に立標灯があればなあと、どんなに願い続けてきたことか。 [劉月華 他 (1988): p.257, A]

(63) 介詞である「跟」:
a. 小燕昨天只跟小青说了这件事。
小燕は、きのう小青にしかその話をしなかった。
b. 看，胖胖跑的速度和走（的速度）差不多。
見て、胖胖の走る速さったら歩く〔速さ〕のとたいして変わらないわ。
[劉月華 他 (1988): p.257, B]

連詞としての(62)は、X と Y の位置を入れ替えても意味は変わらないが、介詞としての(63)は、X と Y の位置を入れ替えると、元の文と意味が違ってしまう。

2.3.1.4. 张斌，张谊生 (2000)

张斌，张谊生 (2000, pp.97-98)も、「和，跟，与，同」が介詞と連詞、二つの品詞の機能

[11] 劉月華 他 (1988)では、連詞としての gen(跟)の例があまり紹介されていない。おそらく gen(跟)と he(和)は、同じ類のものであるということが念頭に置かれ、省略されたものだと推測する。

を併せ持つことに注目し、“N_1跟N_2”を代表例として、さらに6つの方法を用いて、「i ⇒跟[1](連詞)」、「ii ⇒跟[2](介詞)」のように、“跟”の品詞の判別を試みた。

(64) a. 替代法（「他（她）们俩」を「N_1跟N_2」に入れ替えるテスト）

i. N_1 跟 N_2 爱 看 戏 ≈ 他 们 俩 爱 看 戏
Gen 好む 見る 芝居 彼 Pl 二人 好む 見る 芝居

N_1 と N_2 は、芝居を見るのが好きだ。≈ 彼らは、芝居を見るのが好きだ。

ii. N_1跟N_2 要 滑头 ≠ 他 们 俩 要 滑头
Gen こすい手を使う 彼 Pl 二人 こすい手を使う

N_1 はN_2にこすい手を使った。 ≠N_1と N_2はこすい手を使った。

b. 互換法（N_1と N_2の位置を入れ替えるテスト）

i. N_1跟N_2爱看戏 ≈N_2跟N_1爱看戏

ii. N_1跟N_2要滑头 ≠N_2跟N_1要滑头

c. 分解法（N_1と N_2を分解して述語と組み合わせるテスト）

i. N_1跟N_2爱看戏 ≈N_1爱看戏+ N_2爱看戏

ii. N_1跟N_2要滑头 ≠N_1要滑头 + N_2要滑头

d. 插入法（副詞やその他のものをN_1と跟の間に挿入するテスト）

i. N_1跟N_2爱看戏 ≠N_1经常跟N_2爱看戏

ii. N_1跟N_2要滑头 ≈N_1经常跟N_2要滑头

e. 題化法（N_1の後にポーズか語気を表すものを入れて話題化するテスト）

i. N_1跟N_2爱看戏 ≠N_1啊，跟N_2爱看戏

ii. N_1跟N_2要滑头 ≈N_1啊，跟N_2要滑头

f. 转换法（N_1を[N_2+VP]の後に移動するテスト）

i. N_1跟N_2爱看戏 ≠ 跟N_2爱看戏，N_1认为没必要

ii. N_1跟N_2要滑头 ≈ 跟N_2要滑头，N_1认为没必要

(65) (64)のまとめ：

方法 / 类别	替　代	互　換	分　解	插　入	題　化	转　換
跟[1]	+	+	+	-	-	-
跟[2]	-	-	-	+	+	+

2.3.2. 本章の提案

上述した先行研究は、いずれも he(和)，gen(跟)の品詞分析にとどまったものであり、更

なる分析が展開されていない。本論文では、２種類の he(和)があるという事実に基づいて、he(和)には、母集団とその構成要素であるメンバーがかかわっており、メンバーの間に介在する関係（並立関係か協力関係か）が異なることにより、２種類の構造がなされていると考え、以下のように提案する。

(66) he(和)は、α-with-GIC（以下：He-with-GIC）、もしくは α-and-GIC（以下：He-and-GIC）という２種類の α-GIC をなす[12]。

he(和)が現れる(67)は、実は、α-and-GIC と α-with-GIC の２種類の可能性があるため、(69)と(71)の２種類の図式のように、２つの意味解釈ができるのである。

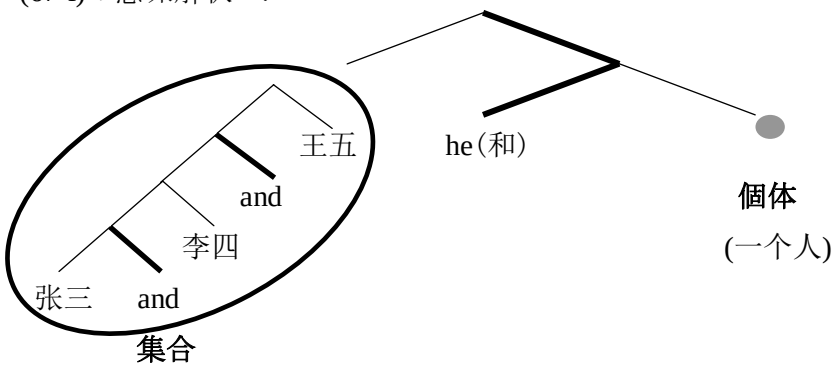
(67) 张三(和)李四 和 王五
張三 He 李四 He 王五

i. 張三と李四と王五（一人ずつ）
ii. （一つの集合）張三は、李四、王五と

2.3.2.1. α-and-GIC としての he(和)

(68) He-and-GIC では、he(和)は、AND 集合の主要部 and において、音形的に具現化する。

(69) (67-i)の意味解釈[13]：



张三(和)李四和王五

[12] 理由ははっきり分からないが、本論文を書いている現段階では He-with-GIC の可能性が優先的に考えられている。これを今後の研究課題としておく。

[13] この考え方は、基本的には上山 (2008) を踏襲している。

(69)においては、｛张三, 李四, 王五｝という一人一人のメンバーを指すのはもちろんのこと、３人が平等、並列関係で集合を成しているという解釈のほうがより重要である。

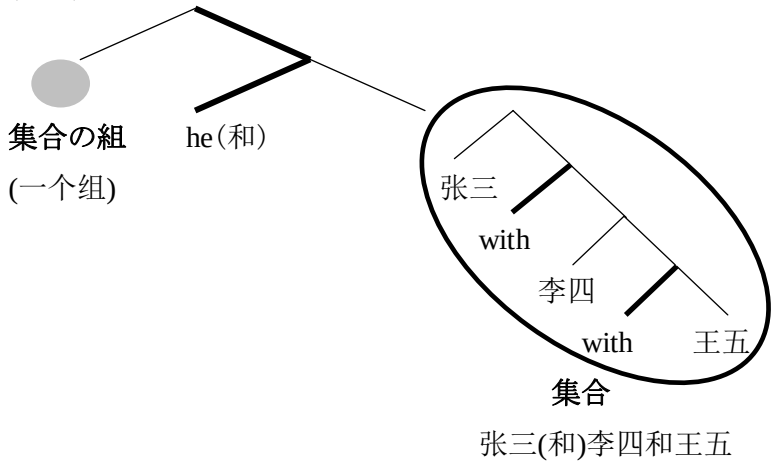
2.3.2.2. α-with-GIC としての he(和)

一方、he(和)は、α-with-GIC をなす場合もある。

(70) he(和)は、He-with-GIC の α の音形の具現形となり、WITH 集合の主要部 with において、音形的に具現化する。

そうすると、(67-ii)は、(71)のような意味解釈になる。

(71) (67-ii)の意味解釈：



(69)と違って、(71)においては、一人一人の個別のメンバーというより、一人がメイン、後の二人がサブという形で３人の集合を組み、そして、このような集合(組)は、一組（一つのペア）のみであるということが含意されている。

2.3.2.3. α-or-GIC としての huo(或), haishi(还是)

he(和)と違って、(72)のように、or という選択解釈の場合、(75)のような一つの意味解釈しかなく、huo(或)か haishi(还是)かの形態で現れる。

(72) a. 张三(或)李四 或 王五
張三 Huo 李四 Huo 王五

張三、或いは、李四、或いは、王五（一人）

b. 张三(还是)李四 还是 王五

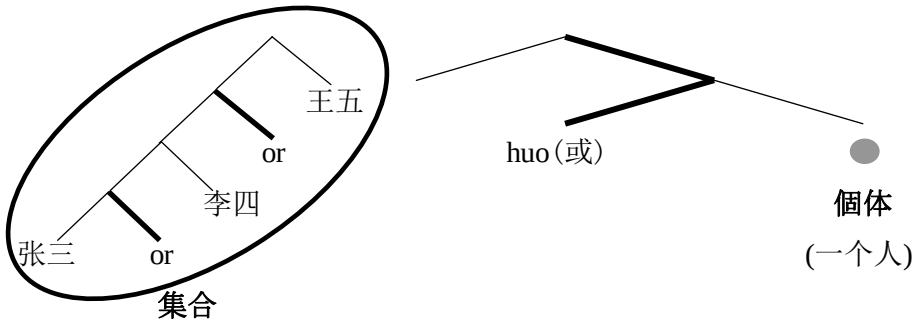
張三 Haishi 李四 Haishi 王五

張三、それとも、李四、それとも、王五（一人）

(73) huo(或)は、α-ior-GIC の α の音形の具現形であり、IOR 集合の主要部 ior において、音形的に具現化する。

(74) haishi(还是)は、α-eor-GIC の α の音形の具現形であり、EOR 集合の主要部 eor において、音形的に具現化する。

(75) (72a)の意味解釈：



张三（或）李四或王五

(69)と(75)の比較から分かるように、α-or-GIC は、(69)の α-and-GIC と相似している。ただし、OR 集合のメンバー同士が or というルーズな連結関係で結ばれているため、全体として、一つのまとまった集合(組)ではない。それよりむしろ一つ一つの個体の独立性が強調されている。

2.4. 分配解釈と集団解釈

次に、dou(都)[14], yiqi(一起)と wulun(无论)を、以下のように仮定する。

(76) Dou は、叙述関係 dou-predication を作る要素である。

---

[14] (i) dou の辞書的な意味解釈：

a. 表示总括，所总括的成分一般在前。 [『现代汉语词典』: p.304]
（総括を表し、総括する成分はその前に現れる。）

b. 表示总括全部。除问话以外，所总括的对象必须放在“都”前。也可以说“全都”，总括的意思更明显。 [吕叔湘等 (1980): p.105]
（総括、全部を表す。疑問文以外、総括される対象が「都」の前に置かなければならない。「全都」と言ってもよく、そうすると総括する意味がさらに明らかになる。）

(77) dou(都)は、Dou の音形の具現形である。

(78) Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていなければならない。

(79) Yiqi は、叙述関係 yiqi-predication を作るものである。

(80) yiqi(一起)は、Yiqi の音形の具現形である。

(81) Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

(82) wulun(无论)は、その c 統御領域にある eor 関係を and 関係に変換しなければならない[15] [16]。

(83) eor 関係を and 関係に変換できるのは、wulun(无论)タイプの要素しかない。

2.4.1. dou(都)との共起

2.4.1.1. He-and-GIC の場合

まず、(84)は、he(和)が dou(都)と共起して、分配解釈になる例である。

---

[15] 吕叔湘等 (1980)は、wulun(无论)について、以下のように述べている。また、wulun(无论)と似ているものには、bulun(不论)と buguan(不管)もある。

(i) [连]用于有表示任指的疑问代词或有表示选择关系的并列成分的句子里，表示在任何条件下结果或结论都不会改变。后边有“都”或“也”呼应。 [吕叔湘等 (1980):p.424]
[連詞]任意指定を表す疑問代名詞、もしくは、選択関係を表す並列成分が含まれる文に用いられ、いかなる条件の下でも結果、結論が変わらないことを表す。後半には、「都」「也」が後続することが多い。

[16] c 統御と c 統御領域は、Reinhart (1976)の定義を使用する。

(i) a. c 統御 (c-command):
Node A c(constituent)-commands node B if neither A nor B dominates the other and the first branching node which dominates A dominates B. [Reinhart (1976): p.32, (36)]

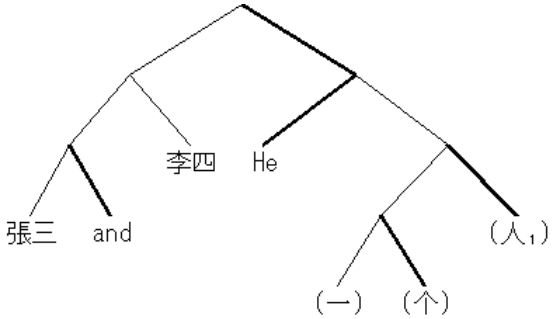
b. c 統御領域 (c-command domain):
The domain of a node A consists of A together with all and only the nodes c-commanded by A. (OR: The domain of a node A is the subtree dominated by the first branching node with dominates A. [Reinhart (1976): p.33, (38)]

(84)　　[张三 和 李四] **都** [ϕ 抬 起 了] [一 架 钢琴] 。cf. (1a)
　　張三 He 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

張三と李四は、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

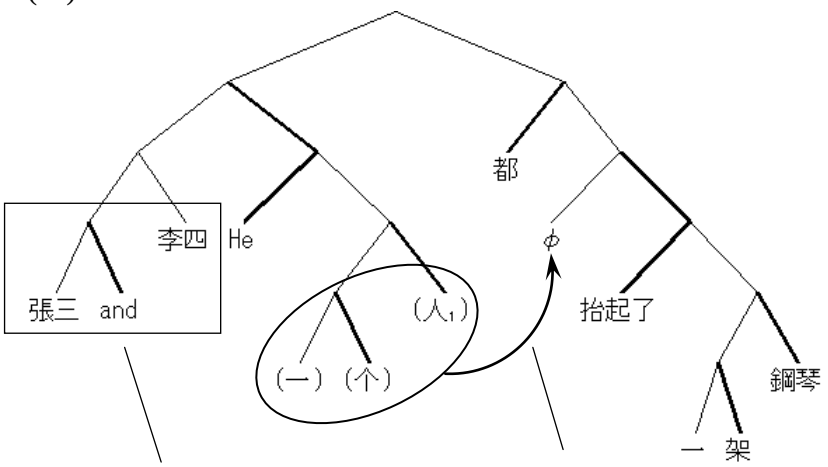
(67)によると、(84)にある「张三和李四」には、α-and-GIC と α-with-GIC の２つの可能性があり、それぞれ(85)と(87)の２種類の LF となる。

(85)　　He-and-GIC としての「张三和李四」の LF：



仮に、(85)の He-and-GIC が dou(都)と Merge すると仮定すると、(84)から、(86)のような LF ができるはずである。

(86)　　(84)の LF1：



Dou(都)による check　　**項位置に生起する ϕ と同一指標を持つ**

(86)においては､[张三和李四]の Merge の相手が dou(都)であるため､(76), (16a),(15)により、叙述関係が構築され、[张三和李四]が主部となる。

(76)　　Dou は、叙述関係 dou-predication を作る要素である。

(16)　叙述関係が構築される条件：

a.　叙述関係を誘発 (induce) する要素

(15)　叙述関係で結ばれる二つの構成素は、主部 (A=Topic)と述部 (B=Predicate)になる。

一方、Dou の c 統御領域には、空範疇のφが生起しているため、(17)が守られなければならない。

(17)　述部に生起する空範疇φは、主部要素と同一指標を持たなければならない。

α-GIC には、(25)の特性があるので、「抬起了」の項の位置に生起するφが、(85)にある音形を持たない「（一个人）」と同一指標を持つことになる。

(25)　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 は述部にある空範疇φと同一指標を持つことができる。

そうすると、(26)の条件を満たさなければならなくなる。

(26)　Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 は叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

つまり、Item1 である「张三 and 李四」は、Dou による check を受ける必要がある。

(78)　Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていなければならない。

AND 集合である「张三 and 李四」は、(78)を満たしている。そして、(18)〜(20)の操作が行われることになる。

(18)　叙述関係の主部になる集合は、連続的スキャニング (Sequential Scanning)という操作を受けなければならない。

(19)　連続的スキャニングとは：

集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作である。

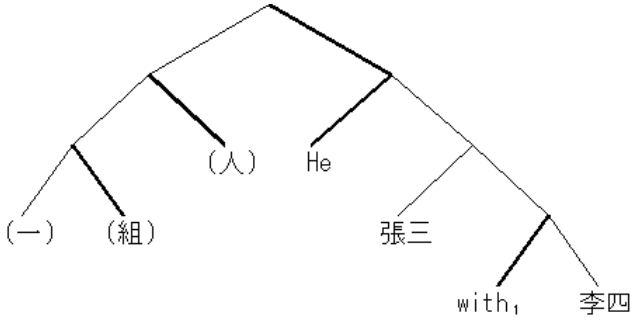
(20)　連続的スキャニングを経て構成された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によって結ばれる。

その結果、(86)を読み下すと、「一个人抬起了一架钢琴（一人の人が一台のピアノを持ち上げた）」という event があり、そのような人は、「张三」にも当てはまれば、「李四」にも当てはまるという意味になり、分配解釈ができるようになる。

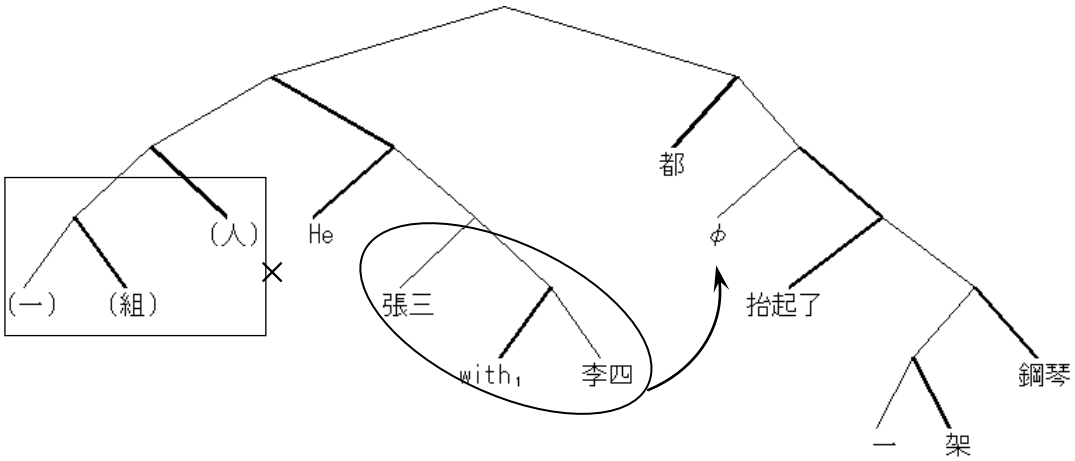
2.4.1.2. He-with-GIC の場合

しかし、(85)と違って、もし、(87)のような構造の「张三和李四」が(84)に生起していたら、容認できなくなる。その LF は(88)となる。

(87)　He-with-GIC としての「张三和李四」の LF：



(88)　(84)の LF2：*



(88)が容認できないのは、(78)の違反によるものである。

(78)　Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていな

ければならない。

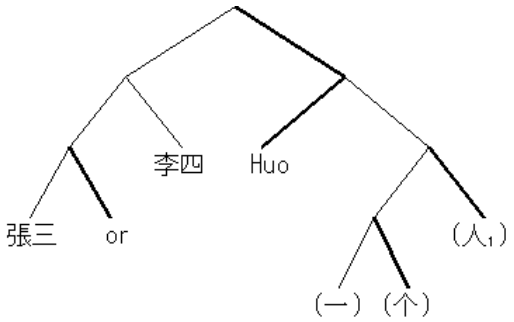
(87)の Item2 は、[1-ClP-NP]であり、Dou が必要とする AND 集合ではないため、(78)の条件に合致していない。

2.4.1.3. Huo-or-GIC の場合

また、α-or-GIC が生起する(89)の場合も、(88)と同様の理由で、dou(都)と共起できない。

(89) *[张三 或 李四] 都 [φ 抬 起 了] [一 架 钢琴] 。cf. (2a)
張三 Huo 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

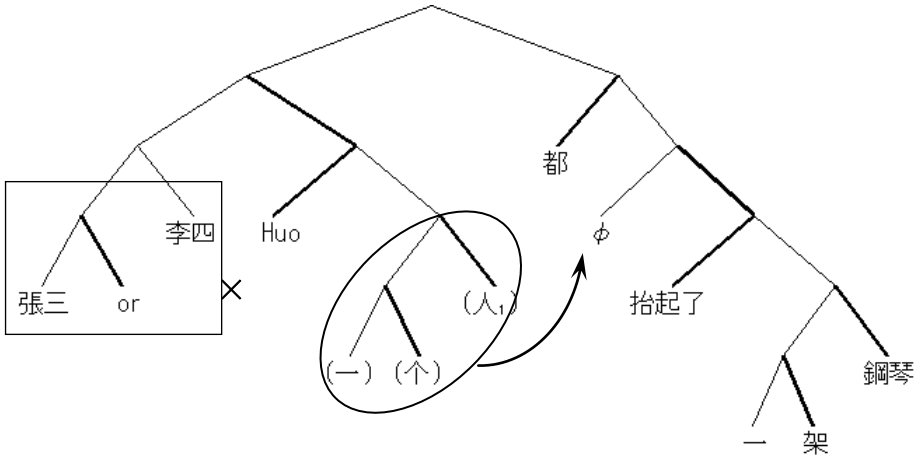
(90) Huo-or-GIC としての「张三或李四」の LF：



(78) Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていなければならない。

つまり、(90)の Item2 は、[张三 or 李四]であり、Dou が必要とする AND 集合ではないので、(78)の条件が満たせずに、容認できなくなる。

(91)　　(89)の LF：*



同様の理由で、(92)も(78)の条件が満たせないので、容認できない。

(92)　　*[张三 还是 李四] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。 cf. (3a)
　　張三 Huo　李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

ところが、(89)と違って、(92)の文頭に wulun(无论)[17]が生起すると、容認できるようになる。

(93)　　无论 [张三 还是 李四] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。 cf. (4a)
　　Wulun 張三　Haishi 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ
　　張三にしても、李四にしても、<u>それぞれ</u>、一台のピアノを持ち上げた。

これは、(39)と、(82)の wulun(无论)の制約があるからである。

(39)　　eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

(82)　　wulun(无论)は、その c 統御領域にある eor 関係を and 関係に変換しなければ

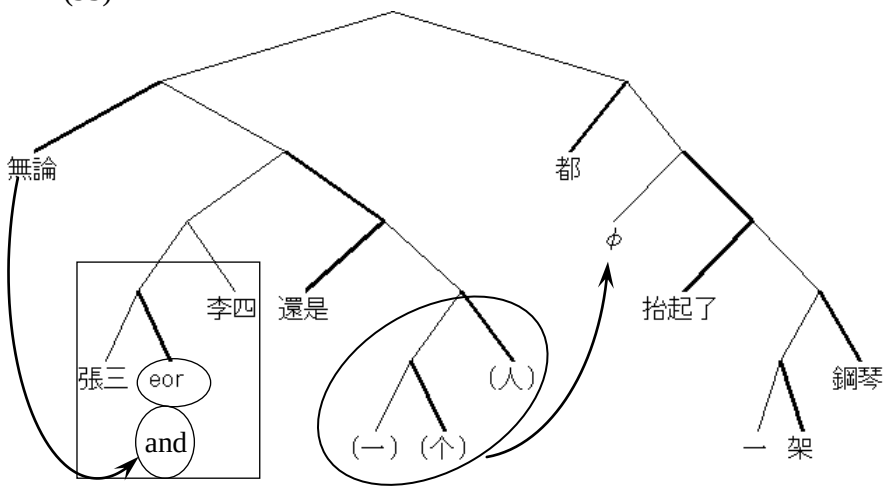
---

[17] 吕叔湘等 (1980, p.424)では、wulun(无论)について、以下のように記述されている。

(i)　　所总括的对象前可以用连词“不论、无论、不管”。（総括対象の前に、連詞「不论、无论、不管」が現れてもよい。）
　　a.　不论大小工作，我们**都**要把它做好。（ことの大小を問わず、真面目に取り掛からなければならない。）
　　b.　无论干什么事情，他**都**非常认真。（どんなことをやろうとしても、彼はとても真面目に取り組んでいる。）
　　c.　不管刮风下雨，我**都**坚持练习游泳。（風が吹こうが、雨が降ろうが、私はスイミングを続けている。）　[吕叔湘等 (1980): p.105)]

ならない。

(94)　　(93)の LF：

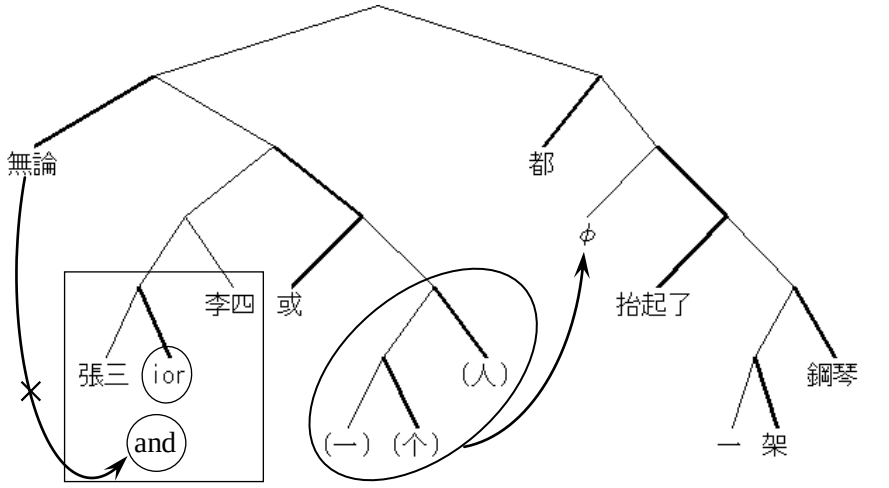


その結果、(93)は、(86)とほとんど同様になり、分配解釈がとれるようになる。一方、(95)は、(40)の制約により、(82)の条件が満たせないので、容認されない。

(95)　　*无论 [张三 或 李四] **都** [φ 抬 起 了] [一 架 钢琴]。cf. (6a)
Wulun 張三 Huo 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

(40)　　ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

(96)　　(93)の LF：*



2.4.2. yiqi(一起)との共起

次に、yiqi(一起)による集団解釈を分析する。dou(都)と同様に、yiqi(一起)も叙述関係を

作る要素である。

(97)　[张三 和 李四] 一起 [ϕ 抬 起 了] [一 架 钢琴] 。(1b)
張三 He 李四　Yiqi　持ち上げる Asp　一 Cl ピアノ

張三と李四は、一緒に一台のピアノを持ち上げた。

(79)　Yiqi は、叙述関係 yiqi-predication を作る要素である。

そうすると、(16a)の条件が満たされて、叙述関係が構築される。

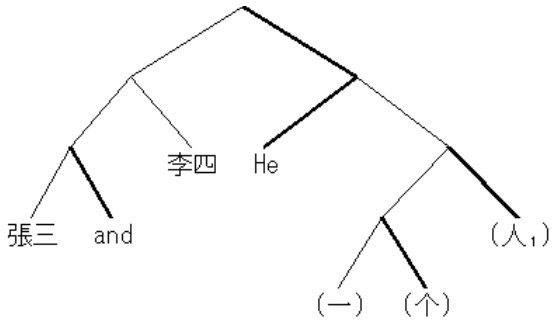
(16)　叙述関係が構築される条件：

a.　叙述関係を誘発 (induce) する要素

2.4.2.1. He-and-GIC の場合

仮に、(85)のような He-and-GIC としての「张三和李四」が、yiqi-predication の主部に生起すると考えると、(98)のような LF になる。

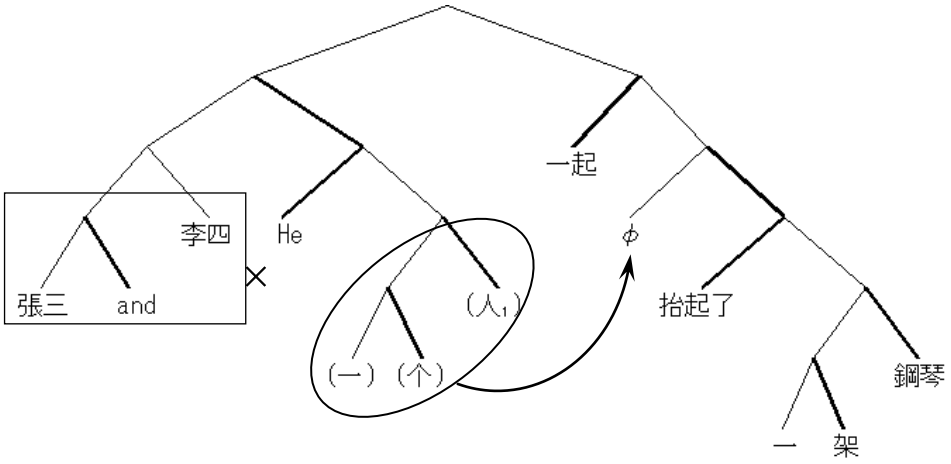
(85)　He-and-GIC としての「张三和李四」の LF：



Yiqi の c 統御領域に空範疇の ϕ が生起しているため、(17)は守らなければならない。

(17)　述部に生起する ϕ は、主部要素と同一指標を持たなければならない。

(98)　　He-and-GIC としての(97)の LF：*



(25)　　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 が述部にある空範疇 φ と同一指標を持つことができる。

そうすると、(26)の条件を満たさなければならなくなる。

(26)　　Item1 が述部の部分同一指標を持つと、Item2 が叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

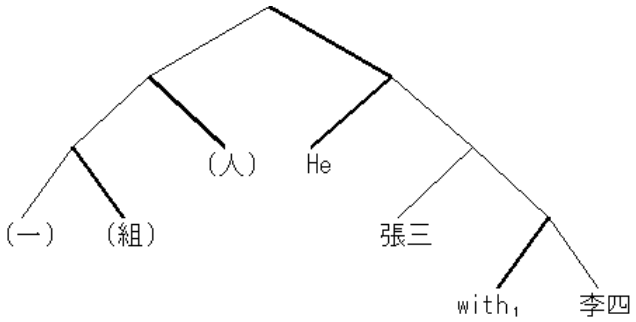
しかし、(85)の Item2 は、AND 集合なので、(81)の条件を満たせずに、容認不可能になる。

(81)　　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

2.4.2.2. He-with-GIC の場合

一方、もし LF が(87)である「张三和李四」が生起していると仮定すれば、容認できるようになる。

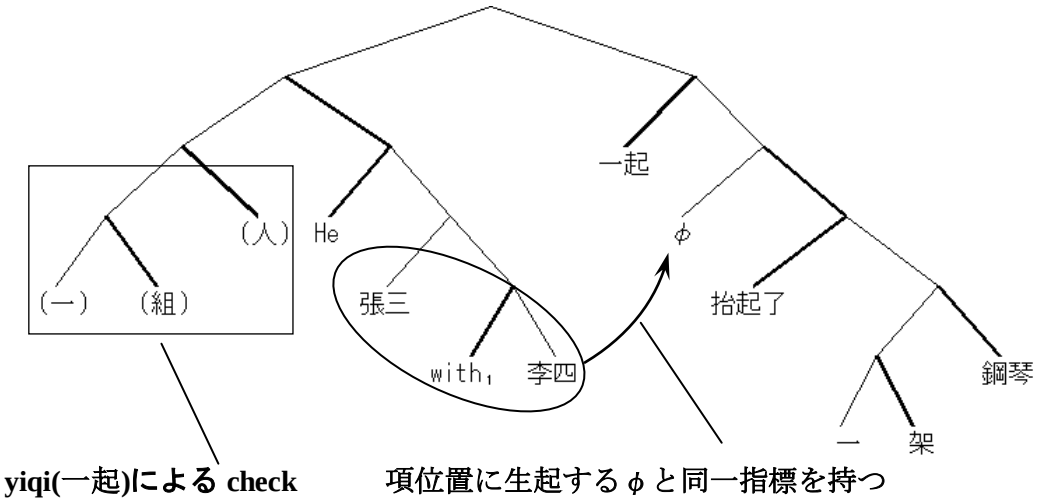
(87)　　He-with-GIC としての「张三和李四」の LF：



これは、(87)の「张三和李四」の Item2 位置に生起する「（一组人）」が(81)を満たしているからである。

(81)　　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

(99)　　He-with-GIC としての(97)の LF：ok



(99)をそのまま読み下すと、複数の人からなるペアが一組あり、このペアは、「张三 with 李四抬起了一架钢琴（张三と李四は共同で一台のピアノを持ち上げた）」という event と何らかの関係があるという意味解釈になる。

2.4.2.3. Huo-or-GIC の場合

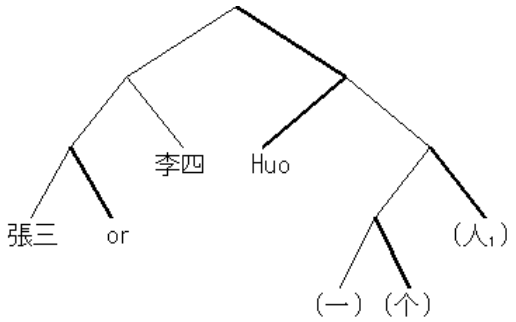
次に、α-or-GIC と yiqi(一起)の共起を見てみる。

(100)　　*[张三 或 李四] **一起** [φ 抬 起 了] [一 架 钢琴] 。cf. (2b)

張三 Huo 李四　Yiqi　持ち上げる　Asp 一 Cl ピアノ

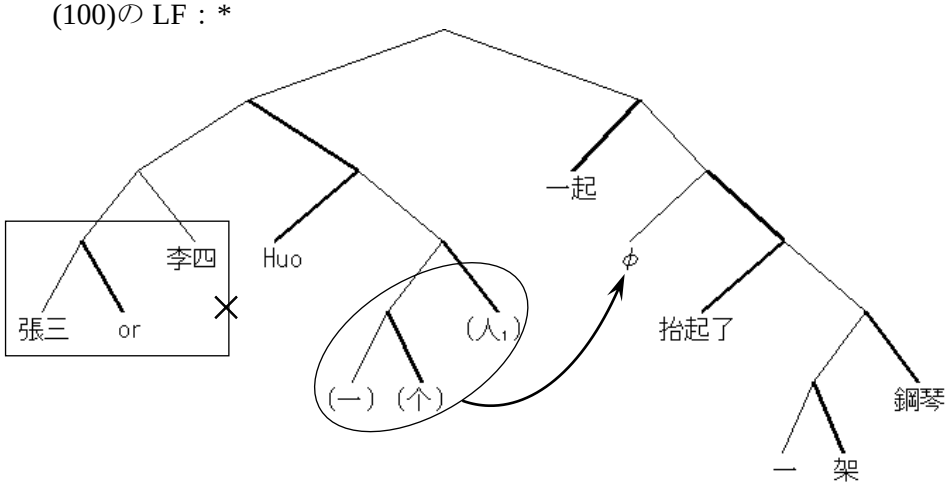
「张三或李四」は、(90)のような LF である。

(90)　Huo-or-GIC としての「张三或李四」の LF：



しかし、(100)の OR 集合「张三 or 李四」は yiqi-predication の(81)の条件が満たせない。

(101)　(100)の LF：*



(81)　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

(101)から分かるように、α-or-GIC の Item2 位置に生起している「张三 or 李四」は OR 集合であり、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]ではないため、(81)の違反により容認できない。同様の理由で、(102)も容認できない。

(102)　*[张三 还是 李四] 一起 [φ 抬 起 了] [一 架 钢琴] 。cf. (3b)
張三 Haishi 李四　Yiqi　持ち上げる　Asp 一 Cl ピアノ

2.5. 二種類の述語

2.5.1. 先行研究

2.5.1.1. Dougherty (1968)

Dougherty (1968)は、英語の動詞述語には、(103)の対称的述語 (symmetric predicates)と(104)の非対称的述語 (non-symmetric predicates)があることに着目した[18]。

(103) symmetric predicates:

a. be identical (to), be equal (to), be similar (to)

b. mix (with), meet (with) confer (with), discuss (with)

c. match, marry, equal

d. differ (from), diverge (from)

e. write plays (with), leave (with), kill (with) [Dougherty (1968): p.22, (4)]

(104) non-symmetric predicates:

a. collide (with), be in love (with), share (with)

b. bump (into), crash (into)

---

[18] Dougherty (1968)と違って、Bennett (1974), Roberts (1990)は、英語の文の述語の部分の distributivity に注目して、述語には、「individual-level」のものと、「group-level」のものがあると述べた。また、Roberts (1990)では、(i)にある「be a pop star」のような述語は、「distributive predicate」と位置づけられている。

(i) a. John, Paul, George, and Ringo are pop stars.
b. Paul is a pop star. [Roberts (1990): p.88, (31)]

そして、Roberts (1990)は、(ii), (iii)にある「disperse」,「walk together」のような述語が「group-level」であり、それが生起すると、主語位置には、group を表すものしか生起できないと述べている。

(ii) a. *John disperses.
b. The committee disperses. [Roberts (1990): p.88, (28)]
(iii) a. *John walks together.
b. The men walk together. [Roberts (1990): p.88, (29)]

Link (1983)では、このような述語は「collective predicate」と呼ばれている。

(iv) a. The children built the raft.
b. The Romans built the bridge.
c. Tom, Dick, and Harry carried the piano upstairs.
d. The playing cards are scattered all over the floor.
e. The members of the committee will come together today.
f. Mary and Sue are room-mates.
g. The girls hated each other. [Link (1983): p.127, (2-8)]

c. touch (on), border (on)

d. bump (against), touch (against) [Dougherty (1968): p.22, (5)]

Dougherty (1968)は、もし(105a)から(105b)、または(105c)へ入れ替えても、意味がさほど変わらなければ、それが、(103)の「symmetric predicates」だというルールを作った。

(105) The transformational conjunct movement formulation:

a. X and Y ------.

b. X ------ (PREP) Y.

c. Y------ (PREP) X. [Dougherty (1968): p.22, (1-3)]

2.5.1.2. 劉月華 他 (1988)

中国語にも英語と似たような対称的な述語と非対称的な述語の対立が見られる。たとえば、劉月華 他 (1988)は、介詞 gen(跟)に関して、以下のように述べている。

(106) “跟”は必ず、甲，乙双方が参与する動作・行為や事柄，状態を述べる表現中に用いられる。ここで、甲は、主導的なはたらきをするものであって、前文の主語である。一方、乙は、動作・行為或いは事物の参与者であったり、関係者或いは動作の対象であったりし、“跟”によって導入されるものである。甲と乙の位置は互いに入れ替えることができない。

[劉月華 他 (1988): p.244]

そして、「この種の用法の“跟”は、よく以下の動詞やフレーズと組み合わせて用いられる」（劉月華 他 (1988): p.245）。

(107) 握手（握手する），见面（会う），结婚（結婚する），配合（ペアを組む），共事（一緒に仕事をする），打交道（付き合う），打仗（戦争する），打架（けんかする），吵嘴（口げんかする），闹矛盾（けんかする），谈得来（話が合う），合得来（気が合う），比赛（試合する），讨论（議論する），争论（論争する），辩论（弁論する），商量（相談する），谈话（話し合う），聊天（雑談する），平行（並行する），垂直（垂直に交わる），相交（交わる），互补（補い合う）[19]

[19] 具体的な例文は、(59)を参照されたい。

2.5.1.3. 张斌，张谊生 (2000)

一方、张斌，张谊生 (2000)は、「交互类短语（交互型フレーズ）」[20]というものを取り上げて、(108)のように分類している[21]。

(108) a. 对待类动词：都具有“争、谐、离、合”的语义特征（応対型の動詞：「争う」「合わせる」「離れる」「集まる」意味合いが含まれるもの）
相逢（会う）、同居（同棲する）、合作（協力する）、对抗（対抗する）、通航（通行する）、交流（交流をする）、结婚（結婚する）、分别（分かれる）、会谈（会談する）、商量（相談する）、接触（触れる）、接吻（キスする）、互换（交換する）、并行（並行する）、并列（並列する）、斗法（けんかする）、斗嘴（口げんかする）、比较（比較する）、比试（試合する）、约会（デートする）、约定（約束する）、闲谈（雑談する）、闲聊（雑談する）、竞争（競争する）、竞赛（競争する）、团结（団結する）、离别（分かれる）、诀别（決別する）、断交（絶交する）、讲和（仲直りする）、畅谈（歓談する）、翻脸（開き直る）、顶牛（意地を張り合う）、偷情（浮気をする）、握手（握手する）、齐名（同様に有名である）、干杯（乾杯する）、切磋（切磋琢磨する）、谈心（胸中を打ち明けあう）、来往（行き来する）、斗争（争う）、决战（決戦する）等

b. 关系类名词：都具有“敌、友、亲、逑”的语义特征（関係型の名詞：「敵対」「友情」「親類」「連れ合い」の意味合いが含まれる）
同学（同級生）、同乡（同郷）、同党（同党）、同窗（同窓生）、同伙（仲間）、战友（戦友）、良友（良友）、密友（親友）、校友（校友）、亲家（姻親）、本家（本家）、冤家（かたき）、仇人（かたき）、情人（恋人）、敌人（敵）、爱人（配偶者）、知己（知己）、知音（知己）、相知（知り合い）、

---

[20] はっきりと定義されているわけではないが、「交互类短语（交互型フレーズ）」という名称だけで判断すると、これは Dougherty (1968)における対称的述語 (symmetric predicates)のように見える。

[21] 张斌，张谊生 (2000)は、(i)のような形容詞述語も「交互类短语（交互型フレーズ）」の１種としてまとめているが、本論文では、これを取り扱う対象にしていないため、これに関する議論は割愛する。

(i) 相对类形容词：都具有“亲、疏、异、同”的语义特征
相似、相同、相像、相反、类似、近似、对等、对立、亲热、亲密、和睦、和谐、友好、一样、一致、合拍、投机、般配、热乎、恩爱、陌生、隔膜、不同 等

相识（知り合い）、亲属（親類）、情敌（恋のライバル）、仇敌（かたき）、死敌（不倶戴天の敵）、对手（ライバル）、对头（敵）、对象（相手）、情侣（恋人）、配偶（配偶者）、老伴（老人夫婦）、乡亲（同郷の人）、连襟（相婿）、街坊（隣人）、邻居（隣近所）、妯娌（相嫁）、搭档（相棒）等

[张斌，张谊生 (2000): p.99]

また、张斌，张谊生 (2000: p.100)によると、(108a, b)の交互型の述語には、それぞれ(109)と(110)のように、２種類の意味関係（対等関係、主従関係）が含まれている[22]。

(109) a. 我 和 她 分手 了，其实，我早 就 想 和 她 分手 了。
僕は彼女と別れた。本当は、とっくに彼女と別れたかったのだ。
b. 我 和 她 分手 了，我 们 俩 终于 心平气和地 分手 了。
僕と彼女は別れた。僕たちはようやく冷静で穏やかに別れたのだ。

(110) a. 他 和 柱子 是 朋友， 但他并没有因为朋友就放弃原则。
彼は柱子と友達であるが、彼は決して友達だからといって節度を失ってはいない。
b. 他 和 柱子 是 朋友，他们俩从小就在一起，非常了解。
彼と柱子は友達であり、彼らは幼馴染で、お互いよく知っている。

しかし、「结婚（結婚する）」という一例を取り上げてみても分かるように、（明示的には書かれていないが、）劉月華 他 (1988)は、(107)のような動詞は、主従関係を表す、(106)のような「跟」に後続して使えるので、非対称的な述語だと理解しているようである。これに対して、张斌，张谊生 (2000)は、これを(108a)のような交互型の述語（対称的な述語）とみなしているようである。また、(108b)に関しては、劉月華 他 (1988)では特に言及されていない。

さらに、张斌，张谊生 (2000)は、分配解釈の dou(都)類のものを「统括标记」、集団解釈の yiqi(一起)類のものを「协同标记」と呼んで、これらのものと共起できるのは、対等関係の「跟[1]（本論文でいう He-and-GIC）」であると述べている[23]。しかし、実際には、(110)

---

[22] 「据考察，交互类短语同“N_1 跟 N_2”组合时，实际上都隐含着两种语义关系：对等关系和主从关系」（张斌，张谊生 (2000, p.100)）

[23] 张斌，张谊生 (2000)は、(i)のように述べて、以下のような例文を挙げている。

(i) 统括标记和协同标记。统括标记是指范围副词“都、全、全都”等，协同标记是指协同副词“一起、一道、一同、一齐、一处、一块儿”等。凡与这两种标记共现的“跟”，

タイプの名詞述語、たとえば「夫妻」の場合、「跟 [1]」に dou(都)を共起させても、yiqi(一起)を共起させても、容認できない。つまり、この容認性の悪さは、「跟 [1]」にあるのではなく、述部の「是夫妻」にあると言わざるを得ない。（(110)についても同様である。）

(7) a. *[张三 和 李四] **都** [是] [夫妻] 。
張三 He 李四 Dou Shi 夫婦

b. *[张三 和 李四] **一起** [是] [夫妻] 。
張三 He 李四 Yiqi Shi 夫婦

c. [张三 和 李四] [是] [夫妻] 。
張三 He 李四 Shi 夫婦

張三と李四は、夫婦である。

一方、(109)タイプの動詞述語、たとえば、「结婚了」という述語は、(8a)のように、dou(都)と共起して分配解釈ができるが、(8b)のように、yiqi(一起)と共起すると集団解釈がとりにくい。

(8) a. [张三 和 李四] **都** [结婚 了] 。
張三 He 李四 Dou 結婚する Asp

張三と李四は、<u>それぞれ</u>（他人と）結婚した。

b. ?[张三 和 李四] **一起** [结婚 了] 。
張三 He 李四 Yiqi 結婚する Asp

c. [张三 和 李四] [结婚 了] 。
張三 He 李四 結婚する Asp

張三と李四（二人）は、結婚した。

上述した対立を見ると、(108)のように、おおまかに「交互类短语（交互型フレーズ）」としてまとめるのは適切ではないと言わざるを得ない。したがって、本論文では、(108a)と(108b)を違う種類の述語として分けて考えたい。

必定是“跟 [1]”。

a. 那天晚上，老李和老王[都]下棋去了。（あの晩、李さんも王さんも（ともに）囲碁を打ちに行った。

b. 丁一山和何世雄[一起]交涉了好几次。（丁一山と何世雄は、（一緒に）何回も交涉した。）

c. 丽萍和国明[一道]结婚，只是一种巧合。（麗萍と国明が（一緒に）結婚したのは、単なる偶然に過ぎない。）

d. 多年来，杨宪益和戴乃迭[一齐]合译了多种中外古典名著。（ここ数年来、楊憲益と戴乃迭が（一緒に）中国と外国の古典作品を何本か共訳した。）

2.5.2. 「结婚」という述語

久野 (1973)によると、英語の「got married (結婚する)」には、２種類の解釈がある。

(111) John and Mary got married.

a. 夫婦関係：

John と Mary が夫婦になった。

b. 別々の結婚：

John が誰かと結婚し､Mary が誰かと結婚した。 [久野 (1973): p.68, (2)]

一方、英語と違って、中国語の動詞述語「结婚（結婚する）」には、ambiguity がない。「結婚する」というのは、普通二人がいてはじめて成り立つ行為なので、「XP+with+YP」のようなものを項にとると考えて何ら不思議もない。しかし、(8b-i)のように、yiqi(一起)と共起させて集団解釈をとろうとすると、容認できない。これに対して、それが生起していない(8c)のほうがかえって容認できるのである。また、もし(8b)の語順であえて解釈しようとすると、(8b-ii)にしかならない。

(8) b. [张三 和 李四] 一起 [结婚 了] 。
張三 He 李四 Yiqi 結婚する Asp

i. *張三と李四は、結婚した。

ii. 張三と李四は、（それぞれ他の人と）共同の結婚式を行った。

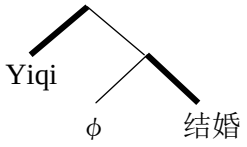
c. [张三 和 李四] [结婚 了] 。
張三 He 李四 結婚する Asp

張三と李四は、結婚した。

そこで、本論文では、(112)のように仮定する。

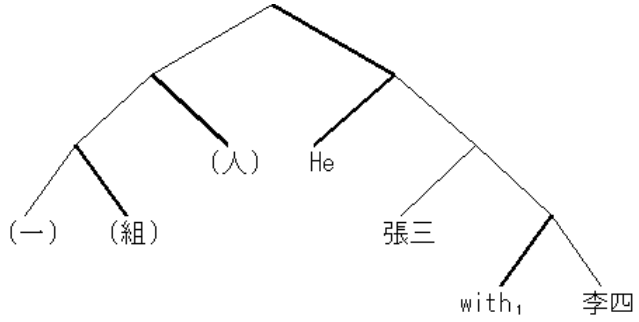
(112) 「结婚」のようなタイプの述語には、音形を持たない Yiqi が含まれている。

(113) 「结婚」タイプの述語の構造：

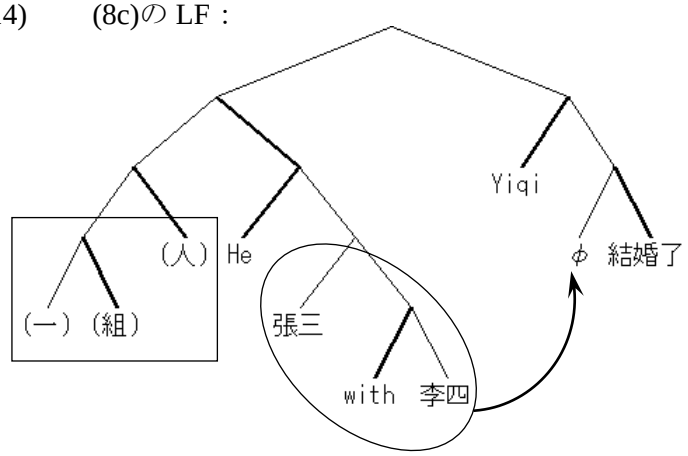


すると、α-with-GIC の構造を持っている(87)のような「张三和李四」が「结婚」と Merge して、(114)のようになる。

(87)　　α-with-GIC としての「张三和李四」の LF：



(114)　　(8c)の LF：



(16)　　叙述関係が構築される条件：

a.　叙述関係を誘発 (induce) する要素

Yiqi の c 統御領域に空範疇の φ が生起しているため、(17)を守らなければならない。

(17)　　述部に生起する φ は、主部要素と同一指標を持たなければならない。

(25)　　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 が述部にある空範疇 φ と同一指標を持つことができる。

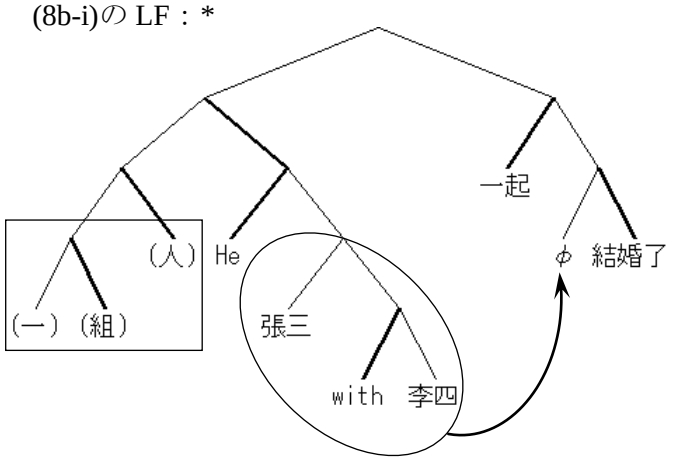
そうすると、(26)と(81)の条件を満たさなければならなくなる。

(26)　　Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 が叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

(81)　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

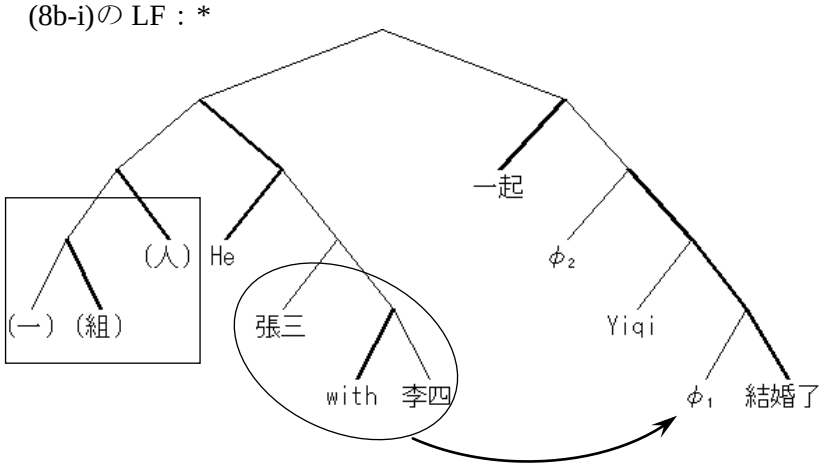
一方、これに対して、(8b-i)の場合、音形を持つ yiqi(一起)が生起すると、形式的には(115)のようになっており、容認可能なはずである。

(115)　(8b-i)の LF：*



しかし、(112)と合わせて考えてみると、実は、「结婚」という述語が自ら Yiqi を作り出しているので、(8b)の本当の LF は、(116)であると考えられる。つまり、その LF には、Yiqi が２回生起することになる[24]。

(116)　(8b-i)の LF：*



[24] 本来ならば、２個目の yiqi(一起)が生起すると、なぜ２個目のφが同時に生起するのか説明しなければならないが、現段階では、これは、yiqi(一起)による効果だと考え、詳しい議論は、別の機会に譲る。同様に、下記 dou(都)の連続に伴うφ生起も今後の課題とする。

その結果、{张三 with 李四}が一つ目の Yiqi の c 統御領域にある ϕ_1 と同一指標を持つことができても、yiqi(一起)の c 統御領域にある ϕ_2 と同一指標を付与する構成素が足りなくなるので、(17)の違反により、容認できなくなる。

(17)　　述部に生起する ϕ は、主部要素と同一指標を持たなければならない。

しかし、(8a)がなぜ容認可能なのか、まだ説明できていない。

(8)　a.　[张三 和 李四] **都** [结婚　了] 。
　　張三 He　李四 Dou 結婚する Asp

　　張三と李四は、（他人と）<u>それぞれ</u>結婚した。

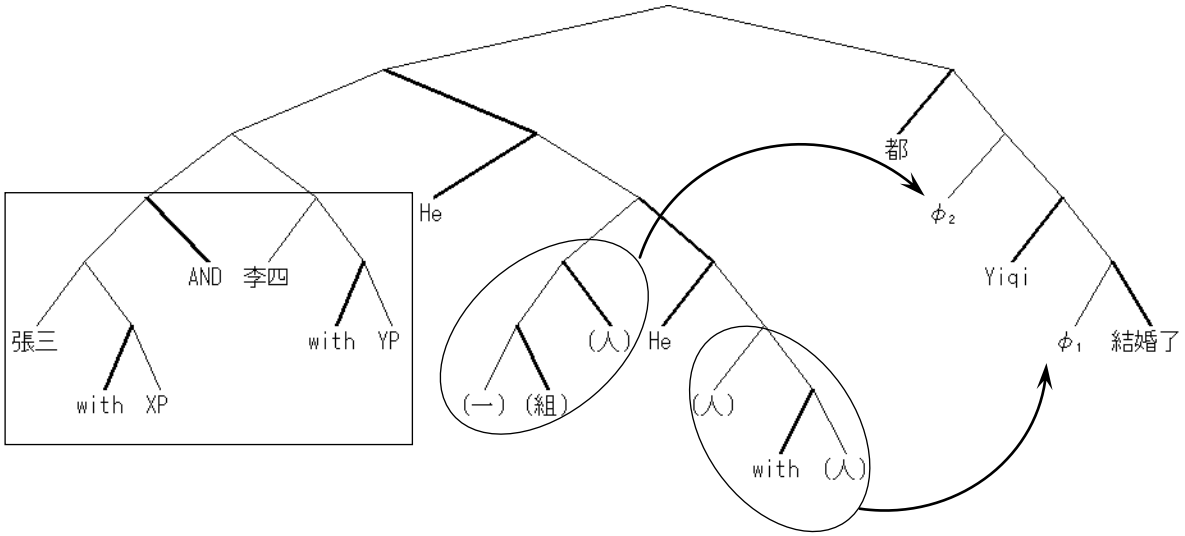
(112)に基づけば、(8a)は、実は、次のようになっているはずである。

(117)　　[张三 和 李四] **都** Yiqi [结婚　了] 。
　　張三 He　李四 Dou　　結婚する Asp

　　張三と李四は、（他人と）<u>それぞれ</u>結婚した。

そうすると、(117)の LF は、(118)になると考えられる。

(118)　　(117)の LF：



つまり、(118)においては、{(人)with(人)}が Yiqi の c 統御領域にある ϕ_1 と同一指標を持ち、{(一组人)}が Yiqi の check を受けられるので、Yiqi による集団解釈の条件が満たせる形になる。そして、{(一组人)}が dou(都)の c 統御領域にある ϕ_2 と同一指標を持ち、AND{张三

with XP, 李四 with YP}が dou(都)の check を受けられるので、dou(都)による分配解釈の条件がクリアできる。(118)をそのまま読み下すと、「结婚了」という行為を行ったのは、二人からなる一組であって、「张三 with XP」と「李四 with YP」は、それぞれその一組と何らかの関係を持っている。つまり、「张三」と「李四」は、結婚相手ではなく、それぞれ他人と結婚したという解釈になってしまうのである。

次に、(8b)を分析する。

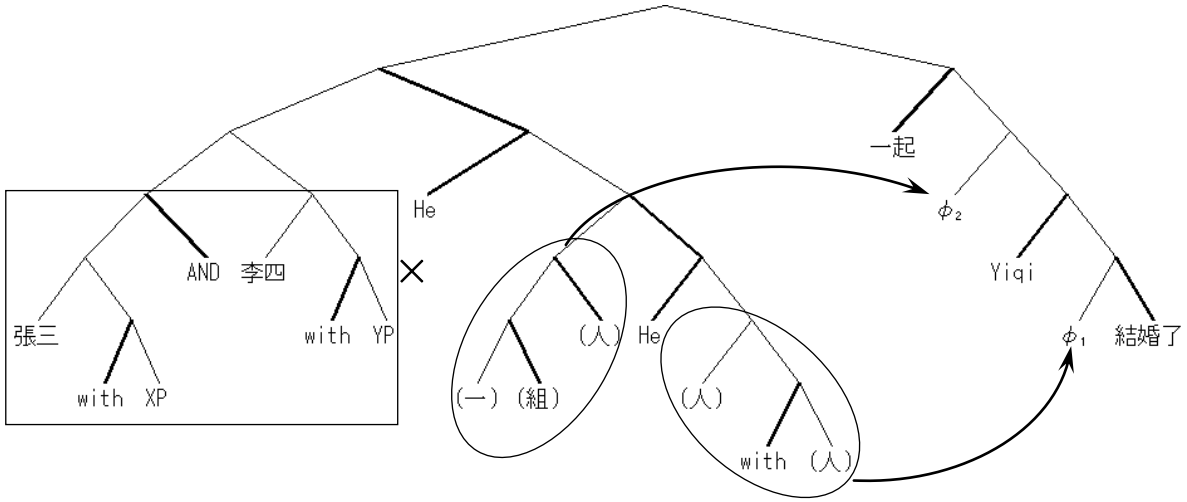
(8) b. [张三 和 李四] 一起 [结婚 了] 。
張三 He 李四 Yiqi 結婚する Asp

i. *張三と李四は、結婚した。

ii. 張三と李四は、それぞれ他の人と、共同の結婚式を行った。

(119)は、(8b-i)の LF であり、容認できない。

(119) (8b-i)の LF:*

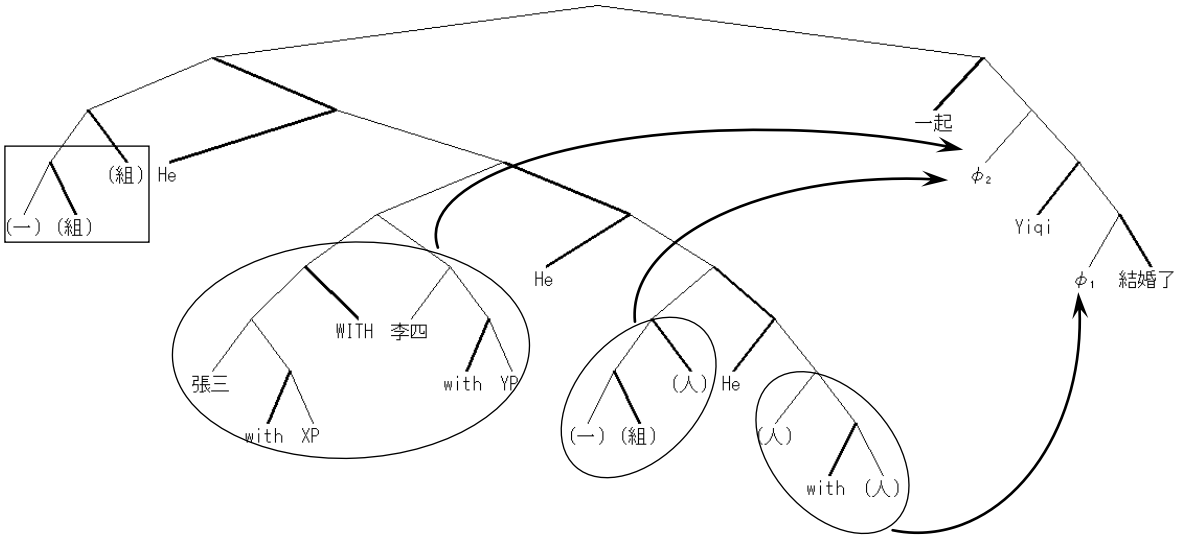


これは、ϕ_1も、ϕ_2も、音形を持たない Yiqi も、それぞれの条件が満たされているが、yiqi(一起)の check が満たされていない。つまり、AND{张三 with XP, 李四 with YP}が、yiqi(一起)の check を受けられないため、容認できない。

(81) Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

一方、もし、AND{张三 with XP, 李四 with YP}がさらに組をなすと、組からなる組の{(一组组)}が yiqi(一起)の check を受けられる。

(120)　　(8b-ii)の LF：



(120)を読み下すと、「结婚了（結婚した）」のは、二つのグループであり、グループのメンバーは、それぞれ２名である。また２つのグループは、同じ場所で同時に結婚式を挙げたので、グループからなるグループが形成されていると理解してよい。

2.5.3. 「是夫妻」という述部

(7)にある「夫妻」は、张斌，张谊生 (2000)の言い方では、(108b)の「关系类名词（関係型名詞述語）」に相当するものである。しかし、(110b)の例にもあるように、张斌，张谊生 (2000)は、「关系类名词（関係型名詞）」だけに注目して、本当の動詞述語「是」の存在を見落としている。そこで、本論文では、(121)を踏まえて、(108b)タイプの動詞には、二つの特徴があることを提案する。

(121) a.　*[张三] [是] [夫妻] 。
　　张三　Shi　夫婦

　　b.　[张三 和 李四] [是] [夫妻] 。
　　张三 He　李四　Shi 夫婦

　　张三と李四は、夫婦である。

(122) a.　[XP 和 YP]のような α-GIC が生起しなければならない。

　　b.　述部は、動詞述語の「是」と「关系类名词（関係型名詞）」からなっている。

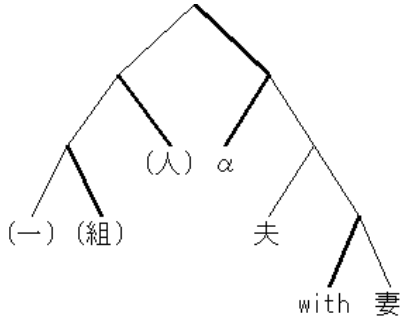
本論文では、「夫妻」を「交互类短语（交互型フレーズ）」とみなさず、shi(是)と「夫妻」を以下のように仮定する。

(123)　shi(是)という述語は、全く同様の構造を二つ項として取る二項述語である。

(124)　shi(是)は、α-GIC を項にとることが可能である。

(125)　「夫妻」は、α-with-GIC の構造をなす compound（複合語）である[25] [26]。

(126)　α-with-GIC としての「夫妻」：



一方、「张三和李四」には、(85)と(87)の二つの可能性がある。

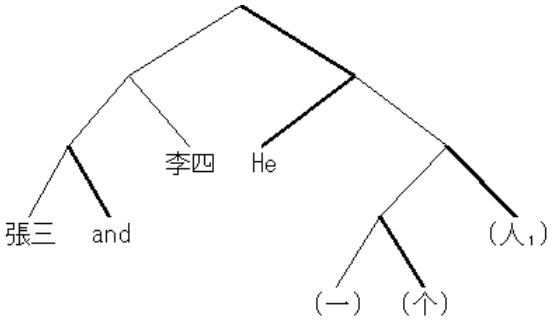
---

[25] Chao (1968)は、chapter 6.3 の Coordinate Compounds において、中国語の複合語名詞を以下のように分類している。次の(i-c)にある Collective nouns は、個体として使えないと記述している。(These cannot be used as terms for individuals.)

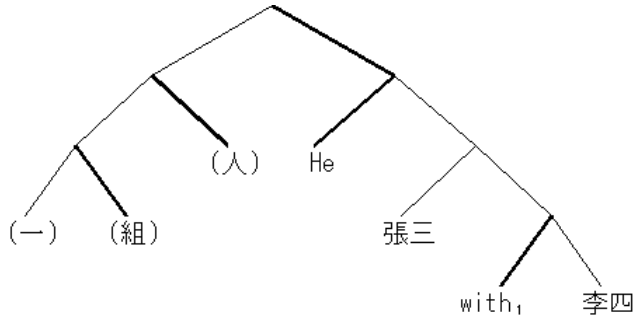
(i)　a.　Compounds of Synonyms:　[Chao (1968): pp.372-378]
租税，艰难，告示，声音，意思，多余，乖巧，爽快，周到，活动，清楚，明白など
b.　Compounds of Antonyms:
大小，长短，高矮，高低，厚薄，粗细，软硬，冷热，咸淡，浓淡
c.　Parallel Compounds:
(nouns)山水，风水，手脚，薪水，钱粮，板眼，皮毛，风雨，尺寸，
(Nouns formed exocentric ally from verbs)裁缝，告示，生冷，细软
(Collective nouns are often formed of correlative terms of address)父母，子女，兄弟，姐妹，夫妇

[26] Chao (1968)は、脚注 39 で「夫妇（夫婦）」を並行的な複合語 (Parallel Compounds)としているが、実際、「*妇夫」のように、「夫」と「妇」の順番を逆転できないので、本論文では、並行的な複合語 (Parallel Compounds)とみなさない。「夫妻」も「夫妇」と同様である。

(85)　　α-and-GIC としての「张三和李四」の LF：

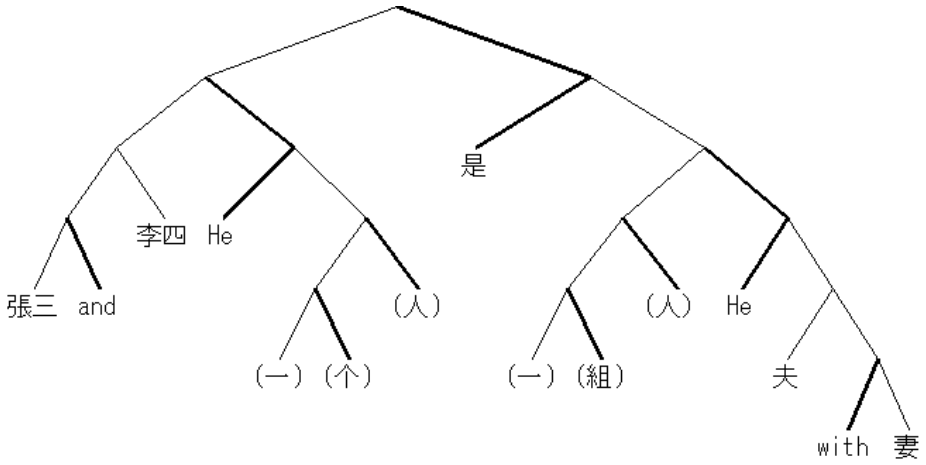


(87)　　α-with-GIC としての「张三和李四」の LF：

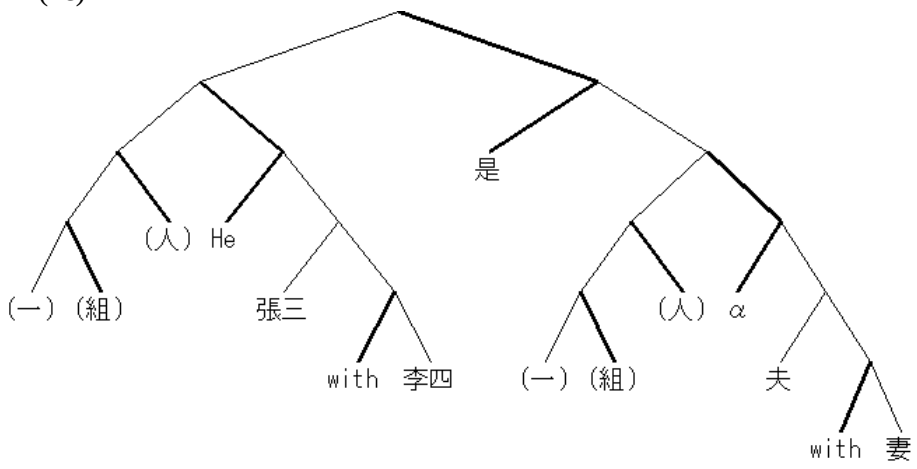


(126)の複合語「夫妻」が shi(是)と Merge すると、(127)と(128)の２種類の可能性があるが、(124)の shi(是)の条件が満たされるのは、(128)のような LF しかない。

(127)　　(7c)の LF1：*



(128)　　(7c)の LF2：

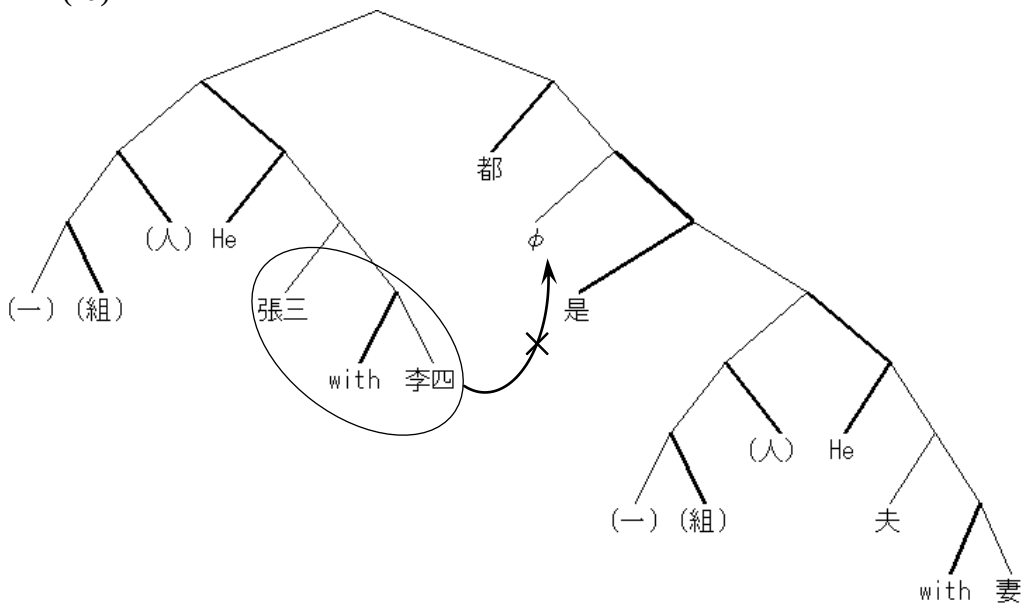


問題は、なぜ(7a)と(7b)が容認できないのかということである。

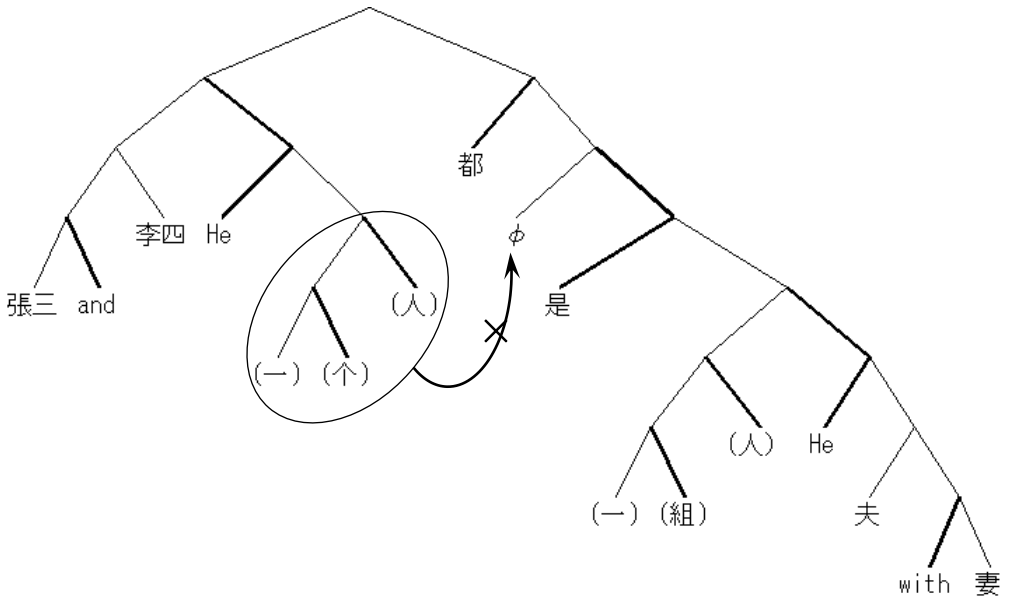
(7)　a　*[张三 和 李四] **都** [是] [夫妻] 。
　　張三 He　李四　Dou Shi 夫婦

[张三和李四]と、shi(是)と「夫妻」が Merge した LF にも２種類ありうる。

(129)　　(7a)の LF1：*



(130)　　(7a)の LF2：*



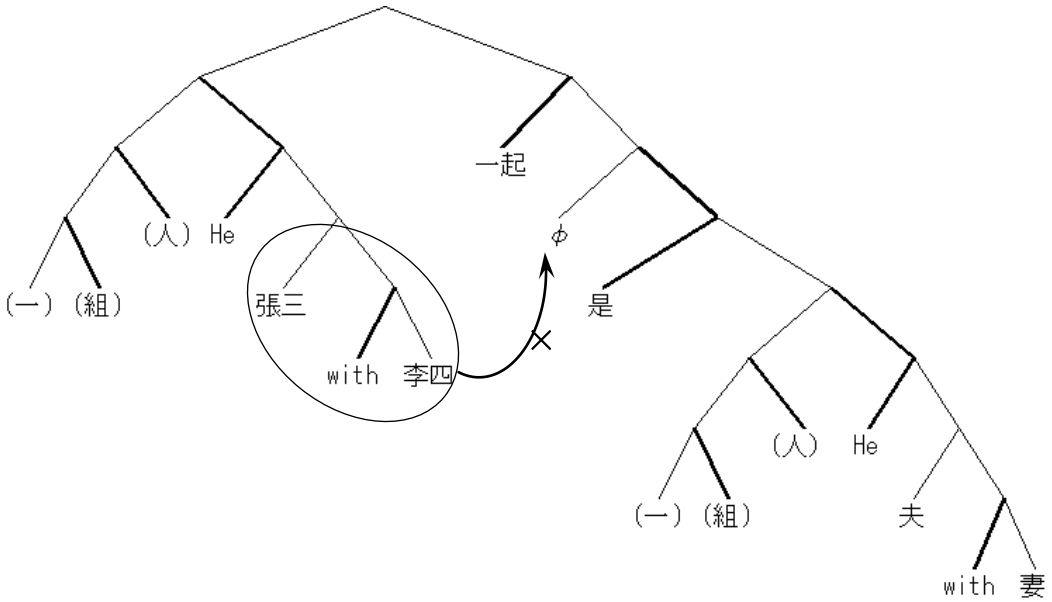
上記の二つが容認できないのは、いずれも(123)の条件が満たされていないからである。

(123)　　shi(是)という述語は、全く同様の構造を二つ項として取る二項述語である。

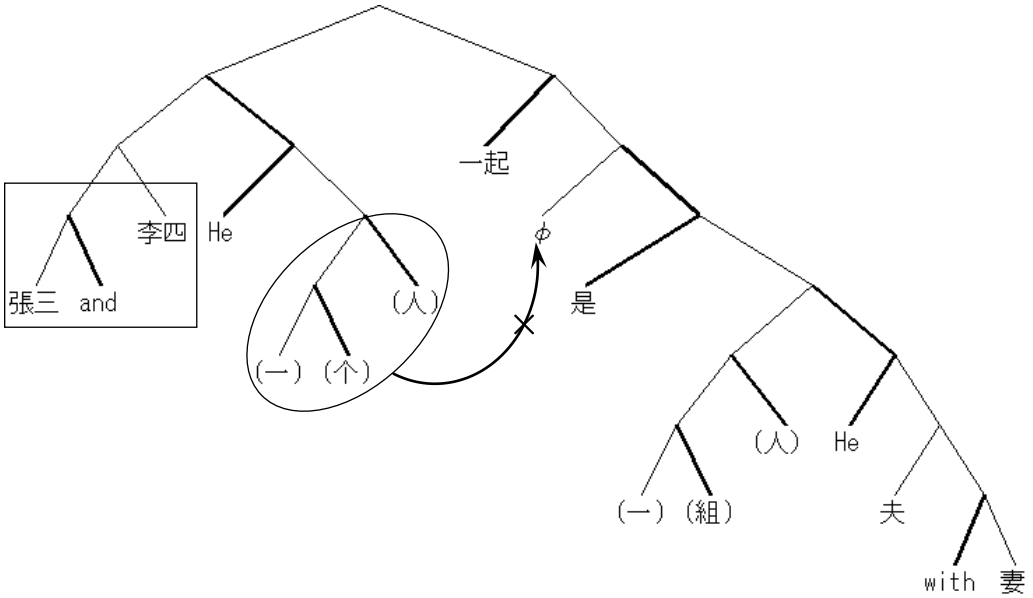
また、(7b)が容認できないことも、(7a)と同じ理由で説明できる。

(7)　b.　*[张三 和 李四] 一起 [是] [夫妻] 。
　　張三 He　李四　Yiqi　Shi 夫婦

(131)　　(7b)の LF1：*



(132)　　(7b)の LF2：*



(131)から分かるように、yiqi-predication が必要とする条件は満たされているものの、述語 shi(是)が必要とする条件が満たされていないので容認されないのである。

2.6. α-GIC の派生

2.6.1. lian(连)

そもそも単数解釈の NP、たとえば、「我（私）」や「张三」は、dou(都)とも yiqi(一起)とも共起できない。

(133) a. *[我] **都** φ [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
私 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *[我] **一起** φ [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
私 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

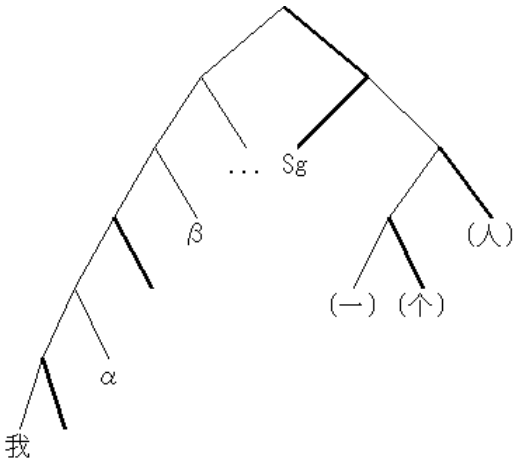
c. [我] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
私 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

私は一台のピアノを持ち上げた。

本論文では、単数解釈の NP を以下のように仮定する。

(134) 単数解釈の NP は、Sg (Singular の略) を主要部とする関係 (and も or も) 未定のままの α-GIC である。

(135) Sg-GIC としての「我」の LF：



(135)の LF から分かるように、「我」とα、βとの間に何の関係も持たないため、単なる一人で構成されている。α-and-GIC でもなければ、α-or-GIC でもない。したがって、(78)の条件も(81)の条件も、満たされない。

(78) Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていなければならない。

(81) Yiqi は、Item2 において、[1-ClP_{-Group}-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

ところが、(133)の「我」の前に、lian(连)という要素を入れると、(136a)の dou(都)による

分配解釈が容認できるが、集団解釈を要求する(136b)では依然として容認できない。さらに、単数解釈の(136c)も容認できなくなる。

(136) a. 连 [我] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
lian 私 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

私でさえ、一台のピアノを持ち上げた。

b. *连 [我] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
lian 私 yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *连 [我] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
lian 私 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

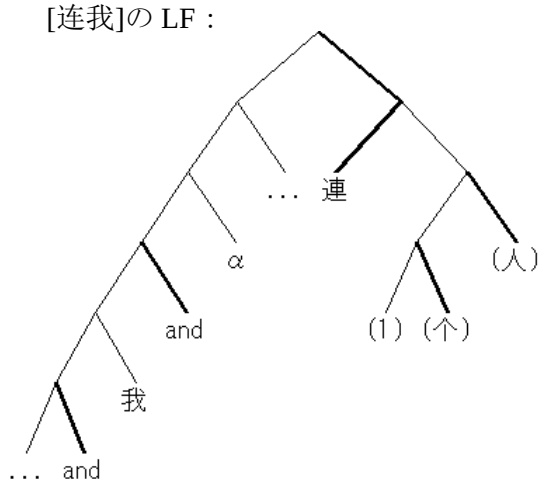
これはなぜだろうか。それは、lian(连)が(137)と(138)のような要素だからである。

(137) Lian は、Sg-GIC に and 関係を入れて α-and-GIC を作り出す要素である。

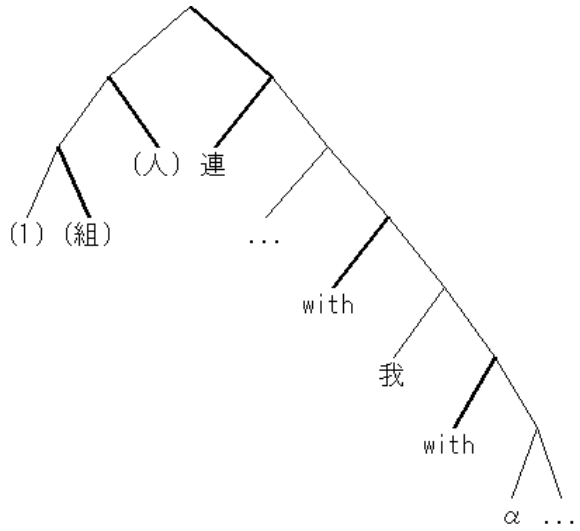
(138) lian(连)は、Lian が末端の and において音形的に具現化する。

すると、「连我」の LF は、(139)になれるが、(140)にはなれない。

(139) [连我]の LF：

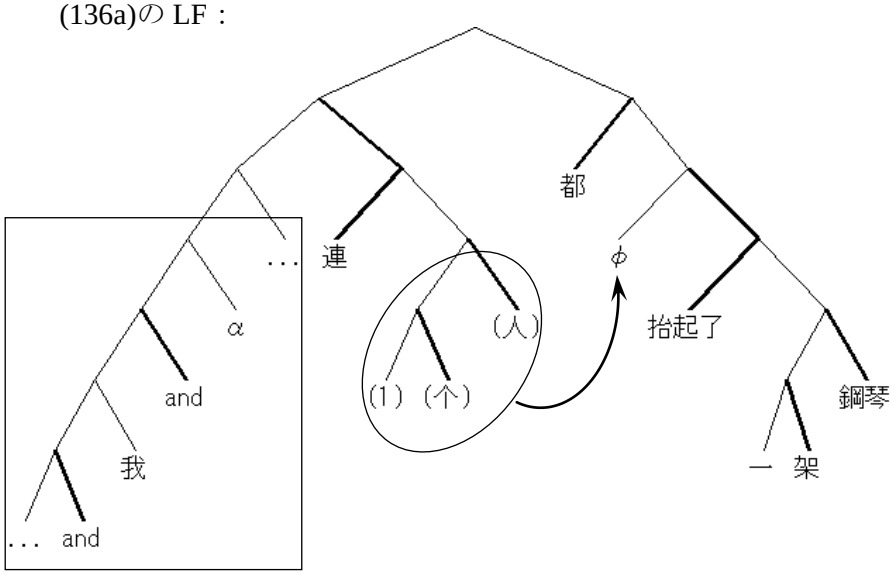


(140)　　[连我]の LF-2：*



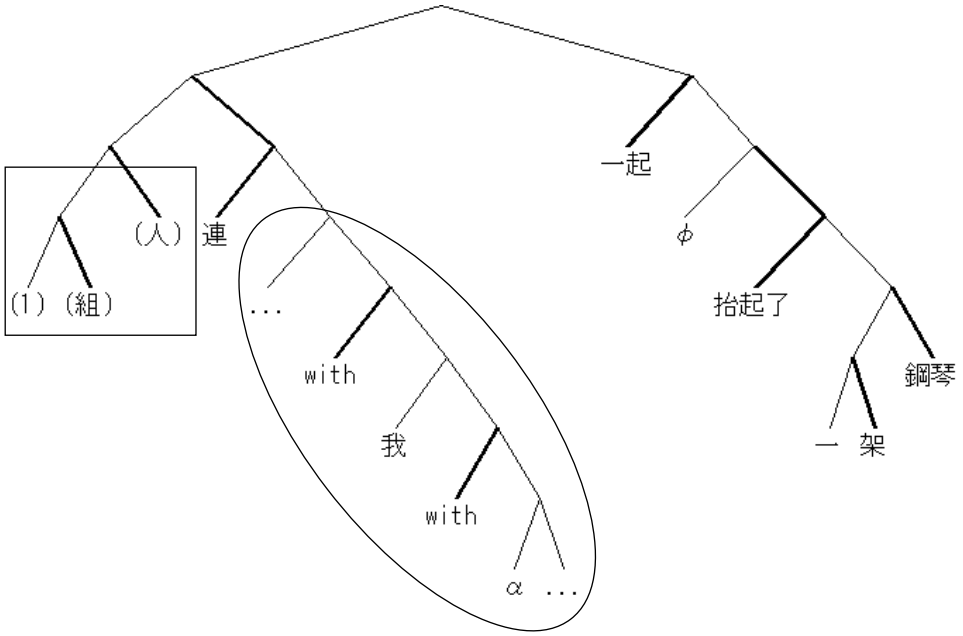
その結果、(139)のような[连我]構造は、dou(都)による分配解釈が可能となるのである。

(141)　　(136a)の LF：



一方、(140)のような[连我]構造は構築されえないため、本来なら容認可能なはずの yiqi(一起)による集団解釈ができなくなる。

(142)　　(136)b)の LF：*



2.6.2. men(们)

また、中国語には、複数の意味を表す men(们)という「后缀（接尾辞）」がある。

(143)　　[后缀] 用在代词和指人名词的后边，表示复数。
（「接尾辞」代名詞と人を指す名詞の後に接して、複数を表す。）
例：我 们（私たち）
工人 们（労働者たち）　　[吕叔湘等 (1980)：pp.283-284]

(144)のように、men(们)がつく NP は、dou(都)と共起して分配解釈もとれれば、yiqi(一起)と共起して集団解釈もとれる。(144c)の場合、集団解釈のほうが分配解釈よりとりやすい。

(144) a.　[我 们] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
私 Men Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ
私たちは、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

b.　[我 们] **一起** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
私 Men　yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ
私たちは、一緒に一台のピアノを持ち上げた。

c.　[我 们] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
私 Men 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

i.　私たちは、一緒に一台のピアノを持ち上げた。

ii.　私たちは、<u>それぞれ</u>一台のピアノを持ち上げた。

上述した事実をかんがみて、本論文では、men(们)を以下のように仮定する。

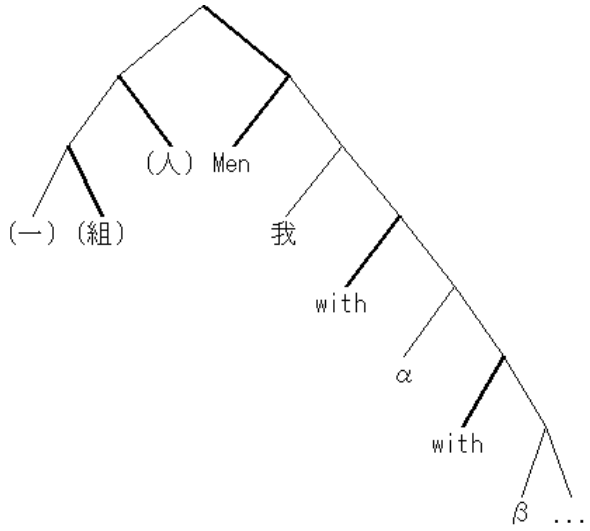
(145)　Men は、α-with-GIC と α-and-GIC の主要部になれる。

(146)　men(们)は、Men が and か with における音形の具現形である。

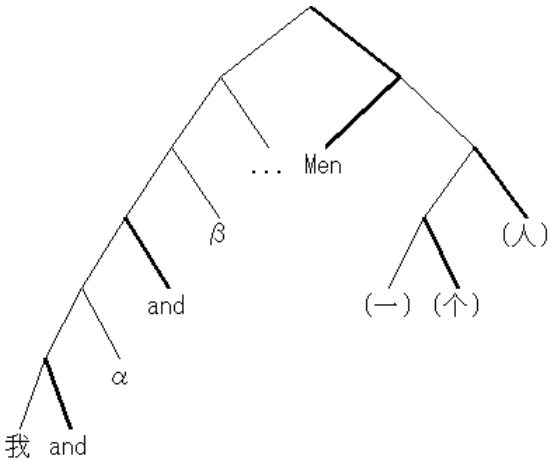
(147)　Men-GIC において、AND 集合と WITH 集合には、名詞 Noun、もしくは代名詞 Pronoun が生起する。

たとえば、「我们（私たち）」を例にとってみると、その LF は(148)と(149)の２種類がある。

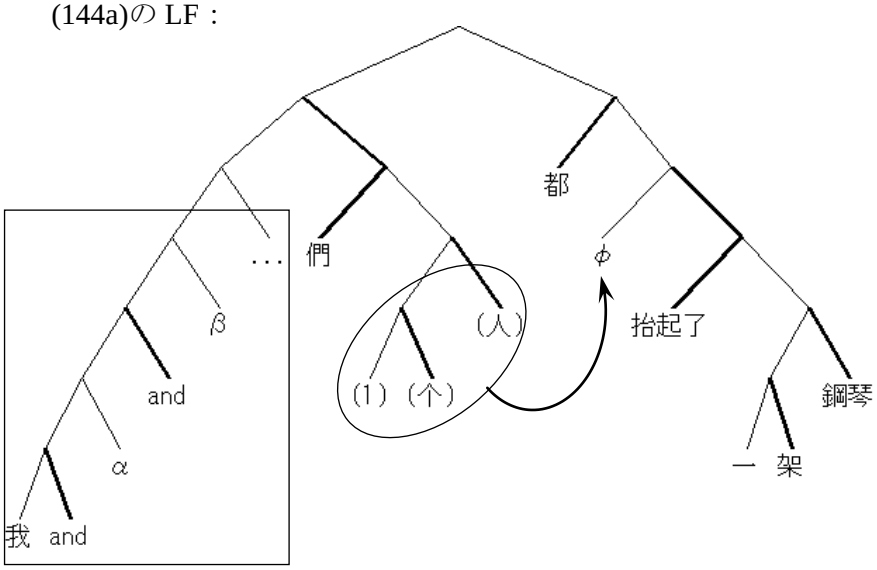
(148)　α-with-GIC としての「我们」の LF：



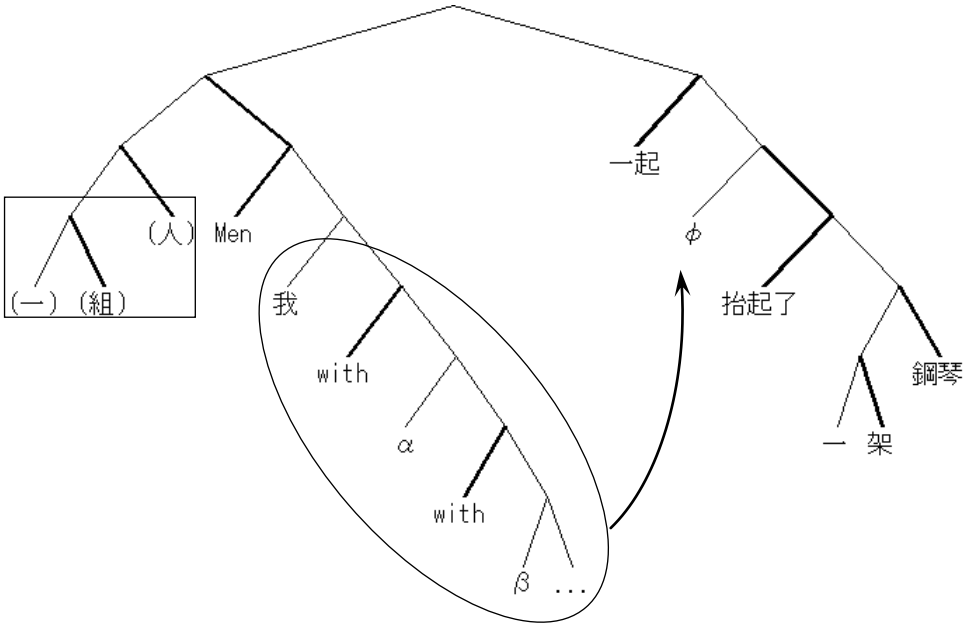
(149)　　α-and-GIC としての「我们」の LF：



(150)　　(144a)の LF：



(151)　　(144b)の LF：



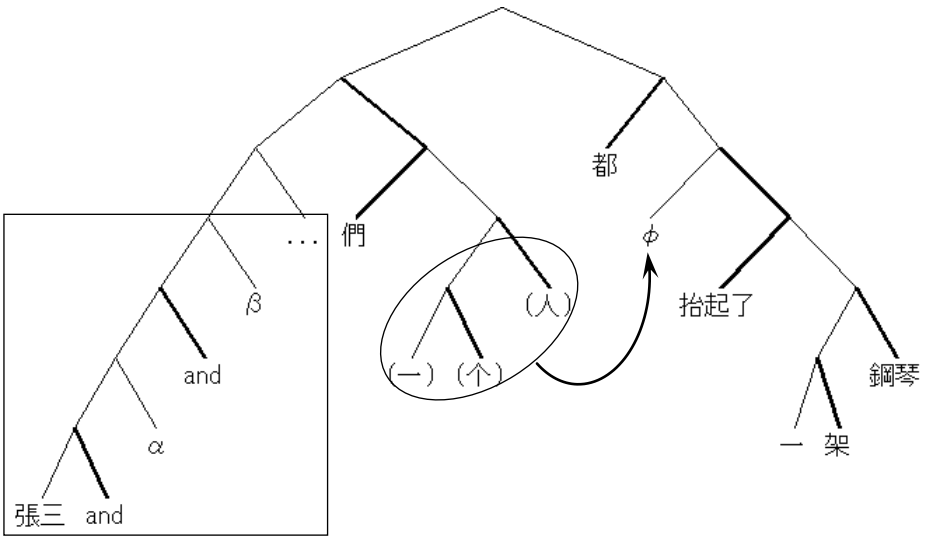
また、(152)の主部にある「张三们」には、実は２種類の解釈がありうる。

(152)　　[张三 们] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
張三 Men Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

i.　張三たち（「张三」という人をはじめとする複数の人たち）は、<u>それぞれ</u>一台のピアノを持ち上げた。

ii.　張三たち（「张三」という名前の人たち）は、<u>それぞれ</u>一台のピアノを持ち上げた。

(153)　　(152)の LF：



(152)にある２種類の解釈は、(153)の Men-and-GIC に生起する AND 集合に含まれるαとβの値によるものである。通常、αやβは、「张三」とは限らない可能性が高く、(152-i)の解釈がとれるが、たまたまαやβも「张三」という名前を持つと、(152-ii)の解釈にとれてしまう。

最後に、孙锡信 (1992)によると、men(们)は、宋の時代に初出しており、「瞒」「门」「懑」「每」などの異形態があった。吕叔湘 (1985), 王力 (1990)によると、特に元、明の時代に「每」の使用が多かったという[27]。

(154)　成吉思　皇帝　圣旨，道与 诸处 官员 每。　[吕叔湘 (1985): p.57]
チンギスハン皇帝 聖旨 述べる 各地 官吏 Mei

チンギスハン皇帝の命令は、各地の官吏たちに伝えられた。

(155)　你　每　家 里 也 不 少 了 穿的，也 不 少 了 吃的。[吕叔湘 (1985): p.57]
あなた Mei 家 中 Ye Neg 減る Asp 着る Ye Neg 減る Asp 食べる

あなたたちの家には、着るものにしろ、食べるものにしろ、足りないものがない。

(156)　我 每 同 将军 归 投 黄大王。　[王力 (1990): p.74]
私 Mei と 将軍　投降する 黄大王

私たちは、将軍とともに、黄大王に降参する。

[27] 吕叔湘 (2002)によると、古文には、複数を表すものに「辈」「等」「曹」「属」「侪」などがある。

以上を見ると、どうも英語でいう every の意味に近い mei(毎)も分配解釈、集団解釈に関わっているようである。

2.7. まとめ

本章では、分配解釈と集団解釈の生成プロセスを中心に、中国語の he(和), huo(或), haishi(还是)などと dou(都), yiqi(一起)、そして述部の共起可能性を観察して、α-GIC という構造が存在することを確認した。ただ、本章の話は、主部位置に限った α-GIC の話ばかりで、主語と目的語の非対称性に言及していない。次章では、α-GIC が生起する位置（主語、目的語位置といった項の位置、そして主部という非項位置）による相違、そして、いわゆる量化表現 mei(毎)、QP にも α-GIC が存在していることを検証する。

第三章　mei(每)，QP から構成される α-GIC

3.1. 本章の問題提起

前章で取り上げた he(和)と異なり、中国語の mei(每)は、分配解釈しかとれない。たとえば、(1a)のように、「每一个男人」がいわゆる主語位置に生起すると、容認できないが、(1b)のように、dou(都)と共起すれば、分配解釈がとれるようになる。しかし、(1c)のように、yiqi(一起)と共起すると、集団解釈がとれない。

(1)　a.　*[每 一 个 男人] [抬 起　了] [钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp ピアノ

b.　[每 一 个 男人] **都** [抬 起　了] [钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp ピアノ

どの男の人も、それぞれ、ピアノを持ち上げた。

c.　*[每 一 个 男人] **一起** [抬 起　了] [钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp ピアノ

同様のことが(2a, b, c)についても言える。

(2)　a.　*[每 一 个 男人] [抬 起　了] [这 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

b.　[每 一 个 男人] **都** [抬 起　了] [这 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

どの男の人も、それぞれ、このピアノを持ち上げた。

c.　*[每 一 个 男人] **一起** [抬 起　了] [这 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

ところが、(3a, b)のように、目的語位置にある NP「钢琴」を数量詞句(QP)[1]「一架钢琴（一台のピアノ）」に換えた場合、それぞれの文の意味は多少違ってくるが、どれも容認可能である。つまり、dou(都)は、必ずしも共起しなくてもいいことになる。そして、(3c)を見ればわかるように、(1c), (2c)と同様に、yiqi(一起)による集団解釈は、依然としてとれない。

[1] Huang (1982)は、QPs のことを「determiner-quantifier-classifier phrases」(p.28)と定義しているが、本論文では、「quantifier(数詞)＋classifier(量詞)＋noun(名詞)」の組み合わせを指す。

(3) a. [每 一 个 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

一人の男の人につき、一台のピアノがあり、それらのピアノは、それぞれ持ち上げられた。（全部で複数台）

b. [每 一 个 男人] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

どの男の人も、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

c. *[每 一 个 男人] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

一方、(4), (5)の分布から分かるように、mei(每)の後に生起する数詞「一」を「两（二）」に換えるだけで、(1), (2)と異なり、dou(都)が共起しても、yiqi(一起)が共起しても、もしくは、何も共起する要素がなくても、いずれも容認できなくなる。

(4) a. *[每 两 个 男人] [抬 起 了] [钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp ピアノ

b. *[每 两 个 男人] **都** [抬 起 了] [钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp ピアノ

c. *[每 两 个 男人] **一起** [抬 起 了] [钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp ピアノ

(5) a. *[每 两 个 男人] [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

b. *[每 两 个 男人] **都** [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

c. *[每 两 个 男人] **一起** [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

「mei(每)＋两（二）」の連続で容認できるのは、(6a)のような、目的語位置に数量詞節 (QP)「一架钢琴（一台のピアノ）」が生起する場合のみである。しかし、(6b), (6c)のように、dou(都), yiqi(一起)は、依然として、mei(每)と共起できないようである。

(6) a. [每 两 个 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

二人の男の人につき一台のピアノがあり、それらのピアノは、それぞれ持ち

上げられた。

b. *[每 两 个 男人] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *[每 两 个 男人] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 二 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

また、(1)～(6)は、mei(每)が、主語と主部位置に生起した場合であるが、(7)は、目的語位置に生起した場合である。(7)のように、目的語位置に生起すると（主語位置が単数解釈の NP の場合）、dou(都)が共起しなければ、分配解釈がとれるが、dou(都)が共起すると、容認できなくなる。

(7) a. [张三] [抬 起 了] [每 一 架 钢琴] 。
張三 持ち上げる Asp Mei 一 Cl ピアノ

張三は、どのピアノをも持ち上げた。

b. *[张三] **都** [抬 起 了] [每 一 架 钢琴] 。
張三 Dou 持ち上げる Asp Mei 一 Cl ピアノ

上述した現象における容認性判断の分岐点を踏まえると、どうも(8)の２つの条件が関わっているようである。

(8) (i) mei(每)が生起する位置（主語位置なのか、目的語位置なのか、主部位置なのか）

(ii) mei(每)の直後に後続する数詞（「一」なのか、n (n > 1)なのか）

ここまで書くと、必然的に(9), (10)のような疑問が生じる。

(9) なぜ mei(每)が yiqi(一起)と共起すると、集団解釈がとれないのか。

(10) mei(每)は、いったい、どういうものだろうか。

(9), (10)の問いに対して、本論文では、以下のように答える。

(11) (9)に対する答え：

mei(每)は、α-and-GIC しか構成できないため、集団解釈ができない。

(12)　(10)に対する答え：

mei(毎)は、α-and-GIC における主要部 α の音形の具現形である。

3.2. 前提

本論に入る前に、まず、第一章で提案した概念を前提として再掲する。

3.2.1. 叙述関係

(13)　叙述関係：

二つの構成素が Merge によって結ばれる「aboutness」な関係。

(14)　叙述関係で結ばれる二つの構成素は、主部 (A=Topic)と述部 (B=Predicate)になる。

(15)　叙述関係が構築される条件[2]：

a.　叙述関係を誘発 (induce) する要素

b.　関連構成素が QR (Quantifier Raising)する操作

(16)　述部に生起する空範疇 φ は、主部要素と同一指標を持たなければならない。

(17)　叙述関係の主部になった集合は、連続的スキャニング (Sequential Scanning)という操作を受けなければならない。

(18)　連続的スキャニングとは：

集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作である。

(19)　連続的スキャニングを経て構築された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によってつながれる。

3.2.2. 個体と集合

3.2.2.1. 個体

[2] ここでいう二つの条件は、同時に満たす必要はない。どちらか一つを満たせば、叙述関係が構築される。

(20)　個体は、[1-ClP-ZP]をなす構造。

(21)　量詞 ClP は、個体を表す $ClP_{\text{-Individual}}$ と、集合を表す $ClP_{\text{-Group}}$ とがある。

(22)　[1-ClP-ZP]において、数詞が「1」の場合、数詞「1」と量詞の ClP は、省略可能である。

(23)　[1-ClP-ZP]は、直接述語の項になれる。

3.2.2.2. 集合

(24)　集合とは、複数の構成素が and や with や or の関係で結ばれる構造。

(25)　等位接続 (Coordinating Conjunctions)：

a. AND 集合：and 関係で結ばれる構造（連結等位接続）
b. OR 集合：or 関係で結ばれる構造（選言等位接続）

(26)　非等位接続 (Non-Coordinating Conjunctions)：
WITH 集合：with 関係で結ばれる構造（連結非等位接続）

(27)　３種類の集合のうち、直接述語の項になれるのは、WITH 集合しかない。

3.2.2.3. α-GIC

(28)　素性 (feature) の F[*n*-unit]と F[*m*-unit]を付与 (assign) する範疇 α がある。

(29)　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、普通、直接述語の項として *θ*-role の付与を受けることができない。

(30)　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として、*θ*-role の付与を受けることができない。

(31)　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 が QR して主部を作らなければならない。

(32)　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 が述部にある空範疇 φ と同一指標を

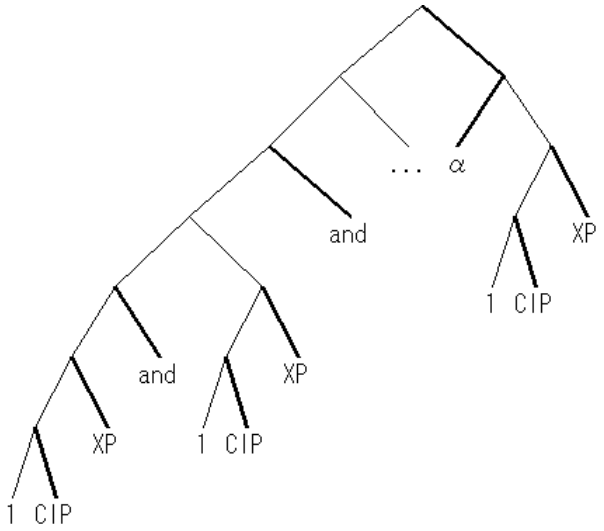
持つことができる。

(33) Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 が叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

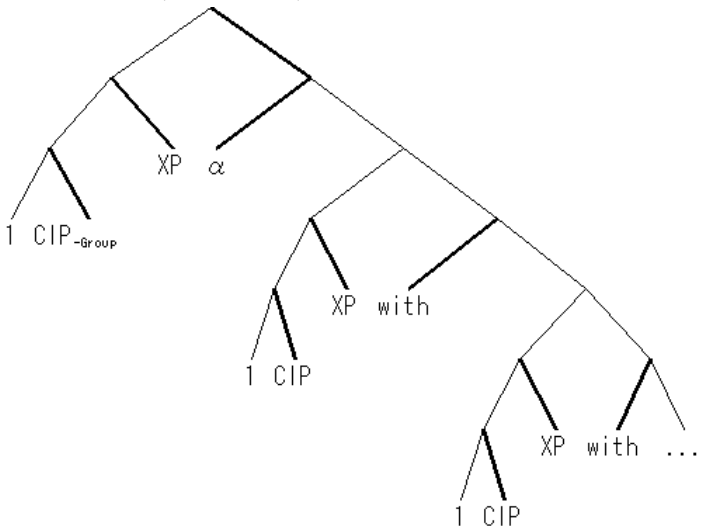
(34) α は、音形を持たないものであり、PF において、AND 集合、OR 集合、WITH 集合の主要部に投射して、音形的に具現化する。

α-GIC は、α-and-GIC, α-with-GIC と α-or-GIC の３種類がある。

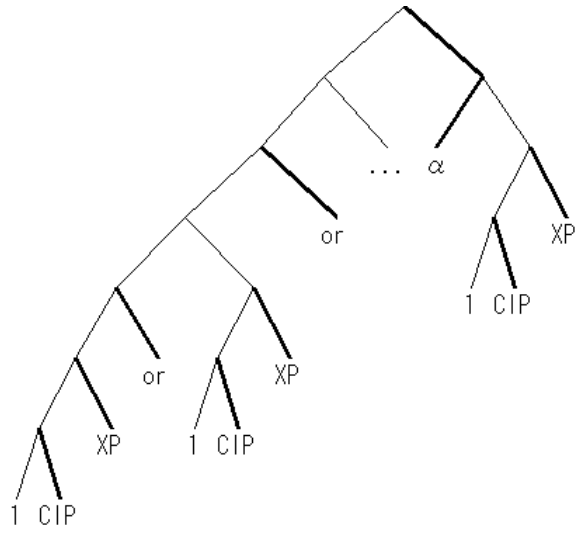
(35) α-and-GIC (QP version)の基底形：



(36) α-with-GIC (QP version) の基底形：



(37)　　α-or-GIC (QP version)の基底形：



3.2.3. Dou と Yiqi

3.2.3.1. Dou

(38)　　Dou は、叙述関係 dou-predication を作る要素である。

(39)　　dou(都)は、Dou の音形の具現形である。

(40)　　Dou は、Item2 において、and が含まれていることを check できていなければならない。

3.2.3.2. Yiqi

(41)　　Yiqi は、叙述関係 yiqi-predication を作る要素である。

(42)　　yiqi(一起)は、Yiqi の音形の具現形である。

(43)　　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

3.3. mei(毎)と QP

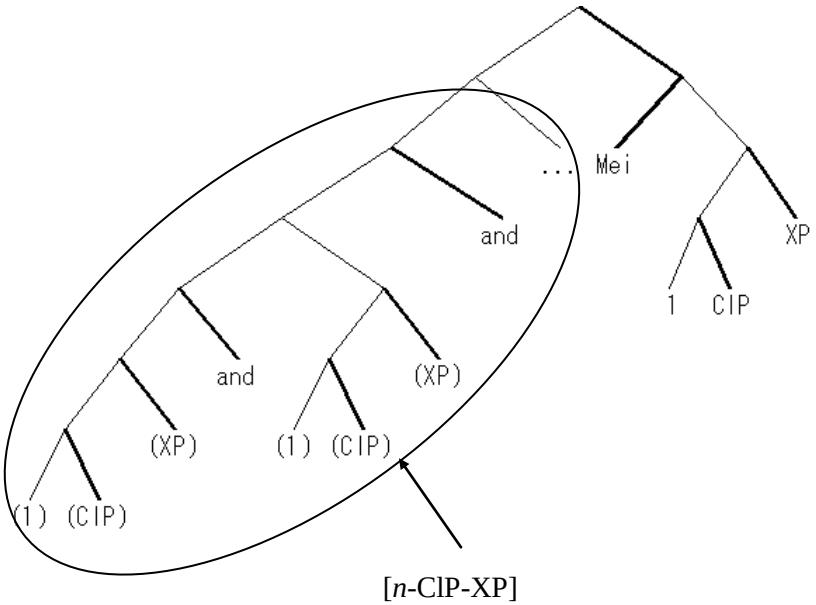
3.3.1. mei (毎)

mei(毎)[3]に関しては、以下のように仮定する。

(44)　Mei は、α-and-GIC の主要部にしかならない[4]。

(45)　mei(毎)は、Mei の音形の具現形である。

(46)　α-and-GIC である Mei の基底形[5]：



[*n*-ClP-XP]

(46)の Mei-and -GIC の基底形から、以下のことが言える。

(47)　Mei-and-GIC においては、AND 集合に均質、かつ、数 *n* [=(and の数+1)]の [1-ClP-XP]が含まれる[6]。 ($n > 1$)

---

[3] 吕叔湘等 (1980)は、mei(毎)の特性について次のように述べている。

(i)　[指]指全体中的任何个体，用来代表全体。强调个体的共同点。
（[指示詞]全体の中の任意の個体を指して、全体を代表する。個体の間にある共通点を強調する。）　[吕叔湘等 (1980)：p.283]

[4] 以下では、α-and-GIC (Mei)のことを Mei-and-GIC と記す。

[5] 図中の「…」は、「and (1) (ClP) (XP)」の省略を表す。

[6] 劉月華 他 (1988, p.92)は、mei(毎)の性質を以下のように述べている。

(i)　“毎”は名詞と直接連用できない。（“天”，“日”，“月”，“年”，“星期”，“人”，“小时”，“分钟”などは、名詞であると同時に準量詞であるから除く）“毎”

さらに、Mei-and-GIC は、その Item1 位置に生起する[1-ClP-XP]の XP によって、３種類の可能性がありうる。

3.3.1.1. Mei-and-GIC (ClP)

Carlson (1976)は、英語には、(48)のような総称 (generic)現象があると述べている[7]。

(48) a. Dogs are mammals.
b. Lions roar.
c. Retired groupies should receive social security benefits.
d. Bill threw rotten oranges into the garbage.
e. Ants that go crazy at the sight of sugar ought to be sent away.

[Carlson (1976): p.1, Ch1 (2)]

(48)のように、英語の場合、普通、総称を表すには、主語 NP が複数で現れ、数の一致(agreement)が必要なので、述部の部分がそれに対応して、複数形で現れる。

中国語においては、総称の現象として、(49)のような例が挙げられる。英語と違って、(49a, b)の対立から分かるように、複数を表す men(们)は、人間に対して用いられる複数形態なので、人間以外のもの、たとえば、動物にはつかない。そこで、中国語の総称文は、(49a)のような裸名詞 (bare NP)の形で表される。

(49) a. 狗 是 哺乳 动物。
犬 Shi 哺乳類 動物

と名詞の間には必ず量詞または数量詞が必要である。例えば、“每桌子”とは言えず、“每张桌子”あるいは“每一张桌子”と言わなければならない。

[7] Carlson (1995)によると、いわゆる genericity には２種類あり、(i)は、ある kind-referring NPs (or sometimes generic NPs)が含まれるもの、(ii)は、ある命題によって、general property を表すような総称文 (generic sencentes)である。

(i) a. The potato was first cultivated in South America.
b. Potatoes were introduced into Ireland by the end of the 17th century.
c. The Irish economy became dependent upon the potato. [Carlson (1995): p.2, (1)]

"This second notion of genericity is clearly a feature of the whole sentence (or clause), rather than of any one NP in it, it is whole generic sentence that expresses regularities which transcend particular facts."

(ii) a. John smokes a cigar after dinner.
b. A potato contains contains vitamin C, amino acids, protein and thiamine.

[Carlson (1995): p.3, (2)]

犬は哺乳動物である。

b. *狗 们 是 哺乳 动物。
犬 Men Shi 哺乳類 動物

実際、(49a)にある「狗」は、一匹の犬ではなく、(50)のように、犬という種類の動物、つまり、犬という生物全体（任意の犬）の general property を表している。そのため、(51)のように考えたい。

(50) （每 一 条）狗
Mei 一 Cl 犬
（どの一匹を取っても、同じである）犬

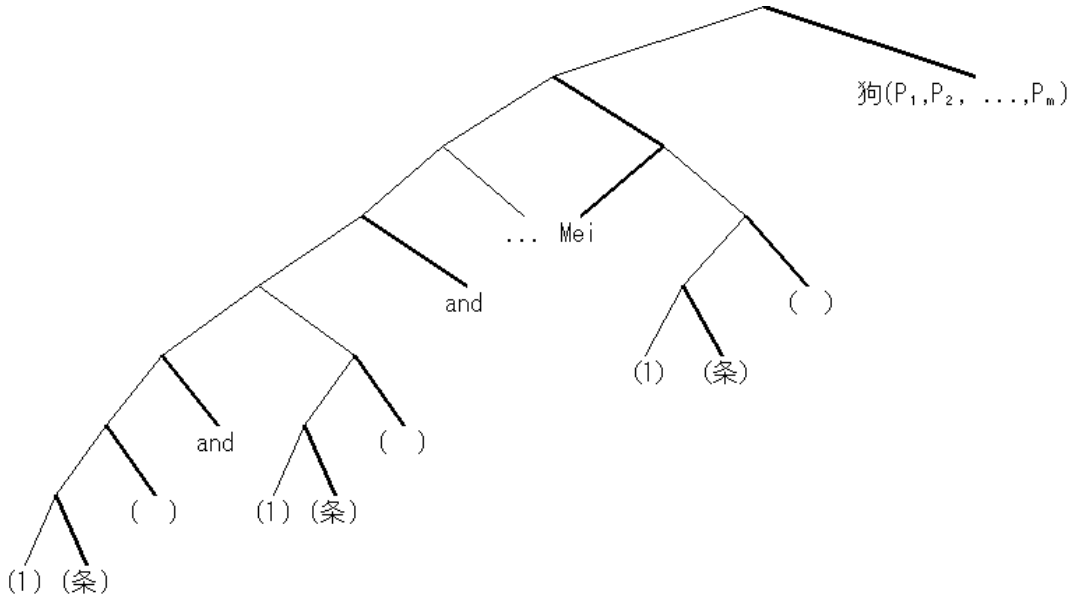
(51) 総称 NP には、無限の数の Mei-and-GIC (XP = φ)が含まれている。

Mei-and-GIC に生起する[1-Cl-XP]の XP がゼロ (φ)となると、Mei-and-GIC (ClP)が構成される。また、Mei-and-GIC (ClP)には、(52)のような特徴がある。

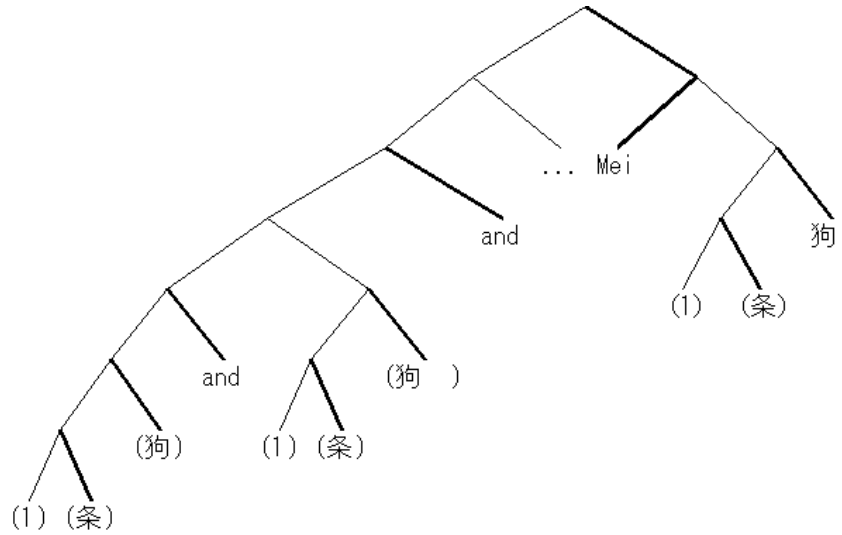
(52) Mei-and-GIC (ClP)は、Mei、AND 集合と[1-ClP]のいずれも音形を具現させない。

つまり、Mei-and-GIC (ClP)は、総称 NP の property の一部として NP に内在する。

(53) (50)の LF：



(54)　　(50)から変換された後の LF[8]：



(50)においては、「一条（一匹）」という個体と、全部で「*n* 条」の個体からなる集合が mei(毎)によって結ばれて、それが全体で、「狗」という NP の quantity（数量）を表している。(50)においては、NP が全体の主要部である。

3.3.1.2. Mei-and-GIC (NP)

次に、Mei の complement 位置に生起する[1-Cl-XP]の XP が NP となると、Mei-and-GIC (NP)が構築される。Mei-and-GIC (NP)の例は、(55)と(58)である。

(55)　　毎 [一 个 人]
Mei 一 Cl 人
どの一人の人も

Mei-and-GIC (ClP)と Mei-and-GIC (NP)の最大の違いは、Mei と[1-ClP-NP]部分が音形を持つかどうかである。

(56)　　Mei-and-GIC (NP)において、Mei と[1-ClP-NP]部分は、音形を持つが、AND 集合の部分は、音形を持たない[9]。

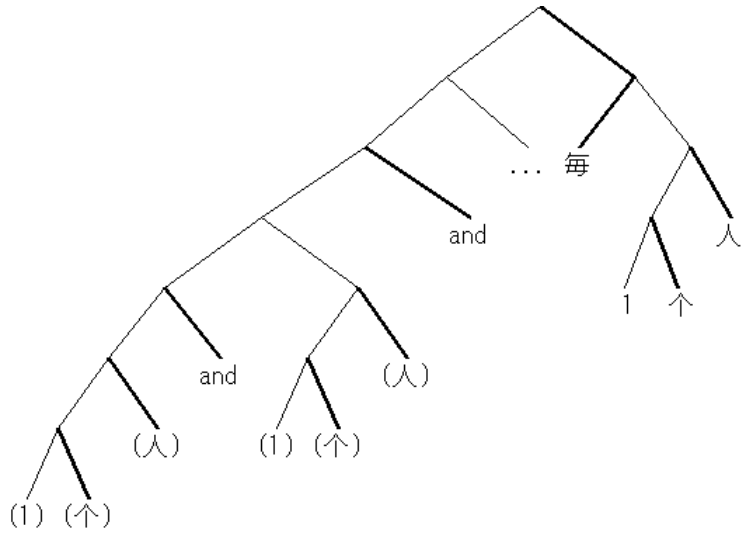
---

[8] 修飾部となる α-GIC の処理は、考えが不十分なため、今後の課題とする。

[9] 吕叔湘等 (1980)の分析によると、mei(毎)には、次のような二つの特徴がある。

(i)　a.　毎+数量。数词是“一”的时候，常常省去。　[吕叔湘等 (1980) :p.283]
（mei(毎)+数量詞。数詞が「一」の場合、しばしば省略される。）

(57)　　(55)の LF：



(57)のように、「一个人」という個体と、*n* [= (and の数+1)]だけの数量の「一个人」という集合で、mei(毎)を主要部とする Mei-and-GIC (NP)が構成される。PF 上は一人になっているように見えても、実質的には、ある集合の中の任意の人を指している。一方、(58)は、(55)と同様の Mei-and-GIC (NP)をなしてはいるものの、量詞が異なる。

(58)　　毎 [一 组 人]
Mei 一 Cl 人
どの組の人も

中国語では、(58)のような量詞「组」は、「集合量词（二つ以上の個体からなりたっている事物に用いる量詞）」と呼ばれている。これに対して、(55)の「个」は、「个体量词（個体と見なせる事物に用い、中国語特有の量詞）」である[10]。つまり、「组」の場合、その中身として、既に複数を表す個体が入っているのに対して、「个」の場合、その中身として、単数を表す個体しか入っていない。

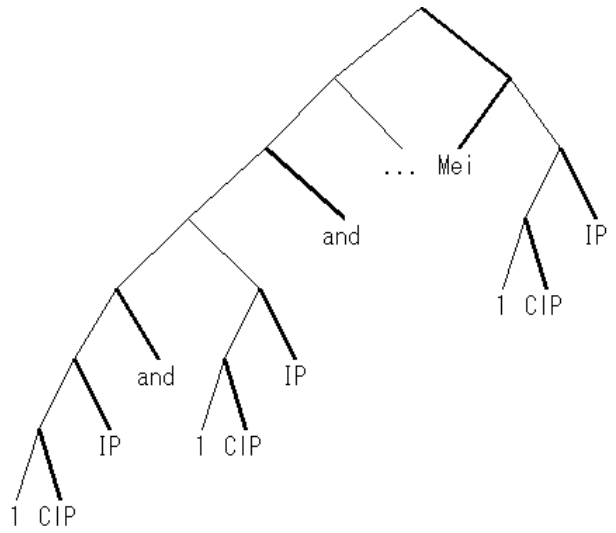
3.3.1.3. Mei-and-GIC (IP)

例：每（一）个，每（一）件
b.　“每”+“一”+“名”。省去量词，限于数次“一”。多用于书面语。
（「mei(毎) + “一” + 名詞」の形を取る。量詞が省略できるのは、数詞が「一」の場合に限られる。書面に多用される。）
例：每一事物都有自己的特点。（どの事物にもそれなりの特徴がある。）

[10] 劉月華 他 (1988, pp.113-114)を参照されたい。

また、Mei-and-GIC において、XP = IP、つまり、Mei-and-GIC (IP)が形成される場合もある。

(59)　Mei-and-GIC (IP) (n > 1)：



(60)　Mei-and-GIC (IP)において、Mei 及び、Item1 位置に生起する[1-ClP-IP]にある IP は、音形を具現化させる。

Mei-and-GIC (IP)には、以下の(61)のような特徴がある。

(61)　Mei の c-command 領域には、以下の a か b がなくてはならない[11]。

a.　割り当て (quota)：
[N-ClP-XP]と[M-ClP-XP]の比例 (proportion) である仕組み。(N, M ≧ 1)

b.　条件節 (conditional clause)：
[当，逢，到...]などの動詞が含まれる従属節

---

[11] 吕叔湘等 (1980, p.283)は、次のように述べている。本論文を書いている時点では、まだ(61)が必要とされる理由がはっきり説明できない。これを今後の課題とする。

(i)　a.　每+动+数量。后面必有另一数量相应。（「毎＋動詞＋数量」。その後には、もう一つの数量表現を後続させる必要がある。）
每隔五米种一棵树（五メートルごとに木を一本植える）/每演出三天，休息一天（お芝居は、三日ごとに一日休演する）/入秋以后，每下一场雨，天气就凉快一些。（立秋後、一雨ごとに、天気が涼しくなってくる。）

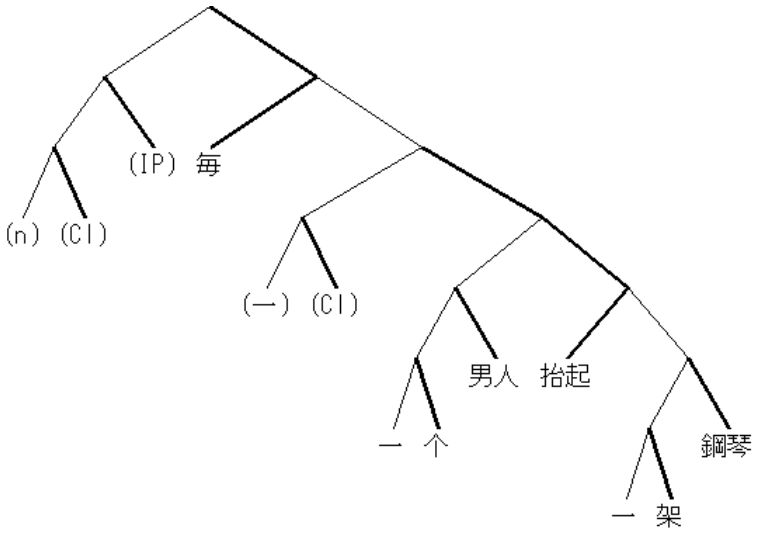
b.　“每”后是“当、逢、到”等动词，后面不带数量。（「毎」の後に「当，逢，到」などの動詞があれば、数量表現が後続する必要はない。）
每当提起卖菜的老张，街坊们**都**称赞不止（野菜売りの張さんの話ともなると、隣人同士は、賛美を惜しまない）/ 每逢春节我们**都**举行拥军优属活动。（春節のたびに、われわれは、擁軍優属（軍隊を支持し、軍人家族を優遇する）活動を行う。）

(62)は、(61a)に相当する例であり、(64)と(65)は、(61b)に相当する例である。

(62)　[每 [一 个 男人　抬　起 一 架 钢琴]] 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる 一 Cl ピアノ

一人の男の人につき一台のピアノがあり、それらのピアノは、それぞれ持ち上げられる。

(63)　(62)の LF：



(63)では、mei(每)の complement 位置に現れているのは、（一件の）IP (event)である「一个男人抬起一架钢琴」であり、specifier 位置には、複数件の IP が集まる集合が生起している。(64)と(65b)には、だいたい「，」で区切られる従属節に mei(每)が生起している。

(64)　每　当　看见 五星红旗 升起，。。。
Mei 当たる見る 五星紅旗 揚げる

五星紅旗が揚げられるのを見るたびに…。

(65)　a.　每　逢　佳 节 倍 思 亲。（唐诗）[12]
Mei 当たる佳節 倍　想う 親

佳節に逢う毎にますます親しきを思う。

---

[12] 吕叔湘 (2002, p.191)では、「“每”字除加在名词之前，还可以加在动词之前，作“每次”讲。（「毎」は、名詞につく以外に、動詞に先行して、「毎回」という解釈もできる）」と述べられている。

b. 或 云 此 舟 每 出，必 有 风雨。（武林旧事）
ある言うこの船 Mei 出る必ず有る風雨

この船が出るごとに、必ず風雨があると言われている。[吕叔湘 (1992): p.191]

3.3.2. QP

3.3.2.1. Singular-QP

単数を表す Singular-QP を以下のように仮定したい。

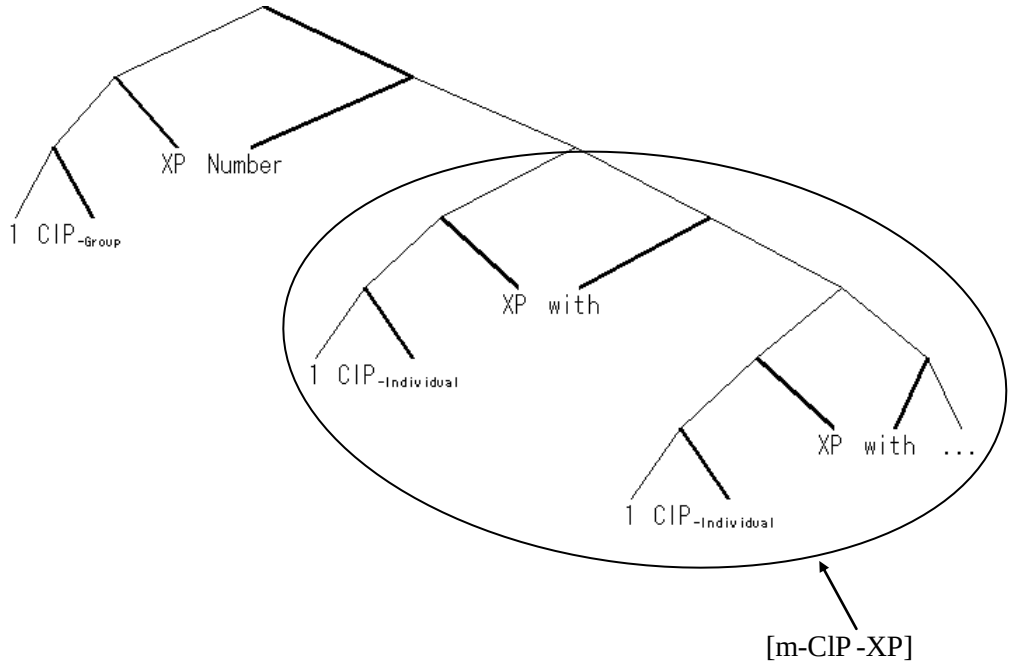
(66) Singular-QP は、[1-ClP-ZP]である。

3.3.2.2. Plural-QP

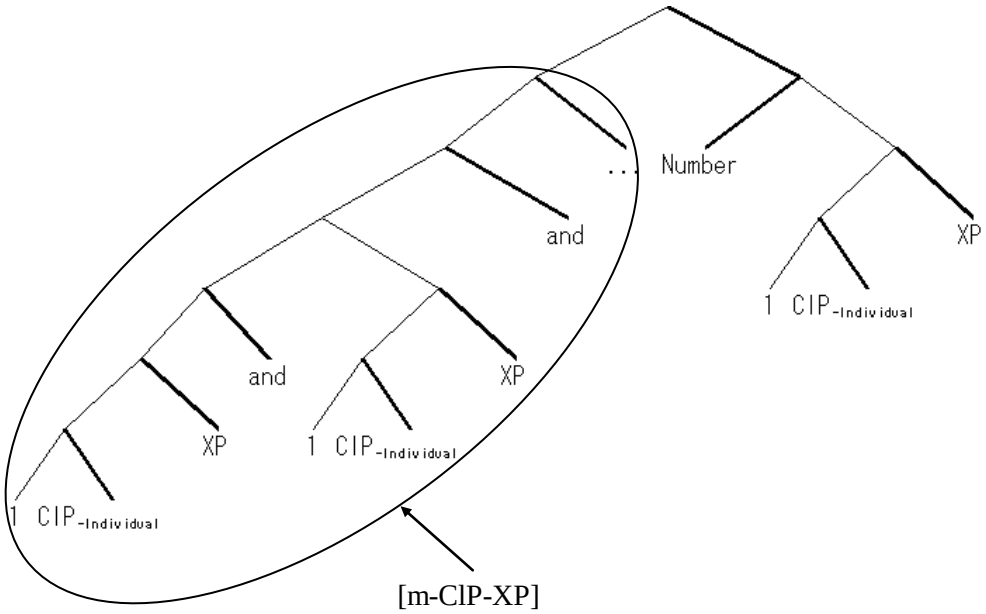
複数を表す Plural-QP を以下のように仮定したい。

(67) Plural-QP には、α-with-GIC と α-and-GIC の２種類の構造の可能性がある。

(68) α-with-GIC としての Plural-QP の基底形：



(69)　　α-and-GIC としての Plural-QP の基底形：

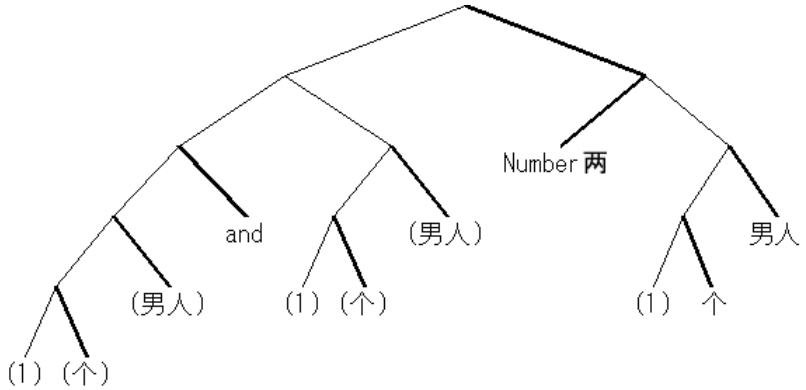


(70)　　AND 集合と WITH 集合に含まれる[1-ClP-XP]の数 m は、[and または with の数+1]であり、PF 上、Number の位置において音形を具現化させる。

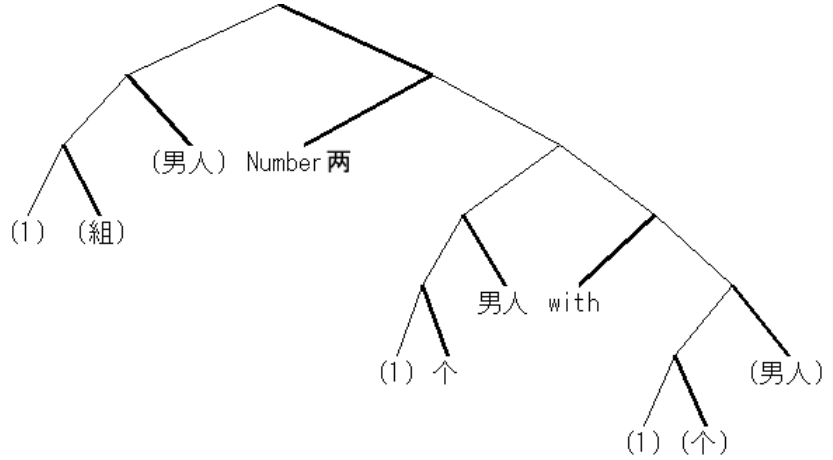
例えば、(71)の QP には、二通りの解釈があり、それぞれ(72a, b)となっている。

(71)　　両 个 男人
　　二 Cl 男の人
　　二人の男の人
　　i.　（一つの組）合計二人の男の人
　　ii.　（一人ずつ）二人の男の人

(72)　　両 个 男人
　　a.　α-and-GIC としての QP：



b.　α-with-GIC としての QP：



mei(毎)の解釈に現れる非対称性は、上述した mei(毎)の種類と(8)の条件によるものだと考えられる。

(8)　(i)　mei(毎)が生起する位置（主語位置なのか、目的語位置なのか、主部位置なのか）

(ii)　mei(毎)が直後に先行する数詞（「一」なのか、n (n > 1)なのか）

3.4. 主語位置に生起する場合

3.4.1. mei(毎)

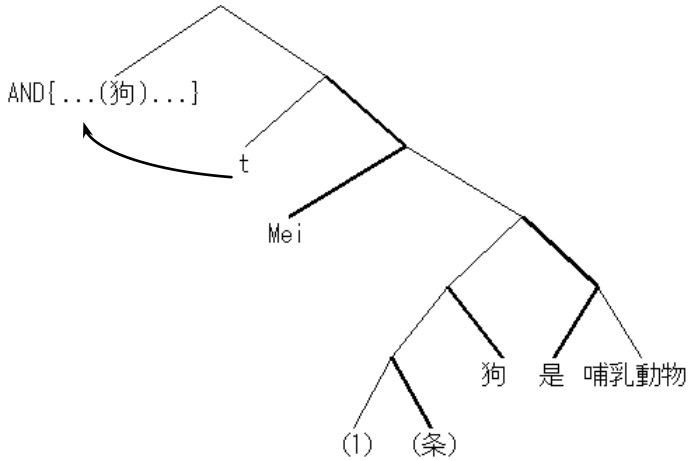
3.4.1.1. Mei-and-GIC (ClP)

(49)　a.　狗 是 哺乳 动物。
犬 Shi 哺乳類 動物

犬は、哺乳動物である。

(49a)は、Carlson and Pelletier (1995)でいう kind-referring NPs (or sometimes generic NPs)が主語位置に現れる例である。実際、一匹の犬ではなく、犬全体のことをさしているので、(54)のような α-and-GIC の構造をしていると考えられる。そうすると、(49a)の LF は、(73)になっているはずである。

(73)　　(49a)の LF:



また、α-and-GIC には、(29)～(31)の特性がある。

(29)　　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、普通、直接述語の項として *θ*-role の付与を受けることはできない。

(30)　　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として、*θ*-role の付与を受けることができない。

(31)　　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 が QR して主部を作らなければならない。

そうすると、(15b)にしたがって、(73)のように、集合からなる AND{...狗...}が QR して、自ら主部を構成する。

(15)　叙述関係が構築される条件：
　　b.　関連構成素が QR (Quantifier Raising)する操作

その結果、一匹の犬ではなく、世の中のすべての犬が哺乳動物であるという分配解釈ができるようになり、すなわち、総称の解釈が可能になる。

3.4.1.2. Mei-and-GIC (NP)

次に、(74)に見られる非対称性を説明する。

(74)　a.　*[每 一 个 男人]　[抬 起　了] [钢琴] 。= (1a)

Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp ピアノ

b. *[每 一 个 男人] [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。= (2a)
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

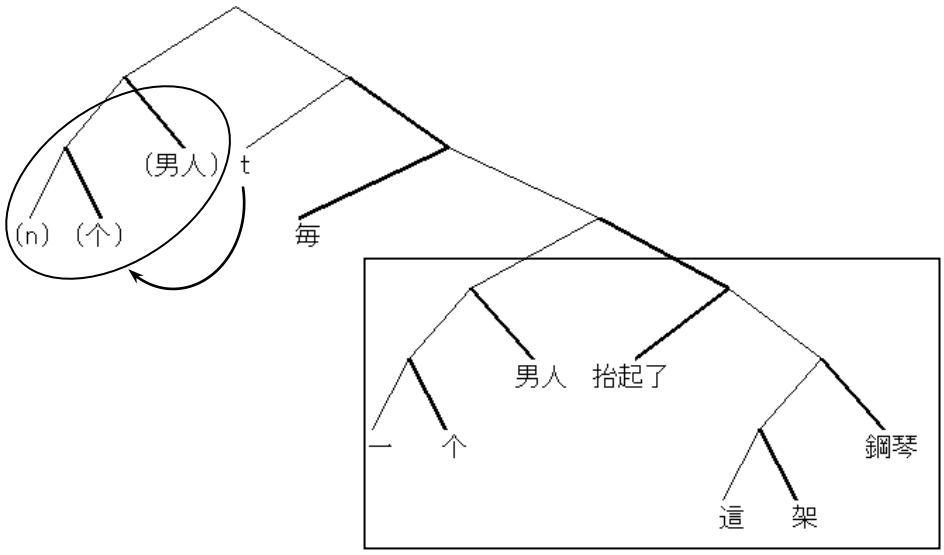
c. [每 一 个 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。= (3a)
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

一人の男の人につき、一台のピアノがあり、複数台のピアノは、それぞれ持ち上げられた。

たとえば、(74b)の LF は、(75)のようになっている。

(74) b. *[每 一 个 男人] [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。= (2a)
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

(75) (74b)の LF：*



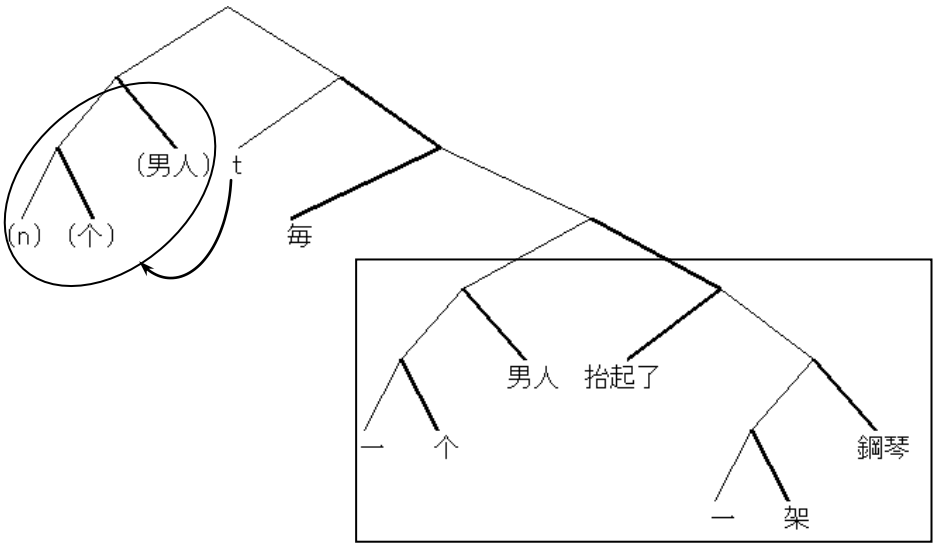
(75)が容認できないのは、四角で囲われている部分が、(61)の条件を満たしていないからである。これに対して、(74c)と、後に出てくる(82c)は、(61a)の割り当てに当たる例である。

(61) Mei の c-command 領域には、以下の a か b がなくてはならない。

a. 割り当て (quota)：
[N-ClP-XP]と[M-ClP-XP]の比例 (proportion) である仕組み。(N, M ≧ 1)

b. 条件節 (conditional clause)：
[当，逢，到...] などの動詞が含まれる従属節

(76)　　(74c)の LF：



(74b, c)は、いずれも(61a)に当てはまらないため、容認不可能である。

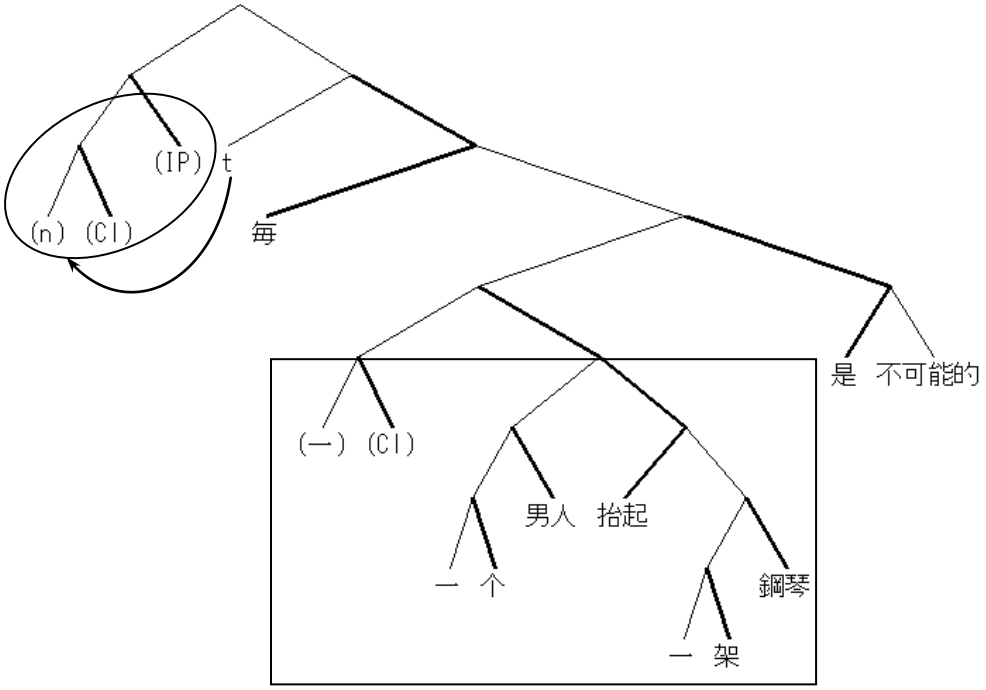
3.4.1.3. Mei-and-GIC (IP)

(77)　　[每 [一 个 男人　抬　起 一 架 钢琴]] 是 不可能的 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる 一 Cl ピアノ Shi 不可能だ

一人の男の人につき一台のピアノがあり、それらのピアノがそれぞれ持ち上げられるということは、不可能だ。

(77)は、(63)がさらに「是不可能的」と Merge したケースである。

(78)　　(77)の LF：



(78)では、「一个男人抬起一架钢琴（一人の男が一台のピアノを持ち上げた）」という event が、あまねく、ある集合に入っている男性に当てはまるようなことが、不可能であるという意味解釈になる。

3.4.2. 複数解釈の QP

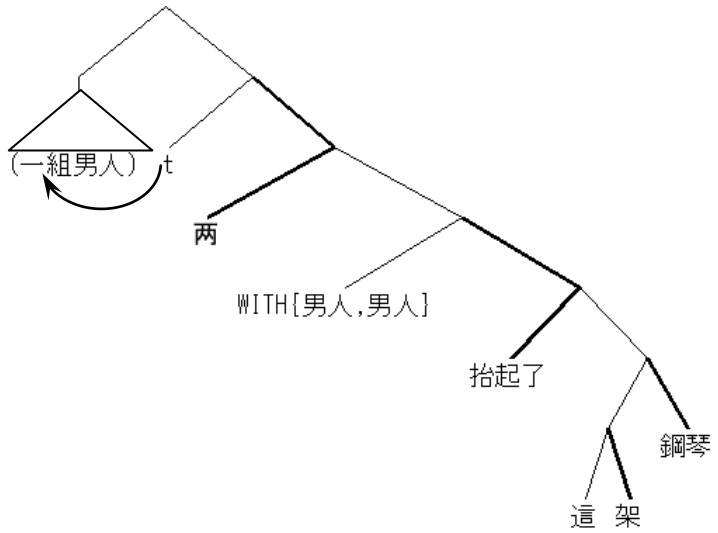
一方、(79)のように、複数解釈の QP が主語位置に生起すると、２種類の解釈ができる。

(79)　　两 个 男人　抬　起　了 这 架 钢琴 。
　　二 Cl 男の人持ち上げる Asp この Cl ピアノ

i.　二人の男の人が、<u>一緒に</u>このピアノを持ち上げた。
ii.　二人の男の人が、<u>それぞれ</u>このピアノを持ち上げた。

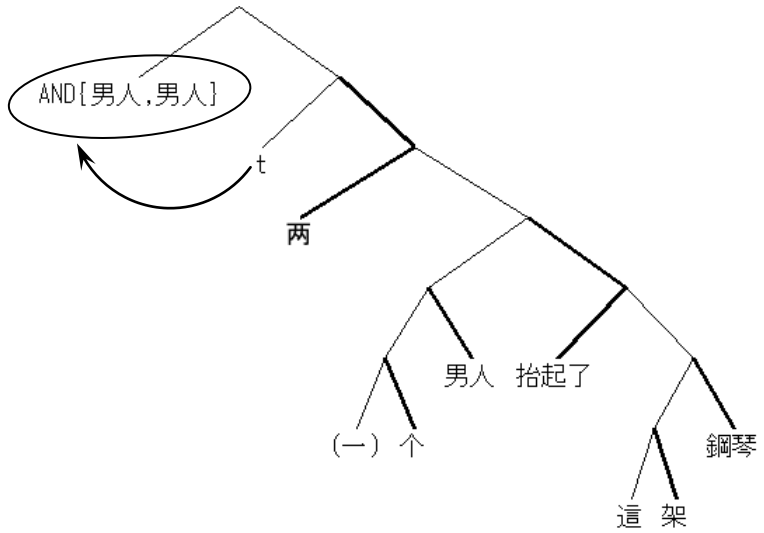
これは、QP である「两个男人」には、(72)のような２種類の構造があるからである。(72a, b)の α-GIC が Agent という *θ*-role を付与される主語位置に生起すると、α-GIC の特性により、QR が起こり、(80)と(81)の LF となる。

(80)　　(79-i)の LF：



(80)をそのまま読み下すと、「两个男人（二人の男の人）」が、協力して、「抬起了这架钢琴（このピアノを持ち上げた）」という event に加わるということを表している。また、この二人は、「一组男人」というペアに相当するという関係になっている。

(81)　　(79-ii)の LF：



(81)では、「一个男人（一人の男の人）」は、「抬起了这架钢琴（一人の男の人がこのピアノを持ち上げた）」ということと何らかの関係がある。また、その関係付けは、{一个男人, 一个男人}という集合にあるメンバーの誰にも当てはまるという均質的な関係である。

3.4.3. mei(毎)と複数解釈の QP の共起

(82)は、mei(毎)と QP が主語位置に共起した場合の例である。(82a, b)の容認不可能性は、

(74b)と同じ理由で説明できる。

(82) a. *每 [两 个 男人] [抬 起 了] [钢琴] 。= (4a)
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp ピアノ

b. *每 [两 个 男人] [抬 起 了] [这 架 钢琴] 。= (5a)
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

c. 每 [两 个 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。= (6a)
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

二人の男の人につき、一台のピアノがあり、それらのピアノは、それぞれ持ち上げられた。

(82c)を読み下すと、「两个男人抬起了一架钢琴（二人の男が一台のピアノを持ち上げた）」という出来事が複数件あるということになる。

3.5. 目的語位置に生起する場合

3.5.1. Mei-and-GIC

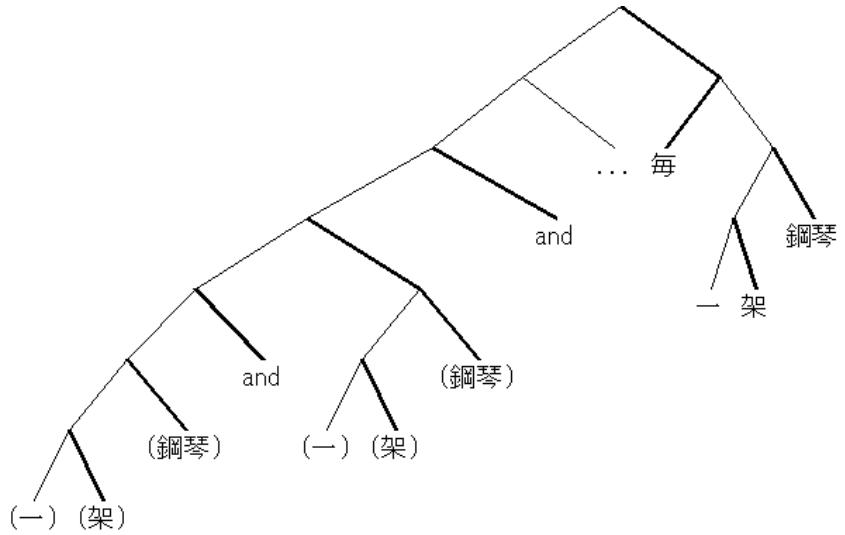
3.5.1.1. Mei-and-GIC (NP)

また、(83)のように、Mei-and-GIC (NP)が述語の目的語位置に生起する場合もある。述語である「抬起了」は、２項述語である。Agent という θ-role が主語位置に立つ「张三」に付与される。一方、述語「抬起了」から Theme を付与される項位置である目的語位置に生起しているのは、Mei-and-GIC (NP)である。

(83) 张三 抬 起 了 每 一 架 钢琴 。= (7a)
張三 持ち上げる Asp Mei 一 Cl ピアノ

張三は、どのピアノも持ち上げた。

(84)　　Mei-and-GIC (NP)である「毎一架钢琴」：



(29)によれば、Mei を主要部とする Mei-ClP-NP は、単なる NP ではないため、直接動詞述語から *θ*-role を付与される項になれないので、動詞述語とすぐには Merge できない。

(29)　　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、普通直接述語の項として *θ*-role の付与を受けることができない。

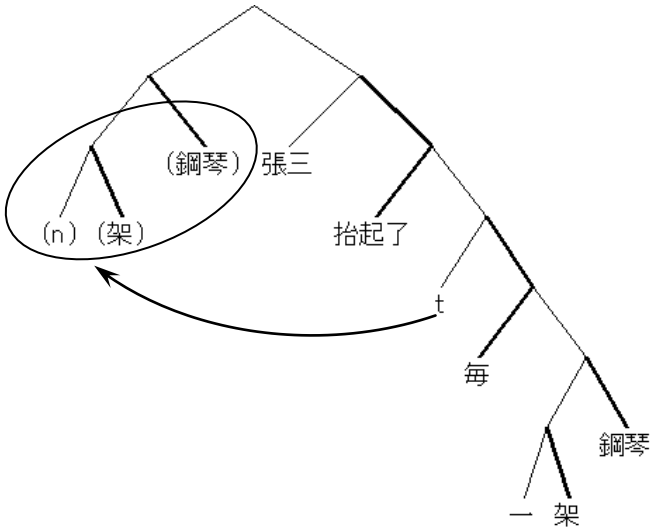
α-GIC である「毎一架钢琴」には、次のような性質があるので、Item1 が述語「抬起了」から *θ*-role を付与されることが可能である。

(30)　　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として *θ*-role の付与を受けることができない。

(31)　　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 は QR して主部を作らなければならない。

そうすると、音形を持たない「（n 架钢琴）」は、QR して、主部にならなければならない。その結果、(83)の LF は、最終的には、(85)のようになる。

(85)　　(83)の LF：



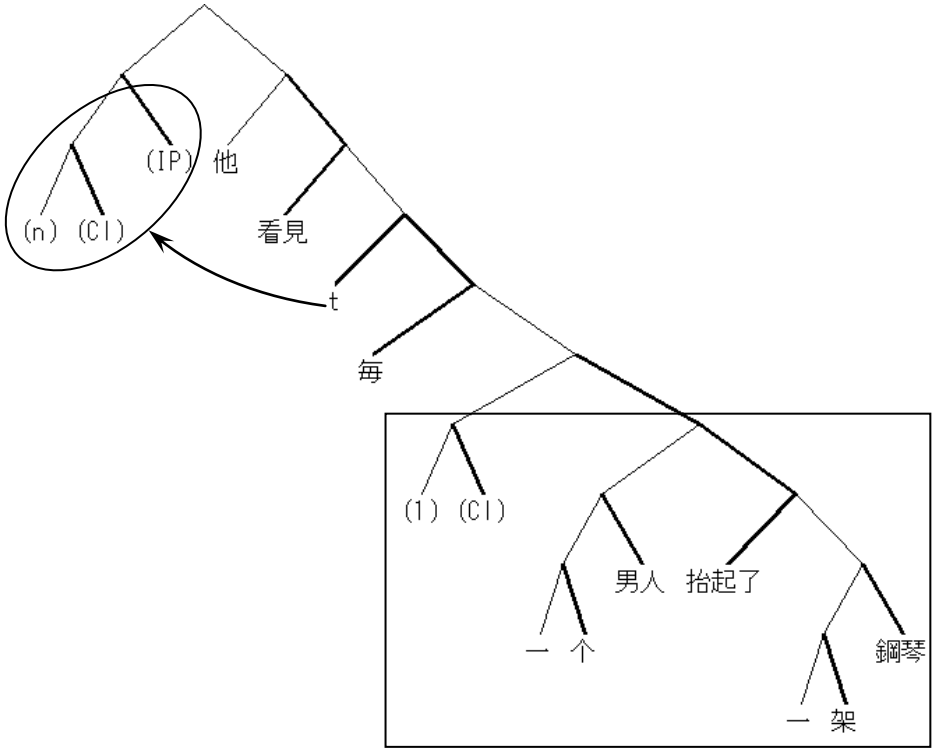
(85)をそのまま読み下すと、「*n* 架钢琴（均質であり、かつ、複数である）」があって、その中のどの「一架钢琴」も、漏れなく「张三抬起了一架钢琴（張三が一台のピアノを持ち上げた）」ということと何らかの関係を持つということであり、つまり、分配解釈が成り立つ。

3.5.1.2. Mei-and-GIC (IP)

(86)は、Mei-and-GIC (IP)が目的語位置に現れた場合である。

(86)　　[他] [看见] [每 [一 个 男人] [抬起 了] [一 架 钢琴]] 。
ta　見る　Mei　一 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ
彼は、一人の男の人につき一台のピアノが持ち上げられたのを見た。

(87)　　(86)の LF：



(87)をそのまま読み下すと、「一人の男の人につき一台のピアノがあり、そのピアノが持ち上げられた」というようなことが *n* 件あり、彼は、それを全部見たという意味解釈になる。

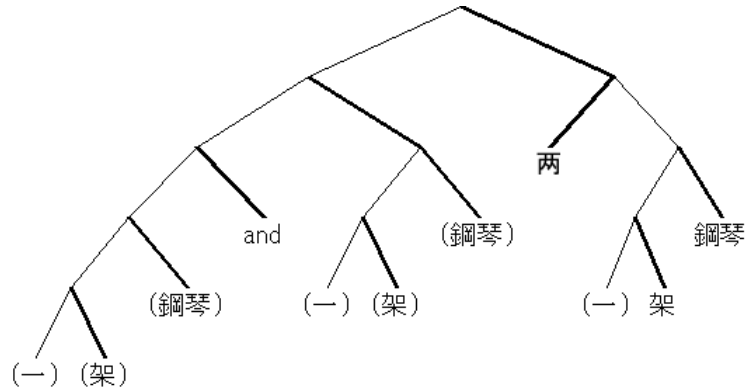
3.5.2. 複数解釈の QP

次に、複数解釈の QP が目的語位置に生起する場合を分析する。mei(毎)が生起する(83)と違って、(88)には、２種類の解釈がある。これは、(68)と(69)に照らし合わせて考えれば分かるように、目的語位置に生起している複数解釈の QP には、２種類の構造がありうるからである。

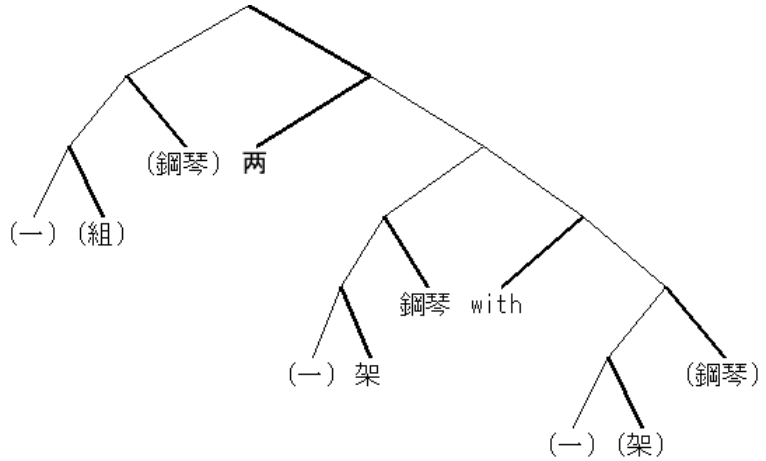
(88)　　[张三] [抬 起　了] [两 架 钢琴] 。
　　張三 持ち上げる Asp 二 Cl ピアノ

i.　張三は、二台のピアノを<u>それぞれ</u>持ち上げた。
ii.　張三は、二台のピアノを<u>同時に</u>持ち上げた。

(89)　　α-and-GIC としての「两架钢琴」：

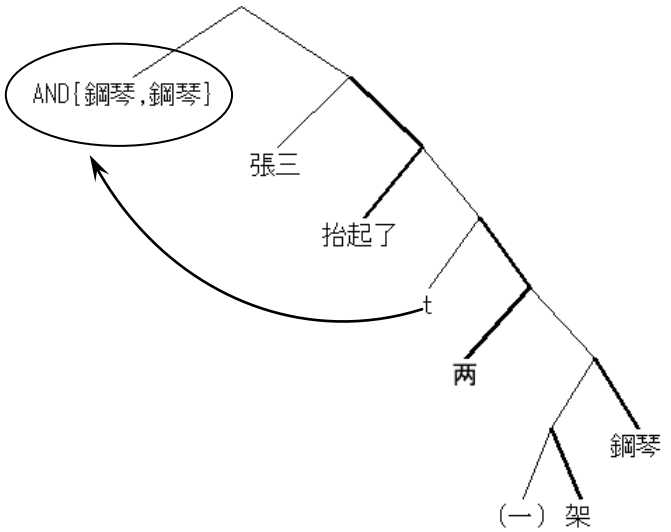


(90)　　α-with-GIC としての「两架钢琴」：



もし、(89)のような「两架钢琴」(α-and-GIC) が(88)の目的語位置に生起すると仮定すると、(89)と同様のプロセスを経て、(91)のような分配解釈ができる。

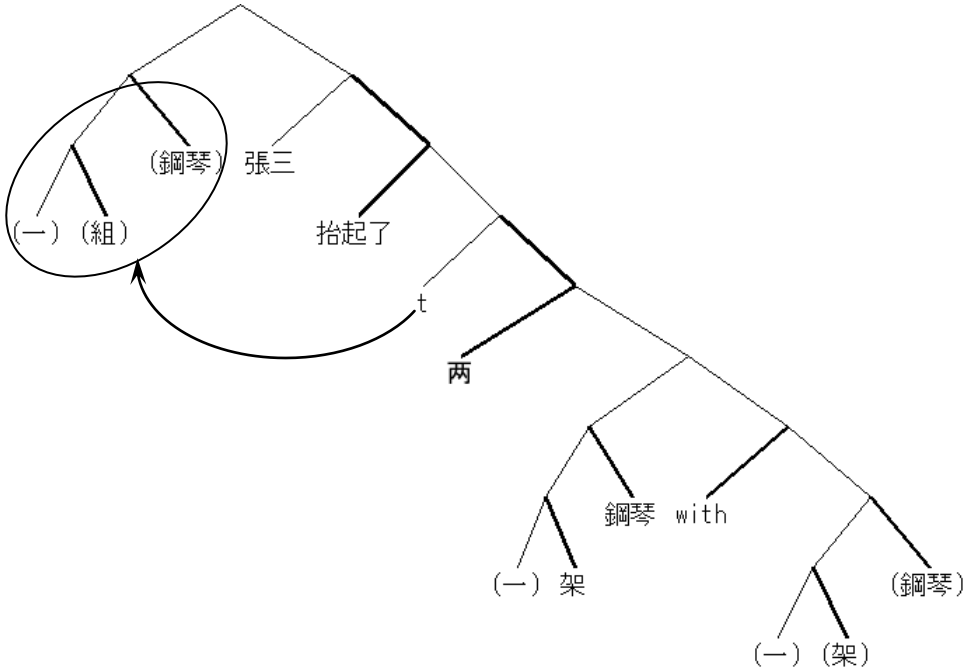
(91)　　分配解釈としての(88-i)の LF：



(91)をそのまま読み下すと、つまり「张三抬起了一架钢琴（張三は一台のピアノを持ち上げた）」というような event があり、これは、二台のピアノ（ピアノ A、ピアノ B）に当てはまるため、実質的に、張三は２回に分けて、ピアノ A とピアノ B をそれぞれ持ち上げたことになるのである。

一方、もし、(90)のような「两架钢琴」(α-with-GIC) が(88)の目的語位置に生起すると仮定すると、今度は(92)のようになる。

(92)　　(88-ii)の LF：



(92)を読み下すと、「张三抬起了两架钢琴（張三は、同時に二台のピアノを持ち上げた）」となり、この二台のピアノは、ペアの形で「一组钢琴（一組のピアノ）」となっている。

3.6. 主部位置に生起する場合

dou(都)と yiqi(一起)は、叙述関係を作る要素である。

(38)　　Dou は、叙述関係 dou-predication を作るものである。

(41)　　Yiqi は、叙述関係 yiqi-predication を作るものである。

(15)　　叙述関係が構築される条件：

a.　叙述関係を誘発 (induce) する要素

したがって、dou(都)、もしくは、yiqi(一起)の specifier 位置に現れる構成素が主部になる。

3.6.1. Mei

3.6.1.1. Mei-and-GIC (ClP)

(50)のような構造が最もよく現れているのは、いわゆる総称文 (generic sentence) である。

(50) （毎 一 条）狗
Mei 一 Cl 犬
（どの一匹を取っても、同じである）犬

Carlson (1977)によると、(48a)は、(93)と同様に(94)のような全称量化の表記ができる[13]。

(48) a. Dogs are mammals.

(93) a. Any dog is a mammal.
b. All dogs are mammals.
c. Each dog is a mammal.
d. Every dog is a mammal. [Carlson (1977): p.34, Ch3 (5)]

(94) (∀x) (dog (x) → Mammal (x)) [Carlson (1977): p.34, Ch3 (2)]

つまり、英語の総称文は、一種の全称量化構文でもある。

中国語の普通名詞「狗」は、dou(都)の specifier 位置に現れうる。

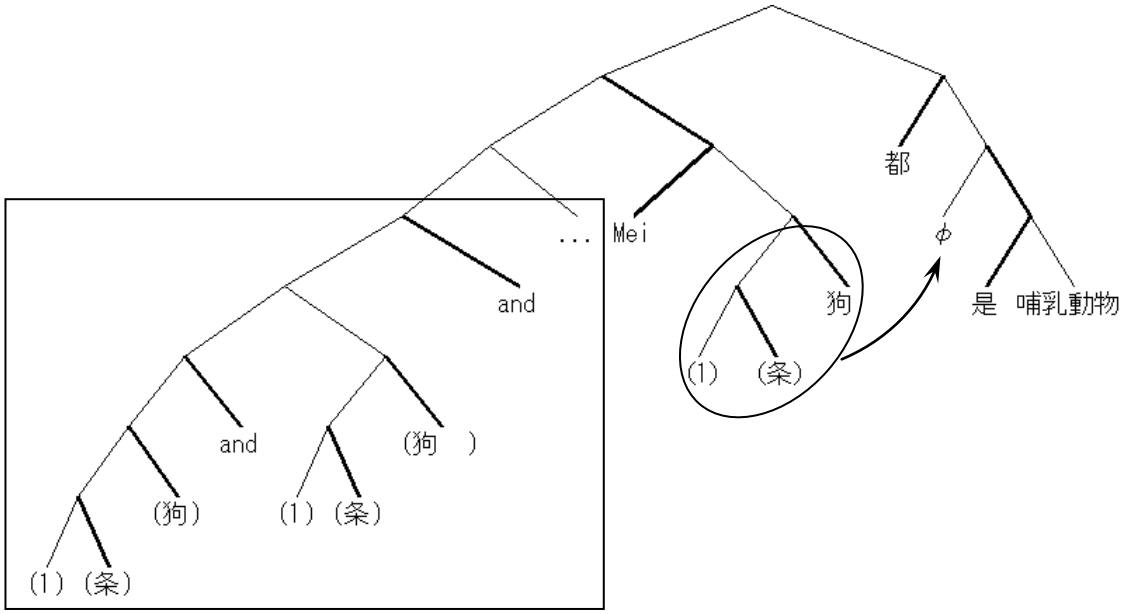
(95) 狗 **都** φ 是 哺乳 动物。 cf. (49a)
犬 Dou Shi 哺乳類 動物
犬は、みんな哺乳動物である。

---

[13] 藤村 (2006)によると、限量記号、とりわけ普遍限量記号（後に全称量化 (∀)）という考案は、Frege (1879)により論理学にもたらし、『概念記法』（藤村龍雄訳）において、初めて述べられた概念である。Frege (1879, p.34)は、第 1 章§11 において、全称量化の表記法として「 $\neg\smile^{x}\!-\!F(x)$ （一般性）」を用いて、「これは、その項として何を取ろうともこの関数は事実である、という判断を意味する。」と述べた。

(95)の場合、特定の一匹の「狗」ではなく、「狗」の総称を指しており、しかも、全体のみならず、その総称の子成分に当たる「どの一匹の犬」まで含意しているため、「狗」の(54)のような構造が dou(都)と Merge していると考えざるを得ない。

(96)　　(95)の LF：



(96)をそのまま読み下すと、「一匹の犬が哺乳動物である」という event があり、これは、犬という品種の動物のどれにも当てはまるということになる。

3.6.1.2. Mei-and-GIC (NP)

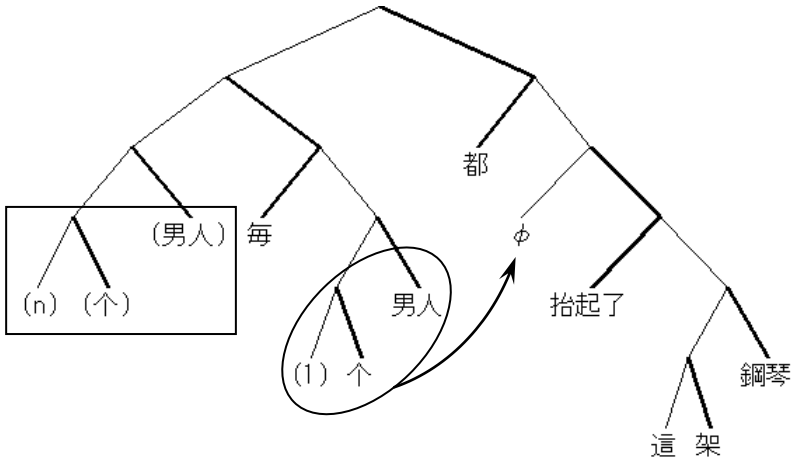
Mei-and-GIC (NP)句が主部に生起する(97)は、基本的には、(95)と同様の分析ができる。

(97)　　[每 一 个 男人] **都** [φ 抬 起 了] [这 架 钢琴] 。= (2b)
Mei 一 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp この Cl ピアノ
どの男の人も、それぞれこのピアノを持ち上げた。

(47)　　Mei-and-GIC においては、Item2 にあらわれる AND 集合に数 *n* [=(and の数+1)]の[1-ClP-XP]が含まれる。

最終的に、(97)の LF は、(98)のようになるはずである。

(98)　　(97)の LF：



こうして、(98)を読み下すと、「*n* 个男人」が「一个男人抬起了这架钢琴（一人の男の人がこのピアノを持ち上げた）」ということと何らかの関係があり、かつ、「*n* 个男人」は、mei(每)を通してつながっているため、「均質、かつ、複数」を表す「一个男人」の *n* 人が、漏れなく、述部と何らかの関係を持つことになる。実質的に、「*n* 人の男の人が一人ずつこのピアノを持ち上げた」という分配解釈が成り立つ。

3.6.1.3. Mei-and-GIC (IP)

(99)と(100)においては、「一个男人抬起了一架钢琴」のような event (=IP)が複数あり、実際「男人」も、「一架钢琴」も、複数存在するという意味合いになる。

(99)　　每 [一 个 男人 抬 起 了 一 架 钢琴] 。那 些 男人 **都** 累 坏 了 。
Mei 一 Cl 男の人持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ その Pl 男の人 Dou 疲れ切る Asp
一人の男の人につき、一台のピアノがあり、それらのピアノは、<u>それぞれ</u>持ち上げられた。その男の人たちは、<u>それぞれ</u>疲れ切ってしまった。

(100)　　每 [一 个 男人 抬 起 了 一 架 钢琴] 。那 些 钢琴 **都** 很 贵 。
Mei 一 Cl 男の人持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ その Pl ピアノ Dou とても高い
一人の男の人につき、一台のピアノがあり、それらのピアノは、<u>それぞれ</u>持ち上げられた。それらのピアノは、<u>それぞれ</u>値段が高い。

また、(101), (102)のように、Mei-and-GIC (IP)句が従属節に生起すると、主節の主語位置に生起している NP「我」が複数解釈の NP でないにもかかわらず、dou(都)が不可欠である。

(101) a.　每 一 次 看见 五星红旗 升起，我 **都** 为 国家 的 繁荣 而 高兴 。

Mei 一 Cl 見る　五星紅旗 揚げる 私 Dou ため 国　De　繁栄 Er　喜ぶ

五星紅旗が揚げられるのを見るたびに、私は、国の繁栄ぶりを喜んでいる。

b.　*每 一 次 看见 五星红旗 升起，我 为 国家 的 繁荣 而 高兴 。
Mei 一 Cl　見る 五星紅旗 揚げる 私 ため 国　De　繁栄 Er　喜ぶ

(102) a.　每　当　看见 五星红旗 升起，我 **都** 为 国家 的 繁荣 而 高兴 。
Mei 当たる見る 五星紅旗 揚げる 私 Dou ため 国 De　繁栄 Er　喜ぶ

五星紅旗が揚げられるのを見るたびに、私は、国の繁栄ぶりを喜んでいる。

b.　*每　当　看见 五星红旗 升起，我 为 国家 的 繁荣 而 高兴 。
Mei 当たる見る 五星紅旗 揚げる　私 ため 国 De　繁栄 Er　喜ぶ

また、談話 (Discourse) において、Mei-and-GIC (IP)が dou(都)と共起する場合もある。

(103)　[每 [两 个 男人 抬　起 一 架 钢琴]]。这 些 事情 **都** 是 不可能的 。
Mei 二 Cl 男の人 持ち上げる 一 Cl ピアノ これ Pl 事柄 Dou Shi 不可能だ

二人の男の人につき一台のピアノが持ち上げられる。それらは、不可能だ。

また、(6b)が容認できないのは、(61)によるものである。

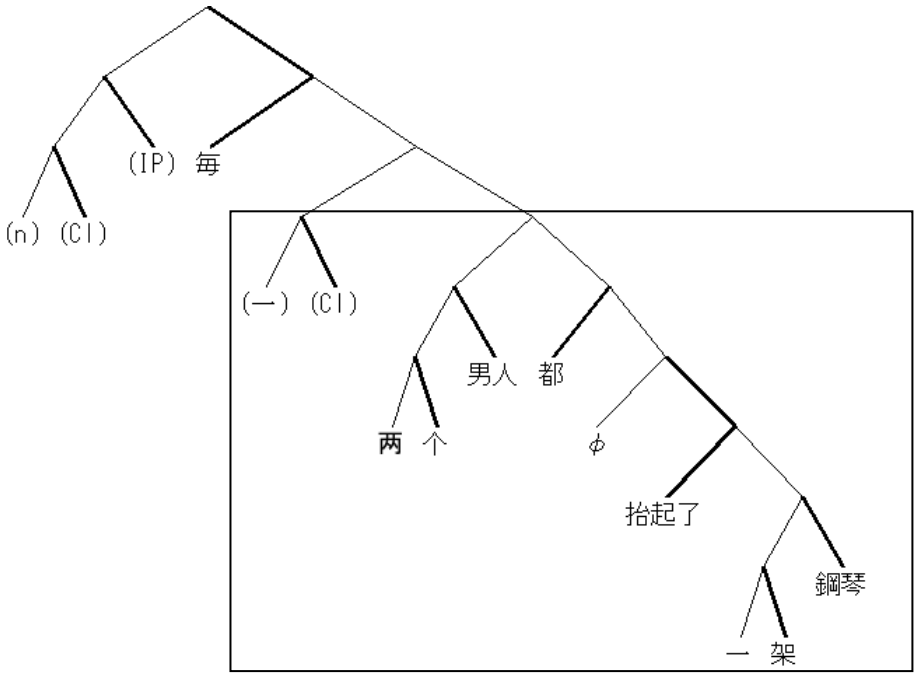
(6b)　*每 [$_{IP}$ [两 个 男人 **都** 抬 起　了 一 架 钢琴]]。
Mei　二 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

(61)　Mei の c-command 領域には、以下の a か b がなくてはならない。

a.　割り当て (quota)：
[N-ClP-XP]と[M-ClP-XP]の比例 (proportion) である仕組み。(N, M ≧ 1)

b.　条件節 (conditional clause)：
[当，逢，到...] などの動詞が含まれる従属節

(104)　　(6b)の LF：*



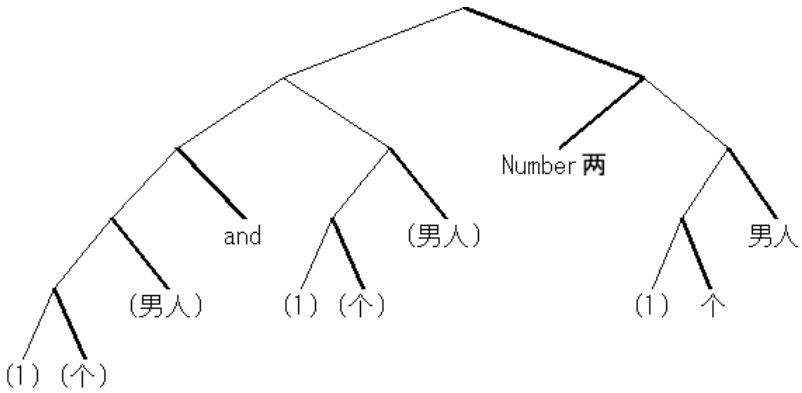
(6b)においては、dou(都)が mei(毎)の c-command 領域に入っているため、割り当てでもなければ、条件節でもない。

3.6.2. 複数解釈の QP

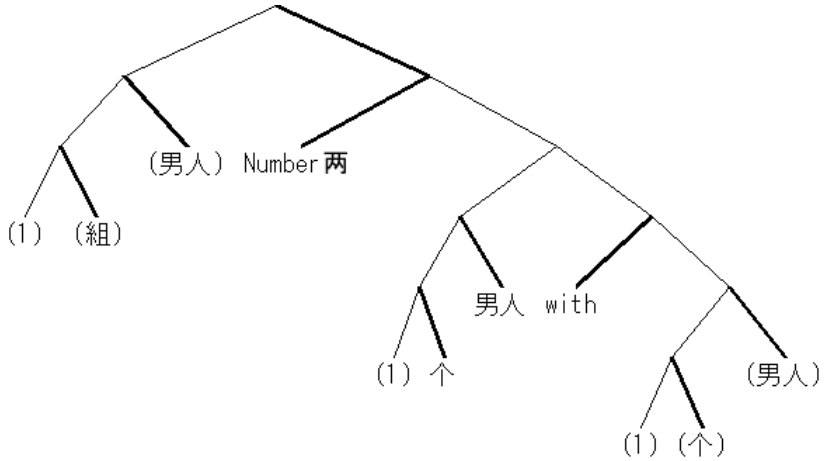
(68)と(69)にしたがえば、複数解釈 QP「两个男人（二人の男の人）」には、(72)の２種類の構造があると述べた。

(72)　　两 个 男人

a.　α-and-GIC としての QP：



b.　α-with-GIC としての QP：



(105a, b)は、(79)の２種類の解釈に対応している。

(105) a.　[两 个 男人] 一起 [抬 起　了] [这 架 钢琴] 。　cf. (79-i)
二 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

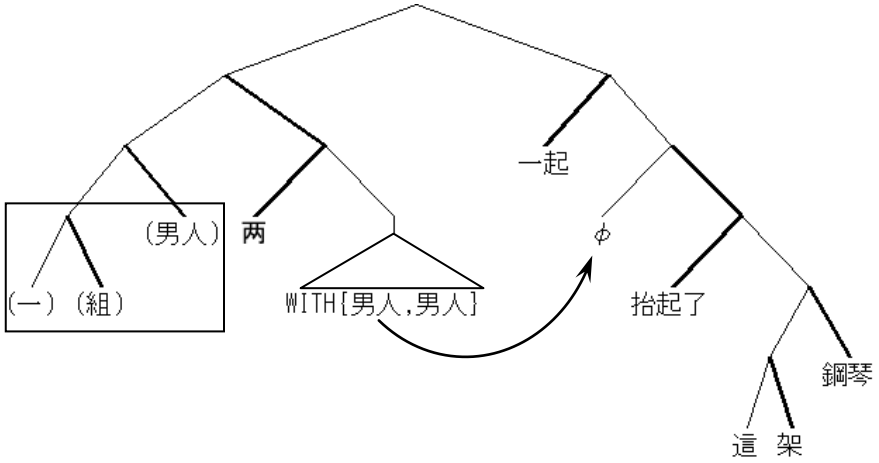
二人の男の人が、一緒にこのピアノを持ち上げた。

b.　[两 个 男人] 都 [抬 起　了] [这 架 钢琴] 。　cf. (79-ii)
二 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp この Cl ピアノ

二人の男の人が、それぞれこのピアノを持ち上げた。

(105)の LF は、それぞれ(106)と(107)のようになる。

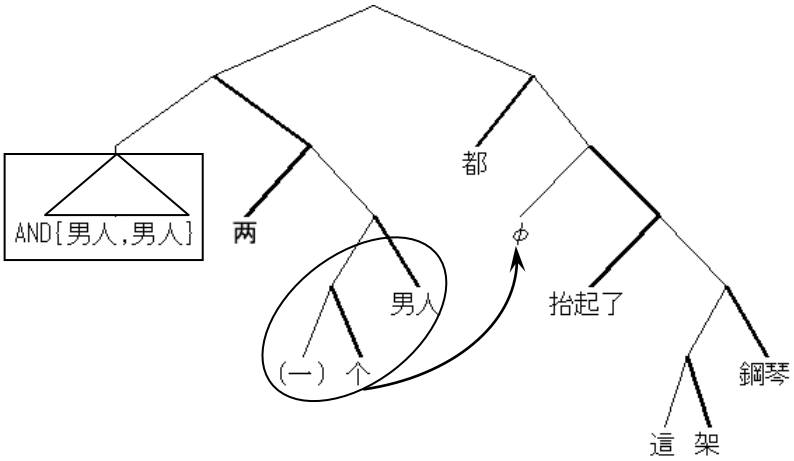
(106)　　(105a)の LF：



(106)を読み下すと、「两个男人（２人の男の人）」は、協力して「抬起了这架钢琴（このピアノを持ち上げた）」という event の参与者となっている。この event は、「一组男人（一組の男の人たち）」と何らかの関係を持つため、この「两个男人（２人の男の人）」が協

力して行ったという集団解釈ができるようになるのである。

(107)　　(105b)の LF：



これに対して、(107)においては、「一个男人（一人の男の人）」が「抬起了这架钢琴（このピアノを持ち上げた）」という event の参与者である。この event は、「两个男人（二人の男の人たち）」という集合のメンバーの誰にでも当てはまるため、分配解釈ができるようになる。

3.7. 個体量詞と集合量詞

しかし、dou(都)に先行する複数解釈の QP さえあれば、分配解釈ができるかというと、そうでもない。たとえば、前章で紹介したように、(108)に現れる「夫妻」という一語は、実際、(109)のような複合名詞句だと考えられる。

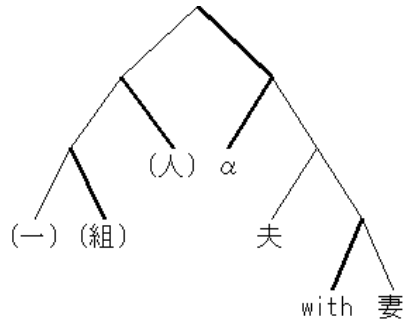
(108) a.　[张三 和 李四] [是] [夫妻] 。
　　張三 He　李四 Shi 夫婦

　　張三と李四は、夫婦である。

　　b.　*[张三 和 李四] **都** [是] [夫妻] 。
　　張三 He　李四　Dou Shi 夫婦

(109)　　「夫妻」は、α-with-GIC の構造をなす compound（複合語）である。

(110)　α-with-GIC としての「夫妻」：



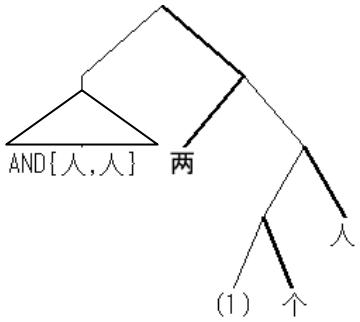
また、「両个人」という QP には、(112)と(113)の２種類の構造がありえる。

(111)　両 个 人
　　二 Cl 人

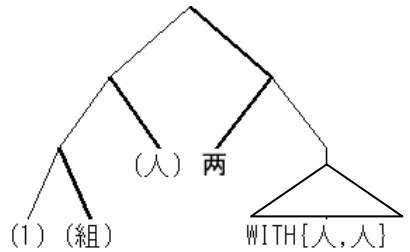
i.　（一人ずつ）二人

ii.　（一つの組）二人

(112)　α-and-GIC としての「両个人」：



(113)　α-with-GIC としての「两个人」：



一方、shi(是)は、以下のように仮定した。

(114)　shi(是)という述語は、全く同様の構造を二つ項として取る二項述語である。

(115)　shi(是)は、α-GIC を項にとることが可能である。

そうすると、(116a)が容認されず(116b)が容認されることは、以下のように説明できる。

(116) a. *一 个 人 是 夫妻 。
一 Cl 人 Shi 夫婦

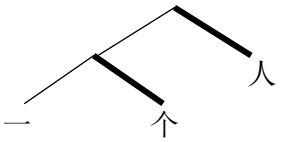
b. [两 个 人] [是 夫妻] 。
二 Cl 人 Shi 夫婦

二人は夫婦である。

単数解釈である QP「一个人」は、(66)によると、(117)の LF のはずである。

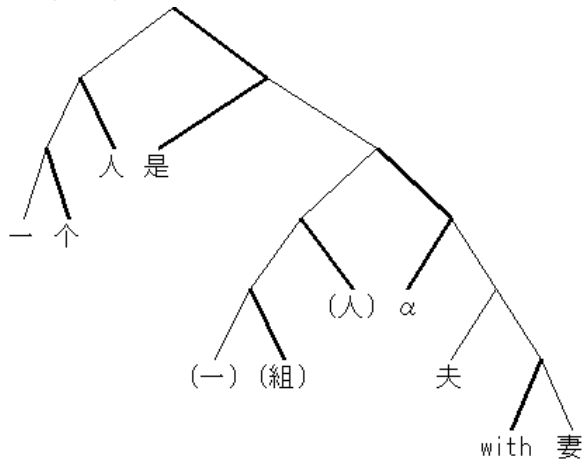
(66) Singular QP は、[1-ClP-ZP]である。

(117) [一 个 人]



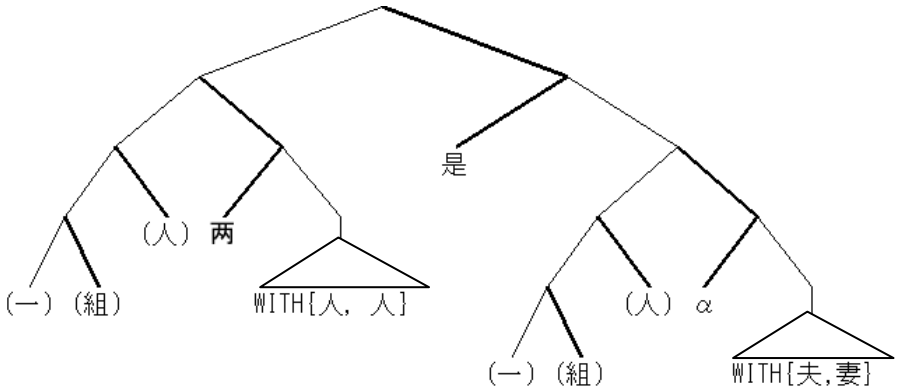
(116a)の LF は、(118)であり、(114)の違反となるため、容認できない。

(118) (116a)の LF:*

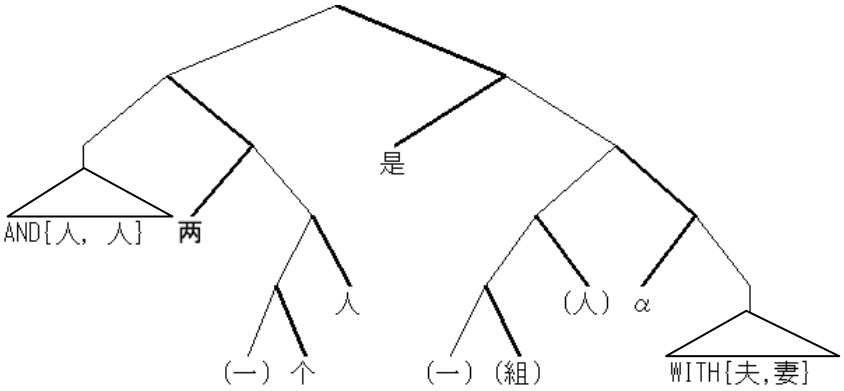


一方、これに対して、(116b)には、２通りの可能性があり、そのうちの１つが容認可能である。(119)は、(114)の条件を守っているので、容認可能な文となる。

(119)　　(116b)の LF1: ok



(120)　　(116b)の LF2:*



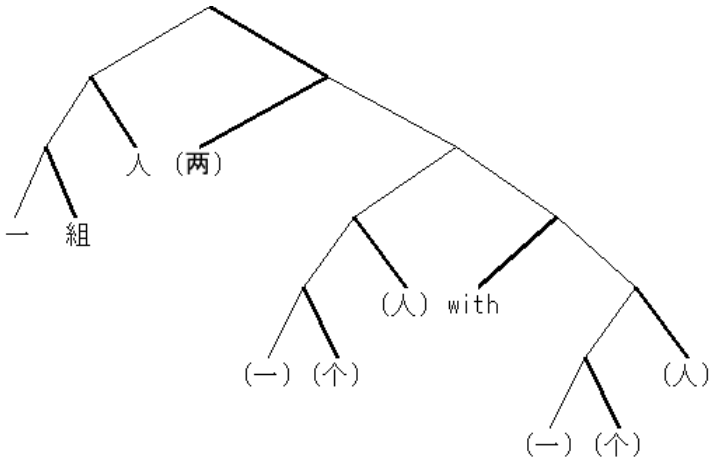
ところが、(116a)にある個体量詞「个」を集合量詞「组」に換えると、容認できなかった(116a)も(121)のように容認できるようになる。

(121)　　一 组 人 是 夫妻 。
一 Pl 人 Shi 夫婦

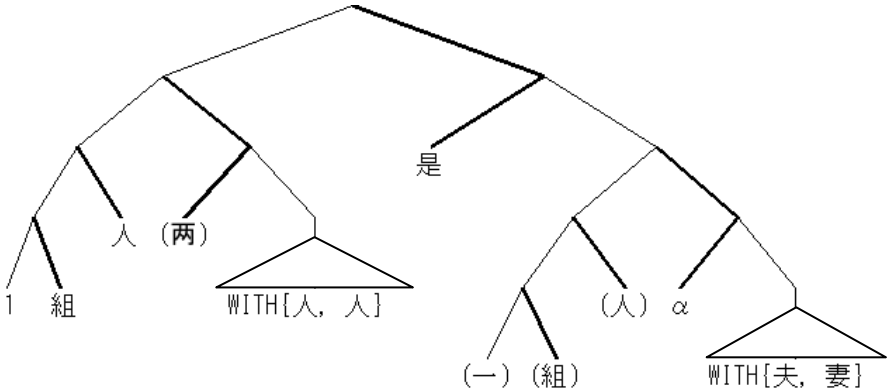
一組の人は、夫婦である。

(117)のような、個体量詞「个」が生起する「一个人」は、実質的には二人ではなく、一人である。これに対して、集合量詞「组」が生起する「一组人」は、発音上「一」とはいえ、その中身としては、二人があってはじめて「组」と言えるので、(122)の LF となっている。

(122)　　「一组人」の LF:



(123)　　(121)の LF：



(123)のような LF ならば、(114)の述語 shi(是)の制限が守られるので、(121)は容認可能である。しかし、(116b)に dou(都)を入れると、容認不可能になる。これに対して、(124b)は容認可能である。

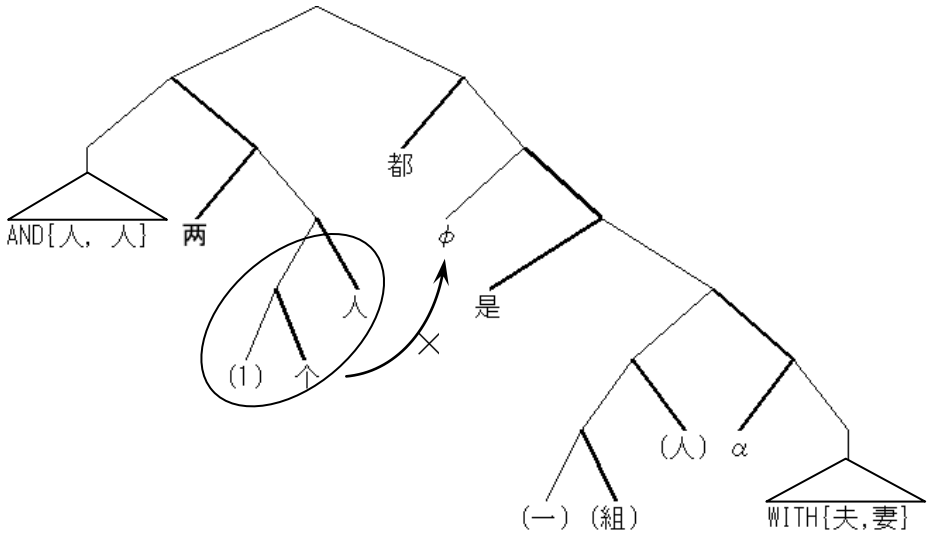
(124) a.　*两 个 人 **都** 是 夫妻 。
　　二 Cl 人　Dou Shi 夫婦

　　b.　两 组 人 **都** 是 夫妻。
　　二 Pl 人　Dou Shi 夫婦

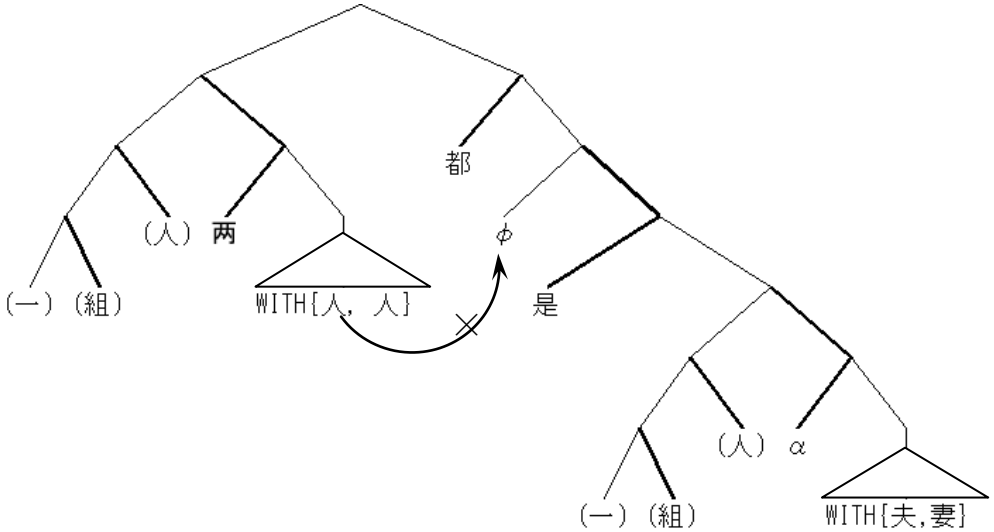
　　二組の人は、みな夫婦である。

(124a, b)における相違は、量詞の部分のみである。個体量詞「个」が生起している(124a)が容認できないのに対して、集合量詞「组」が生起している(124b)は容認できる。(124a)には、２つの可能性があるが、いずれも(114)の条件を満たしていないため、容認されないのである。

(125)　　(124a)の LF1: *

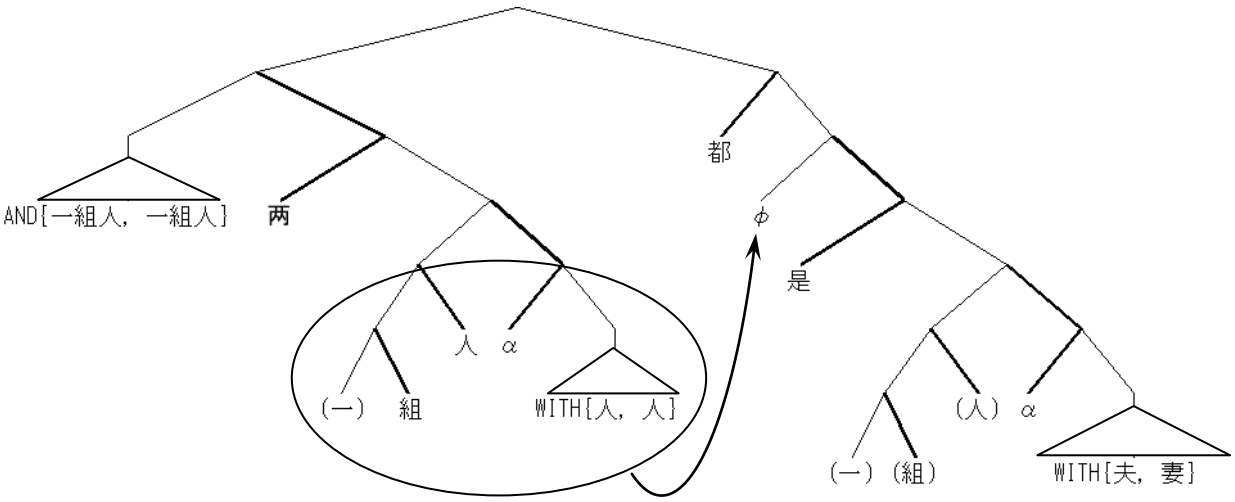


(126)　　(124a)の LF2：*



(124b)にも２通りの LF があるはずである。例えば､(127)のような LF だと容認可能である。

(127)　　(124b)の LF：ok



(126)と(127)の対立から分かるように、(127)では、集合を表す量詞の特性により、(114)の述語 shi(是)の制限が守られているため、(153b)は容認されるのである。

3.8. mei(毎)と suoyou(所有)の違い

中国語には、「すべて」という意味を表す suoyou(所有)という語がある。Lin (1998)は、(128)にある対立から、「毎(一)个」も、「所有的」も、dou(都)と共起しなければならない全称量化の word だとしている。

(128) a.　毎 个 人 *(都) 买 了 书。
　　どの人も本を買った。
　　'Everyone bought a book.'
　　b.　所有 的 人 *(都) 买 了 书。
　　すべての人が本を買った。
　　'All the people bought a book.'　　[Lin (1998): p.219, (31)]

しかし、collective predicate が現れると、dou(都)が必要ではないことを以下の例を以て説明している[14]。

---

[14] これは、元々Dowty (1987)の観察に由来している。

(i)　a.　*All the students/*many students are numerous/ are a large group.
　　b.　All the students/many students are alike/ gathered in the hall/meet for lunch.
　　c.　All the students/*many students dispersed/ scattered in all directions.
　　[Dowty (1987): p.110]

(129) a. 所有 的 人 合买 了 一 个 蛋糕 送 李四。
すべての人が李四のために共同で一つのケーキを買ってあげた。
'All of the people bought a cake together for Lisi.'
[Lin (1998): p.220, footnote (i)]

b. *所有 的 人/ 那些人 都 合买 了 一个 蛋糕 送 李四。
lit. すべての人は／あの人たちは、李四のためにそれぞれ共同で一つのケーキを買ってあげた。 [Lin (1998): p.234, (54)]

c. 所有 的 人/ 那些人 都 合用 一个 厨房。
すべての人は／あの人たちはそれぞれ（誰かと）一つのキッチンを共用している。
'All people use one kitchen together.' [Lin (1998): p.234, (55)]

そこで、Lin (1998)は、dou(都)を制限するための条件を次のように提案した。

(130) Proper Subset Condition on the Use of Dou:
Dou only occurs with predicates which have a proper subset entaiment on the group argument. [Lin (1998): p.234, (56)]

しかし、Lin (1998)では言及されていないが、(129)にある「所有的」を「毎一个」に換えると、容認性がかなり異なってくる。

(131) a. *毎 一 个 人 合买 了 一个 蛋糕 送 李四。
b. *毎 一 个 人 都 合买 了 一个 蛋糕 送 李四。
c. *毎 一 个 人 都 合用 一个 厨房。

つまり、dou(都)の生起条件は、述部だけでなく、主部（もしくは、主語）位置に現れる要素にも関わると言える。(3)の mei(毎)文においては、dou(都)は共起しても、しなくてもよいが、yiqi(一起)は、共起してはならない。

Dowty (1987)は、英語の collective predicates には２種類のものがあり、All は(ii-b)の predicate と共起できないとしている。

(ii) a. distributive sub-entailments:
be alike, disagree, disperse, etc.
b. devoid of distributive entailments:
be a large group, be a group of four, be numerous, etc.

(3) a. [每 一 个 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

一人の男の人につき、一台のピアノがあり、複数台のピアノがそれぞれ持ち上げられた。

b. [每 一 个 男人] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

どの男の人も、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

c. *[每 一 个 男人] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Mei 一 Cl 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

ところが、(3)と(133)の比較から分かるように、suoyou(所有)は、分配解釈も集団解釈もできる。ということは、suoyou(所有)は、前章で述べた he(和)と似たものだということである。そこで、本論文では以下のように仮定する。

(132) suoyou(所有)には、α-with-GIC と α-and-GIC の２種類がある。

(132)の仮定があれば、(133)の対立が説明できる。

(133) a. [所有 的 男人] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Suoyou De 男の人持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

i. すべての男の人たちが一緒に一台のピアノを持ち上げた。（より一般的な解釈）

ii. すべての男の人たちがそれぞれ一台のピアノを持ち上げた。

b. [所有 的 男人] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Suoyou De 男の人 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

すべての男の人たちがそれぞれ一台のピアノを持ち上げた。

c. [所有 的 男人] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Suoyou De 男の人 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

すべての男の人たちが一緒に一台のピアノを持ち上げた。

一方、(129a)が容認可能で、(131a)が容認できないことには、次の理由が考えられる。述語の「合买」は、前章で提案された「结婚」のように、協同する複数の参与者を要求する動詞なので、音形を持たない Yiqi がすでに含まれているのである。

(129) a. 所有 的 人 合买 了 一个 蛋糕 送 李四。

(131) a.　*每 一 个 人 合买 了 一个 蛋糕 送 李四。

(134)　　「结婚」のような述語には、音形を持たない Yiqi が含まれている。

そうすると、mei(每)-phrase は、α-and-GIC であり、(43)の yiqi-predication の条件を満たせないので、容認不可能である。

(43)　　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

これに対して、suoyou(所有)には、α-with-GIC の形態がありうるため、yiqi-predication の条件を満たして容認可能である。(129b), (131b, c)は、Lin (1998)によると、(130)の制限により容認不可とされているが、もし、「和别人（他人と）」という文脈を想定すれば、collective predicates が生起しているとは言え、容認度がかなり向上するだろう。

(135) a.　*[每 个 男人] [合用] [一 本 书] 。
　　Mei Cl 男の人 共用する 一 Cl 本
　b.　[每 个 男人] **都** (和 别人) [合用] [一 本 书] 。
　　Mei Cl 男の人 Dou He 他人 共用する 一 Cl 本
　　どの男の人も、それぞれ（他の人と）一冊の本を共用している。

(136) a.　[所有 男人] [合用] [一 本 书] 。
　　Suoyou 男の人 共用する 一 Cl 本
　　すべての男の人が一冊の本を共用している。
　b.　[所有 男人] **都** (和 别人) [合用] [一 本 书] 。
　　Suoyou 男の人 Dou He 他人 共用する 一 Cl 本
　　すべての男の人が、それぞれ（他の人と）一冊の本を共用している。

suoyou(所有)に似ているものとしては、「全部（全部）」「全体（全体）」などの副詞、(137)の「大家（みんな）」「大伙儿（みんな）」などの名詞 NP が挙げられる。

(137) a.　大家　**都**　抬起　了 一 架 钢琴。
　　みんな Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ
　　みんなそれぞれ一台のピアノを持ち上げた。
　b.　大家　**一起**　抬起　了 一 架 钢琴。

みんな yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

みんな一緒に一台のピアノを持ち上げた。

mei(毎)と似ているものとしては、吕叔湘 (2002)で「普称」「各称」と呼ばれる「叠用单位词（重複して用いられる量詞）」が挙げられる[15]。

(138) a. 人人 **都** 抬 起 了 一 架 钢琴。
人々 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

人々は、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

b. *人人 **一起** 抬 起 了 一 架 钢琴。
人々 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

3.9. 先行研究

また、全称量化の先行研究として、英語と中国語の分野にある以下のものを紹介しておく。

3.9.1. 英語の研究

3.9.1.1. Barwise and Cooper (1981)

論理学に普遍限量記号を導入したのは Frege (1879)である。以来、Whitehead & Russell (1911-1913)などを経て、一階述語論理 (first-order predicate logic)において、幾度となく変遷をたどってきてはいるものの、たとえば(139)のような全称量化の意味を表現するさいに、論理記号を用いることは、今日まで一向に変わっていない。現在最も広く用いられているのは、「∀」[16]という記号である。

(139) a. $[\text{Every man}]_{NP}\ [\text{sneezed}]_{VP}$ [Barwise and Cooper (1981): p.164, (6c)]

b. $\forall x\ [\text{man}(x) \rightarrow \text{sneeze}(x)]$ [Barwise and Cooper (1981): p.165, (9c)]

---

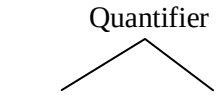
[15] 吕叔湘 (2002, p.190)は以下のように述べている。「普称和各称都是就个体而言，而意在全体；意思和全称相近而说法不同。（「普称」と「各称」は、個体視点に立って、全体を言い含めている。意味は、全称量化に近いが、言い方が異なる。）」

(i) a. 条条街上**都**挤满了人。（どの道も人でごった返している。）
b. 个个戏院子**都**买满座。（どこの劇場も満席となっている。） [吕叔湘 (2002): p.190]

[16] これは、ドイツの論理学者 Gentzen (1935)によって導入されたものだといわれている。

しかし、Barwise & Cooper (1981)は、全称量化の「∀」と存在量化の「∃」という記号だけでは、量化表現構文の意味をすべて表示しきれないので（たとえば、more than half, most など[17]）、「determiner」と「set expression」という概念を用意して、「quantifier」というものを再解釈した。

(140)



[Barwise and Cooper (1981): p.162]

これにより、英語の every の意味を(141)のように説明している。

(141) ||Every|| is the function which assigns to each A⊆ E the family ||Every|| (A) = {X⊆ E | A ⊆ X }. [Barwise and Cooper (1981): p.169, S(5.b)]

(142) $[[[\text{Every}]_{Det}\ [\text{woman}]_{N}\ ]_{NP}\ [\text{sneeze}]_{VP}]_{S}$ [Barwise and Cooper (1981): p.173, (16')]

しかし、そもそも記号だけでも、難解な上、「determiner」、「set expression」などの概念についての説明がほとんど皆無に等しいため、every の持つ意味が十分に表されているとは言えない。

3.9.1.2. Lakoff (1970a)

Lakoff (1970a)は、(143), (144)のような例にはそれぞれ二通りの解釈がありうるのに対して、(145), (146)の例には一通りの解釈しかないことに注目した。Lakoff (1970a)では、(143a), (144a)のような解釈は「group reading」、(143b), (144b)のような解釈は「quantifier reading」と呼ばれている[18]。

(143) That archaeologist discovered nine tablets. [Lakoff (1970a): p.160, (1)]

a. あの考古学者は、９枚の板の束を<u>一度に</u>発見した。

b. あの考古学者は、９枚の板を<u>ばらばらに</u>発見した。

---

[17] Barwise and Cooper (1981, p.161)は、高階集合論理 (high-order set-theoretic definition)と呼んでいる。

[18] 「group reading」は、本論文の「集団解釈」、「quantifier reading」は、「分配解釈」とほぼ同じ趣旨だと考えられる。

(144) All the boys carried the couch upstairs. [Lakoff (1970a): p.160, (2)]

a. すべての男の子たちは、一緒に長いすを上階へ運んだ。

b. すべての男の子たちは、それぞれ長いすを上階へ運んだ。

一方、(143)と(144)と違って、few や every が現れる(145)と(146)では、「quantifier reading」しかとれない。

(145) That archaeologist discovered few tablets. [Lakoff (1970a): p.160, (4)]

あの考古学者は、少数の板をばらばらに発見した。

(146) Every boy carried the couch upstairs. [Lakoff (1970a): p.160, (3)]

男の子たちは、それぞれ長いすを上階へ運んだ。

Lakoff (1970a)では、「group reading」はともかくとして、「quantifier reading」がとれた場合、few や every などの Quantifier に Quantifier Lowering（もしくは Quantifier Raising）というルールが適用されると、表層構造において、最も左に生起する Quantifier は、LF においても、より高い位置に生起するはずだと述べられている。ところが、なぜ多義的な(143), (144)と違って、(145)と(146)が一義的になるのか、しかも、分配解釈しか取れないのか、という点については述べられていない。

3.9.1.3. Roberts (1990)

Roberts (1990)は、(147)と(148)が「distributive reading」しかとれないことに注目した。これは、「distributivity」を作る「quantificational force」要素の each が生起しているためだとされている。

(147) Each man lifted a piano. [Roberts (1990): p.77, (3)]

どの男の人も、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

(148) Bill, Pete, Hank, and Dan each lifted a piano. [Roberts (1990): p.77, (4)]

Bill, Pete, Hank, と Dan は、それぞれ一台のピアノを持ち上げた。

一方、each が生起していない(149)と(150)は、「distributive reading」と「group reading」の両方ができて、多義的である。

(149) Four men lifted a piano. [Roberts (1990): p.77, (1)]

a. 四人の男が一緒に一台のピアノを持ち上げた。

b. 四人の男がそれぞれ一台のピアノを持ち上げた。

(150) Bill, Pete, Hank, and Dan lifted a piano. [Roberts (1990): p.77, (2)]

a. Bill, Pete, Hank, と Dan が一緒に一台のピアノを持ち上げた。

b. Bill, Pete, Hank と Dan がそれぞれ一台のピアノを持ち上げた。

Roberts (1990)は、Link (1987)の D-operator という概念を用いて、(151)のような式で分配読みを表す述部の意味を解釈している。

(151) ^{D}VP: = λx ∀ y [atomic-i-part-of (y, x) → VP (y)] [Roberts (1990): p157, (83)]

そして、もし述部に D-operator が現れたら、(152b)のような implicit な場合でも、(152c)のような explicit な場合でも、分配読みが生じる。つまり、(152d)のような解釈が含意されている。一方、D-operator がなければ、(152a)のような集合読みがとれるようになるが、(152d)のような解釈が含まれていない。

(152) a. Bill, Pete, Hank, and Dan lifted a piano. cf.(150a)

b. Bill, Pete, Hank, and Dan ^{D}[lifted a piano]. cf.(150b)

c. Bill, Pete, Hank, and Dan each lifted a piano. =(148)

d. Pete lifted a piano. [Roberts (1990): p.158, (94)]

しかし、このような記号の羅列だけで、果たして文の意味が十分表されているのか、疑問を禁じえない。

3.9.2. 中国語の研究

3.9.2.1. Huang (1996)

中国語の mei(每)の研究の中で、Huang (1996)は、mei(每)と dou(都)の共起可能性に関して、(153)と(154)にある非対称性に着目した。

(153) a. [每 一 个 女孩] 唱 了 [一 个 歌] 。
Mei 一 Cl 女の子 歌う Asp 一 Cl 歌

女の子たちは、一人につき一曲を歌った。

b. [每 一 个 女孩] 都 唱 了 [一 个 歌] 。
Mei 一 Cl 女の子 Dou 歌う Asp 一 Cl 歌

どの女の子も、一曲を歌った。 [Huang (1996): p.33, (32)]

(154) a. *[每 一 个 学生] 喜欢 [这 本 书] 。
Mei 一 Cl 学生 好きだ この Cl 本

b. [每 一 个 学生] 都 喜欢 [这 本 书] 。
Mei 一 Cl 学生 Dou 好きだ この Cl 本

どの学生も、この本が好きだ。 [Huang (1996): p.35, (36); p.38, (46)]

Huang (1996)は、(155)の「skolem function」を使って、(156)を(157)のように書き換えた。

(155) skolem function:
'EVERY (P, f(P))' is true iff P is a subset of f(P),
where f(P) is constructed from P by an appropriate total skolem function f.
[Huang (1996): p.18, (4)]

そうすると、(156)のような「every」文も「skolem function」で解釈できるようになる。

(156) Every [man] [kissed a woman]. [Huang (1996): p.16, (1)]

(157)で言えば、P の集合というのは「MAN」からなるものの集合であり、f(P)の集合というのは{y| KISSED(y, f(x))∧WOMAN(f(x))}からなる集合である。

(157) EVERY ({x| MAN(x)}, {y| KISSED(y, f(x))∧WOMAN(f(x))}),
where f is a function that maps men onto women. [Huang (1996): p.18, (5)]

同様に、中国語の mei(每)に関しても「skolem function」が適用できると Huang (1996)で主張されている。skolem function f(x)の変項（variable）になりうるのは、以下のようなものである。

(158) mei(每)の skolem function f(x)の変項：
i. indefinite noun phrases
ii. reflexive pronouns
iii. event variables

(153) a. [每 一 个 女孩] 唱 了 [一 个 歌] 。
Mei 一 Cl 女の子 歌う Asp 一 Cl 歌

どの女の子も一曲を歌った。

b. EVERY ({x| GIRL (x)}, {y| SANG (y, f(x)) ∧ SONG (f(x))})

[Huang (1996): p.33, (32)]

(159) a. [每 一 个 候选人] 谈 了 谈 自己。
Mei 一 Cl 候補者 語る Asp 語る 自分自身

どの候補者も自分自身について語ってみた。

b. EVERY ({x| CANDIDATE (x)}, {y| TALKED-ABOUT (y, f(x)) ∧ (f(x) = y)})

[Huang (1996): p.34, (34)]

3.9.2.2. Lin (1998)

Lin (1998)は、mei(每)と dou(都)の共起現象に注目して考察を行った。

(160) a. *每 个 人 买 了 书。
Mei Cl 人 買う Asp 本

b. 每 个 人 **都** 买 了 书。
Mei CL 人 Dou 買う Asp 本

どの人も本を買った。

c. *所有的 人 买 了 书。
Suoyou de 人 買う Asp 本

d. 所有的 人 **都** 买 了 书。
Suoyou de 人 Dou 買う Asp 本

すべての人がそれぞれ本を買った。 [Lin (1998): p.219, (31)]

Lin (1998)は、Schwarzschild (1991, 1996)の generalized D-operator 概念を借りて、中国語の dou(都)も generalized D-operator だとして、(161)の式を作った上で、(162)のような条件を設定した。

(161) Preliminary Translation of *dou*:

dou ⇒ λP λX ∀y [y∈X→P(y)], where P∈ $D_{<e,t>}$ [Lin (1998): p.205, (5)]

(162) *Proper Subset Condition on the Use of* Dou:

Dou only occurs with predicates which have a proper subset entailment on the group argument. [Lin (1998): p.234, (56)]

mei(毎)に関しては、Lin (1998)は、以下の記号式で説明している。

(163) meiyi-ge → $\lambda P\ \lambda Q\ \exists X\ [{*P}(X)\ \&\ \forall Y\ ({*P}(Y) \rightarrow Y \subseteq X)\ \&\ Q(X)]$

[Lin (1998): p.236, (60)]

3.10. まとめ

本章では、α-GIC という構造が mei(毎), QP にも適用できることを確認した。

(44) Mei は、α-and-GIC の主要部にしかならない。

(66) Singular-QP は、[1-ClP-ZP]である。

(67) Plural-QP には、α-with-GIC と α-and-GIC の２種類の構造の可能性がある。

第四章　不定語から構成される α-GIC

4.1. 本章の問題提起

いよいよ序章で提示した問いに答えなければならないことになる。本章では、中国語の不定語（shei(谁)を代表例として）にかかわる量化解釈（存在量化、全称量化）と疑問解釈をめぐって、議論を展開していく。

4.1.1. 不定語平叙文

まず、中国語研究において、モダリティ[1]という概念を表すには、「语气」という概念がしばしば使われている。吕叔湘 (2002)と孙锡信 (1999)は、中国語のモダリティ要素である「语气」について、以下のように述べている。

(1)　概念内容相同的语句，因使用的目的不同所生的分别。 [吕叔湘 (2002): p.258][2]
（同じ内容の文で、使用目的が異なることによって生じる差異。）

(2)　A. 语气是表示语句的不同作用，适用于不同的交际目的的情绪表现；
（語気とは文の異なる効果を表し、さまざまなコミュニケーションの目的において適用される情緒表現である。）
B. 语气是附着于整个句子的；
（語気は、文全体に付着するものである。）

---

[1] 本論文では、「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表す形式」という益岡 (1991, p.30)の広義の「モダリティ」を採用する。Palmer (2001)によると、モダリティを表すには、ふつう３種類の文法的なマーカーがある。

(i)　Basically there are three types of marker: (i) individual suffixes, clitics and particles, (ii) inflection and (iii) modal verb. [Palmer (2001): p.19]

王力 (1988)は、中国語の「语气词」について以下のように述べている。

(ii)　汉语语气词所表示的语气虽然近似于西洋语言的语气 (mood)，但在表现方式上大大不同。西洋语言的语气通过动词的屈折变化来表示的，而汉语的语气则是通过语气词来表示的。
（中国語の「语气词」が表している「语气」は、西洋言語の語気 (mood)に近い面はあるものの、表現の仕方がかなり異なる。西洋言語の語気は、動詞の屈折によって表されているのに対して、中国語の語気は、「语气词」によって表されている。）
[王力 (1988): p.414]

[2] 吕叔湘 (2002: p.258)によると、「广义的语气（広い意味での語気）」と「狭义的语气（狭い意味での語気）」がある。本論文で用いているのは、「狭义的语气（狭い意味での語気）」である。

C. 语气是一种语法范畴，不同的语气可以表示不同的语法意义。
（語気は、文法範疇の一つであり、さまざまな語気により、異なる文法と意味が表現できる。） [孙锡信 (1999): p.1]

(3a)のように、不定語が現れる構文の文末に疑問の「语气助词」[3]（吗／呢）がなく、かつ、下降調の「语调（イントネーション）」を伴えば、いわゆる平叙文 (declarative sentence) となり、疑問文の解釈がとれない。(3a)は、述語論理学ではよく存在量化 (existential quantification) [4]と呼ばれるものである。つまり、(3a)においては、「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」という述語の特性を満たしている人が少なくとも一人存在するという意味解釈がなされる。これは、(3b)のように、文頭に you(有)が現れた場合でも、ほぼ同じ解釈ができる。しかし、you(有)の代わりに、文頭に wulun(无论)が生起すると、容認できなくなる。

(3) a. [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰かが、一台のピアノを持ち上げた。

b. 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰か一台のピアノを持ち上げた人がいる。

c. *无论 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

---

[3] 中国語学の研究分野で、「语气」を表す「语气助词 (particle)」という類のものがあると言われている（劉月華 他 (1988), 朱德熙 (1982) や吕叔湘 (2002)など）。

(i) 「语气助词」の定義：
「語気助詞（语气助词）は、単独で、或いはイントネーションや他の品詞といっしょになってさまざまな語気（話し手の表現意図や情意を示す語調）を表すことができる。」とされている。 [劉月華 他 (1988): p.325]

さらに、吕叔湘 (2002, p.283)によると、そのうち、疑問を表す「疑问语气词」には、文末に生起するもの（「呢」「吗」「吧」「啊」など）と、文頭に生起するもの（「可」,「难道」）の２種類がある。本論文では、文末における疑問の「语气助词」のみを対象として扱い、２種類に分けて疑問マーカーと称する。(1) ma(吗)という疑問マーカー、(2) ne(呢)を代表とする疑問マーカー（ya(呀), a(啊)など）である。

[4] 『概念記法』（藤村龍雄訳 p.39, 脚注 10）によると、Frege (1879)は、存在量化の表記法として「 ⊤∪x⊤ F(x) 」を用いて、「これは『F が一つ存在する』という場合を含む、というふうに理解すべきである」と述べた。また、Frege とは独立に、普遍限量記号 Π のみならず、存在限量記号 Σ までもが、Peirce (1883)によって考案されたという。

ところで、不定語の後に dou(都)を入れると、(4a)のような語順では、いわゆる全称量化 (universal quantification) と呼ばれる解釈になる。つまり、「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」という述語の特性を満たしている人が話題にあるすべての人に当てはまらなければならないということになる。これは、(4b)のように、you(有)を文頭に挿入すると容認できなくなる。一方、(3c)と対照的に、(4c)のように、[wulun(无论)-不定語-dou(都)]の語順では、容認可能となり、全称量化解釈がとれる。

(4) a. [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

b. *有 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. 无论 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

ところが、(4)と違って、不定語の後に、yiqi(一起)が生起すると、(5a, b, c)のいずれも容認できなくなる。

(5) a. *[谁] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
誰 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *有 [谁] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
You 誰 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *无论 [谁] **一起** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

問題は、なぜ不定語が yiqi(一起)と共起して分配解釈が作れないのかということである。

4.1.2. 不定語疑問文

また、(6a, b)のように、不定語が現れる構文の文末に、「疑问语气词」（吗／呢）、もしくは、上昇調のイントネーションを伴えば、いずれも容認可能で、疑問文解釈になる。この場合、平叙文解釈がとれない。ただし、(6a)と(6b)の対立から分かるように、文末の「疑问语气助词」（吗／呢）によって、異なる疑問文解釈になる。ma(吗)が生起している(6a)

においては、「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」人がいるかどうかということの真偽性（正否）が問われているのに対して、ne(呢)が生起している(6b)においては、一台のピアノを持ち上げた人がいることは確実で、誰なのかという値 (value)[5] が問われている[6]。本論文では、ma(吗)が文末に生起可能な疑問文のことを「MA 疑問文」と呼び、ne(呢)が生起可能な疑問文のことを「NE 疑問文」と呼ぶ[7]。

(6) a. [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰かが、一台のピアノを持ち上げたの？

b. [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰が、一台のピアノを持ち上げたの？

この場合、(7)のように、文頭に you(有)が生起した文でも、(6a, b)に相当する解釈ができる。

(7) a. 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰かが、一台のピアノを持ち上げたの？

b. 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

---

[5] ここでいう値 (value)とは、名前、職業など人間に属する具体的な性質のことを指している。

[6] 英語学では、よく yes-no question, constituent question と呼ばれている。吕叔湘 (2002: p.282)は、疑問文を「是非问句」と「特指问句」の２種類に分けている。

(i) a. 是非问句。我们的疑点不在这件事情的哪一部分，而在这整个事情的正确性。这类疑问句可以用“然”和“否”回答。（われわれの疑問は、出来事の一部にではなく、出来事そのものの正確性にある。この種の疑問文に対して「はい」、「いいえ」で答えられる。）」
例：你找李先生吗？（あなたは、李さんを探しているの？）
b. 特指疑问句。我们对于事情的某一部分有疑问。这类疑问句不能用“然”和“否”回答。（われわれが出来事の一部に疑問を抱く場合に使われる。この種の疑問文に対して「はい」、「いいえ」で答えられない。）
例：你找谁？（あなたは、誰を探すの？）
你找他作甚么？（あなたは、何のために彼を探しているの？）

[7] 劉月華 他 (1988), 朱德熙 (1982) や吕叔湘 (2002)などの先行研究では、ma(吗)は、「是非疑问句（諾否疑問文）」専用の疑問語気助詞として、他の語気助詞と明らかに異なる性質があるため、研究対象として多く扱われているが、ne(呢)は、肯定文にも、疑問文にも使用されるので、疑問語気助詞としてあまり取り立てて扱われていない。本論文では、ma(吗)との対立候補として、ne(呢)を扱うことにする。

誰が、一台のピアノを持ち上げたの？

しかし、疑問文解釈は、wulun(无论)が生起する(8a, b)には適用できず、いずれも容認不可能である。

(8) a. *无论 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

b. *无论 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

[wulun(无论)+不定語]の語系列で容認できるのは、dou(都)が後続する(9a)のような MA 疑問文しかない。NE 疑問文は容認不可能である。

(9) a. 无论 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

b. *无论 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

wulun(无论)が生起しない(10)についても同様のことが言える。

(10) a. [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

b. *[谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

一方、(9)に対して、[you(有)+不定語+dou(都)]の連続では、MA 疑問文にも NE 疑問文にもなれない。

(11) a. *有 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 吗 ？
You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

b. *有 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

もし(11b)にある dou(都)を you(有)の先頭位置に移動すれば、(12a)のように、容認可能になる。この場合、必ず複数の人が存在していることを想定した上で、その人たちの値が問われている。(12b)は、(12a)と同じ意味解釈ができる。ところが、you(有)の代わりに、wulun(无论)が共起すると、このような操作が適用できない。

(12) a. 都 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Dou You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰と誰が、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

b. 都 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Dou 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰と誰が、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

c. *都 无论 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Dou Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

以上のような現象をまとめて、本章では、以下のような問題の解明に取り組む。

(13) 不定語は、いかにして存在量化、全称量化、そして疑問解釈を生むのか？

(14) 疑問を表すマーカーma(吗)と ne(呢)は、どのようなもので、どう働くのか？

(15) you(有), wulun(无论)は、どのようなものか？不定語平叙文解釈、不定語疑問文解釈とどう関わるのか？

もっとも、その前提として、以下の問題を解かなければならない。

(16) そもそも不定語とは、どのようなものだろうか？

4.2. 前提

本章では、以下の概念を前提として再掲しておく。

4.2.1. 叙述関係

(17) 叙述関係 (predication)：
二つの構成素が Merge によって結ばれる「aboutness」な関係。

(18) 叙述関係で結ばれる二つの構成素は、主部 (A=Topic)と、述部 (B=Predicate)になる。

(19) 叙述関係が構築される条件[8]：

a. 叙述関係を誘発 (induce) する要素

b. 関連構成素が QR (Quantifier Raising)する操作

(20) 集合が叙述関係の主部になると、連続的スキャニング (Sequential Scanning)操作が行われなければならない。

(21) 連続的スキャニングとは：
集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作である。

(22) 連続的スキャニングを経て構成された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によってつながれる。

4.2.2. 集合

(23) 等位接続句 (Coordinating Conjunctions)：

a. AND 集合：and 関係で結ばれる構造（連結等位接続）

b. OR 集合：or 関係で結ばれる構造（選言等位接続）

(24) 非等位接続句 (Non-Coordinating Conjunctions)：
WITH 集合：with 関係で結ばれる構造（連結非等位接続）

(25) or には、排他的選言 (exclusive disjunction) の or (eor) と包含的選言 (inclusive disjunction) の or (ior)の２種類の異形態がある。

4.2.3. α-GIC

(26) Item1 位置と Item2 位置に生起する構成素に素性 (feature) の F[*m*-unit]と F[*n*-unit]を付与 (assign) する範疇 α がある。

---

[8] ここでいう二つの条件は、同時に満たす必要はない。いずれか一つを満たせば、叙述関係が構築される。

(27)　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、普通直接述語の項として *θ*-role の付与を受けることができない。

(28)　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として、*θ*-role の付与を受けることができない。

(29)　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 は主部へ QR しなければならない。

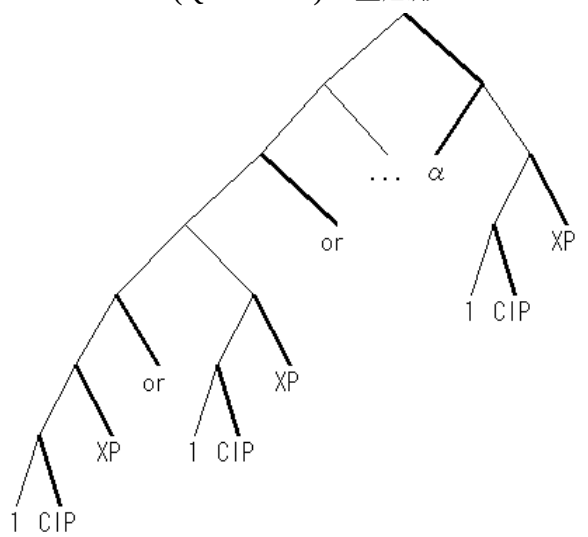
(30)　α-GIC が主部位置に生起した場合、Item1 は述部にある空範疇 φ と同一指標を持つことができる。

(31)　Item1 が述部の部分と同一指標を持つと、Item2 は叙述関係を誘発する要素の check を受けなければならない。

(32)　α は、音形を持たないものであり、PF において、AND 集合、OR 集合、WITH 集合の主要部に投射して、音形的に具現化する。

α-GIC は、α-and-GIC, α-with-GIC と α-or-GIC、３種類ある。

(33)　α-or-GIC (QP version)の基底形：

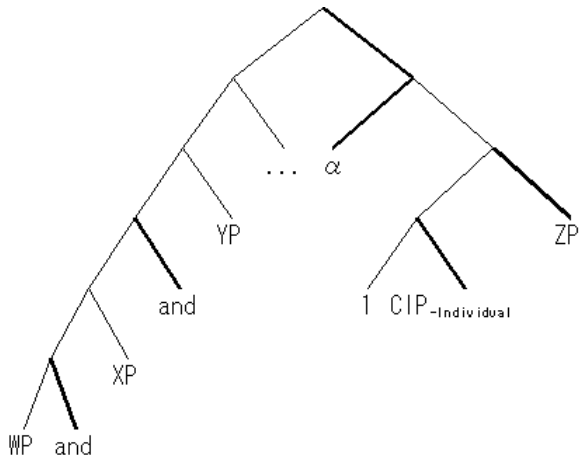


(34)　α-or-GIC は、OR 集合に含まれる or の性質によって、α-eor-GIC と α-ior-GIC がある。

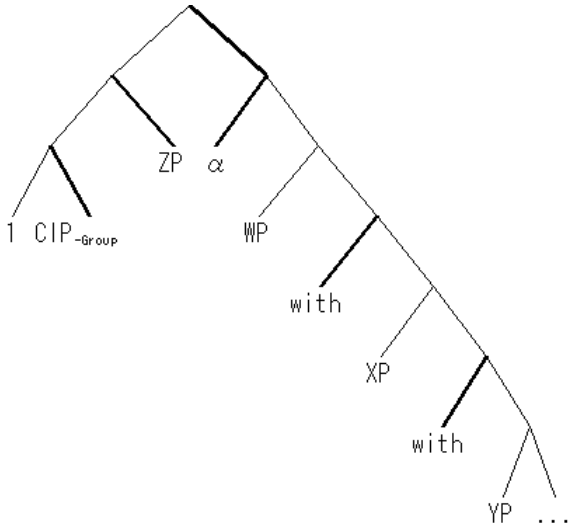
(35)　eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

(36)　　ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

(37)　　α-and-GIC の基底形：



(38)　　α-with-GIC の基底形：



4.2.4. you(有)と wulun(无论)

4.2.4.1. you(有)

また、you(有)を以下のように仮定する。

(39)　　You は、項を一つとる機能範疇 (functional category) である[9]。

---

[9] 本論文でさす you(有)は、劉月華 (1988)の「“有”字句（“有”構文）」や木村 (2011)の「存在文」の you(有)とは違うタイプのものである。木村 (2011)は、「存在文」の you(有)を以下のよ

(40)　you(有)は、You の音形の具現形であり、事物の存在を表す。

(41)　You の c 統御領域には、α-or-GIC が生起しなければならない[10]。

4.2.4.2. wulun(无论)

(42)　wulun(无论)は、その c-command 領域にある OR^E 集合に含まれる eor 関係を and 関係に変換しなければならない。

(43)　eor 関係を and 関係に変換できるのは、wulun(无论)タイプの要素しかない。

(44)　wulun(无论)によって and 関係へ変換された集合は、dou(都)による check を受けなければならない。

4.3. 不定語平叙文

4.3.1. huo(或)と haishi(还是)

第二章では、「还是」について、(45)のように仮定した。

(45)　haishi(还是)は、α-eor-GIC の α の音形の具現形であり、OR^E 集合の主要部 eor において、音形的に具現化する。

eor 関係が含まれている「还是」が生起すると、(35)を守る必要がある。

(35)　eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

うに定義している。

(i)　「存在文」とは、特定の空間もしくは時間において何らかの事物が存在することを表す構文であり、構造的には二つの項をもつ２項文である。　[木村 (2011): p.90]

[10] 黄正德 (1990)は、you(有)を「领属句（所有文）」、「完成貌（完成文）」、「存在句（存在文）」の３つに分けている。本論文で言う you(有)は、この３番目の「存在句（存在文）」にあたるものである。ただ、黄正德 (1990)は、この種の存在文は、深層構造として、文を目的語とする無主語文であり、そこから「无定名词组 (indefinite NP)」が主語位置へ移動できないため、元位置にとどまっているとしているが、その理由は、説明として不十分である。本論文では、この議論をせずに、別の機会に譲る。

(43)によれば、(35)の操作、つまり eor 関係を and 関係に変換する wulun(无论)が必要であるが、(46a)は、それが欠けているため、容認できない。

(46) a. *[张三 还是 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

b. *无论 [张三 还是 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. 无论 [张三 还是 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴]。
Wulun 張三 Haishi 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

張三にしても、李四にしても、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

一方、(46b)は、(35)の条件を満たす要素 wulun(无论)が現れてはいるものの、dou(都)が現れていないため、(44)の条件が満たされずに、容認できない。結局、(46c)のように、wulun(无论)も dou(都)も生起している場合しか、容認できない。

(44) wulun(无论)によって and 関係へ変換された集合は、dou(都)による check を受けなければならない。

これに対して、huo(或)というのは、(47)のようなものである。

(47) huo(或)は、α-ior-GIC の α の音形の具現形であり、OR[1]集合の主要部 ior において、音形的に具現化する。

(36) ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

したがって、(48b, c)のように、たとえ eor 関係を and 関係に変換する wulun(无论)が現れても、(36)と(42)が両方満たされなくなるため、容認できない。

(48) a. [张三 或 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
張三 Huo 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

張三、もしくは李四が、一台のピアノを持ち上げた。

b. *无论 [张三 或 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 張三 Huo 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. *无论 [张三 或 李四] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴]。
Wulun 張三 Huo 李四 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

(48a)は、「張三か李四か分からないが、一台のピアノを持ち上げた人が存在する（もちろん、二人ともの可能性もありうる）」という意味解釈になる。これは、huo(或)が inclusive な選択関係だからである。

4.3.2. 存在量化解釈

次に、不定語による存在量化解釈[11]を分析する。(3a)が表しているのは、「一人で一台のピアノを持ち上げた人がいる」という意味解釈である。不定語「谁」は、「誰か分からないが、少なくとも一人は存在する（複数の可能性もありうる）」という意味になっているので、(48a)の huo(或)と似ている。ということは、(3)にある「谁」には、inclusive な ior 関係でつながっている OR^{I}集合が含まれていると仮定できる。

(3) a. [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰かが、一台のピアノを持ち上げた。

b. 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰か、一台のピアノを持ち上げた人がいる。

---

[11] 吕叔湘 (2002, p.183)をはじめ、このような解釈は通常「虚指（不定指示）」と呼ばれている。

(i) a. 虚指的用法离开疑问的本义比较远些，在近代文言以及语体文里常常用“某”字表示，如“似乎在哪里看见过”作“曾于某处见之”。 [吕叔湘 (2002): p.183)]
（「虚指」という使い方は、疑問の本来の意味から遠ざかっている。近代の文体及び語体文においては、「某」という字で表示されることが多い。）

b. 疑問代名詞が不定指示に用いられた場合も回答を要求するわけでなく、その疑問代詞は、「わからない、言えない、あるいは、はっきり言う必要のない人または事物」の代わりをするだけである。 [劉月華 他 (1988): p.90]

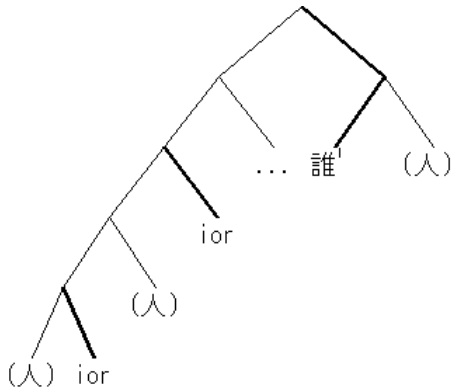
朱德熙 (1982, pp.93-94)は、疑問詞には、非疑問の用法があり、その２番目にこの存在量化の使い方を取り上げている。

(ii) 第二是用疑问代词来指称不知道或者说不出来的人、事物、处所、时间等。（第二に、疑問代名詞を用いて、知らない、もしくは言えない人、事物、場所、時間をさすことができる。）

a. 我记得**谁**给我说过来着。（私は、誰かから聞いたことがあることを覚えている。）
b. 一进屋就嚷饿得慌，要先吃点**什么**。（部屋に入ったとたんに、腹が減って、何か食べたいと叫んでいた。）
c. **哪天**我去找你。（いつか会いに行くよ。）
d. 看上去很面熟，似乎在**哪儿**见过似的。（どうも顔に見覚えがある。どこかで会ったようである。）

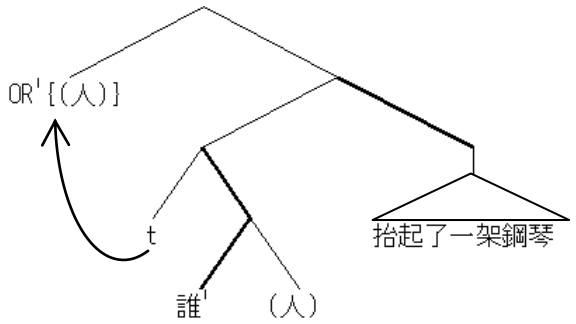
c. *无论 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

(49) shei-ior-GIC である「谁 I」の LF[12]：



そうすると、(3a)の LF は、(50)のようになっているはずである。

(50) (3a)の LF：



(50)において、不定語「谁」は、θ-role を付与される Agent の位置に生起しているため、(28)と(29)を守る必要がある。

(28) α-GIC において、Item1 しか、述語の項として、θ-role の付与を受けることができない。

(29) Item1 が θ-role を付与されると、Item2 が主部へ QR しなければならない。

(50)を読み下すと、実際「ピアノを持ち上げたのは、一人」であり、この人は、たくさんの人からなる OR^I 集合のうちの一人という解釈となる。OR^I 集合では、(36)の条件が守られ

[12] 以下 shei-GIC の Item2 位置に生起している集合を略して OR^I{（人）},OR^E{（人）}と記す。

なければならないためである。

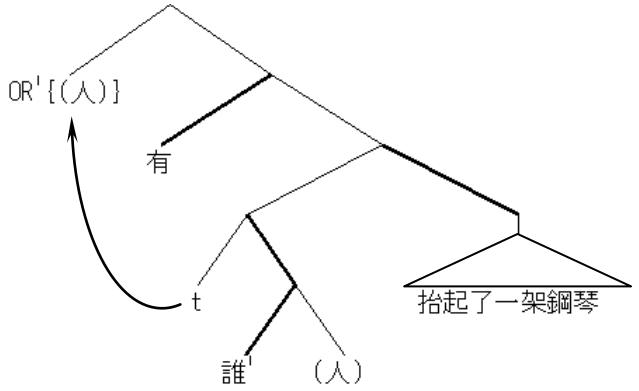
(36)　　ior 関係は、and 関係に変換されてはいけない。

一方、wulun(无论)は、(42)の特性を持つので、wulun(无论)が生起する(3c)は、容認できない。

(42)　　wulun(无论)は、その c-command 領域にある OR^E 集合に含まれる eor 関係を and 関係に変換しなければならない。

これに対して、(3b)は、次の LF となっている。

(51)　　(3b)の LF：



you(有)というのは、(39), (41)の特性を持つので、α-ior-GIC としての(3b)は、you(有)の条件を満たして、容認可能である。

(39)　　You は、項を一つとる機能範疇 (functional category)である。

(41)　　You の c-command 領域には、α-or-GIC が生起しなければならない。

4.3.3. 全称量化解釈

しかし、これでは、まだ(4a, c)が説明できない。(4a, c)は、いわゆる全称量化ができる解釈である[13]。

---

[13] 吕叔湘 (2002, p.183)は、このような解釈を「任指（任意指定）」と呼んでいる。

(4) a. [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

b. *有 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

c. 无论 [谁] **都** [抬 起 了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げた。

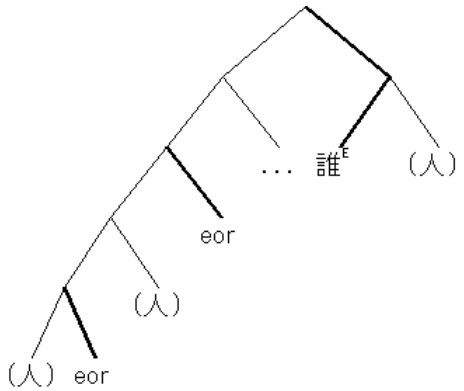
wulun(无论)の(42), (43), (44)の性質により、(4c)が容認可能ということは、(4c)にある不定語「谁」は、α-eor-GIC でもあると考えざるを得ない。

(42) wulun(无论)は、その-command 領域にある OR^E 集合に含まれる eor 関係を and 関係に変換しなければならない。

(43) eor 関係を and 関係に変換できるのは、wulun(无论)タイプの要素しかない。

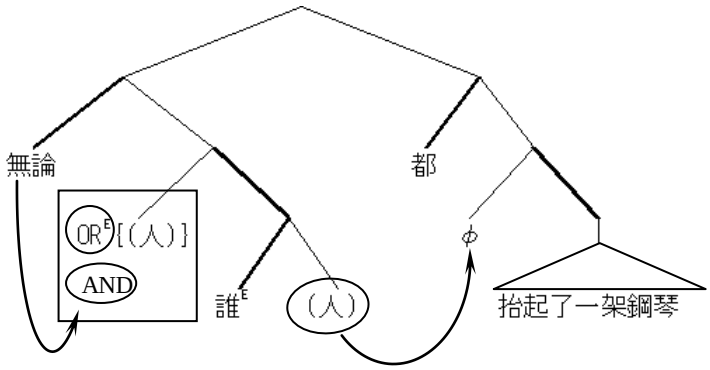
(44) wulun(无论)によって and 関係へ変換された集合は、dou(都)による check を受けなければならない。

(52) shei-eor-GIC である「谁 ^{E}」の LF：



(i) 任指指称词多数用在复句的第一小句里，这些指称词上头常常加“无论”、“任凭”、“不管”等字样，但也不是非加不可，尤其是在否定句里。
（任意指示を表す代名詞はよく従属節に使われる。これらの指示詞の先頭に、「无论」、「任凭」、「不管」などのことばがよく付け加えられる。ただし、不可欠なものではない。特に否定文においては。）

(53)　　(4c)の LF：



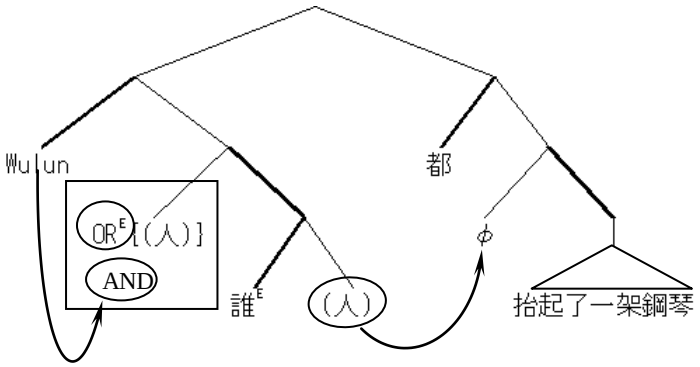
問題は、(4a)のように、wulun(无论)が生起していなくても、不定語と dou(都)の共起だけで、全称量化ができることをどう解釈するかである。(4a)が容認できるということは、dou(都)の特性によると、shei(谁)には AND 集合が含まれなければならない。

(54)　　Dou は、Item2 において、AND 集合が含まれていることを check できていなければならない。

ということは、(4a)においては、音形を持たない wulun(无论)が生起していると仮定せざるを得ない。

(55)　　音形を持たない wulun(无论)タイプの要素が音形を持たない eor 関係を and 関係に変換する。

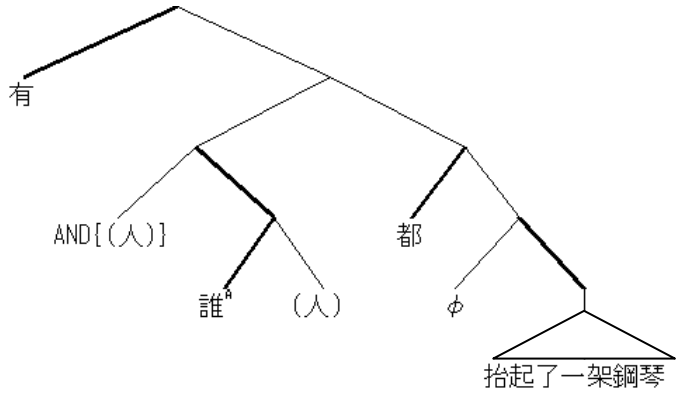
(56)　　(4a)の LF：



これに対して、(4b)が容認できないのは、以下の条件による制約があるからである。

(41)　　You の c-command 領域には、α-or-GIC が生起しなければならない。

(57)　　(4b)の LF：*



4.3.4. 集団解釈の場合

(5a, b, c)にある対立から分かるように、不定語の shei(谁)は、yiqi(一起)と共起して、集団解釈をとることができない。

(5)　a.　*[谁] 一起 [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　誰　Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　b.　*有 [谁] 一起 [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　You　誰　Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　c.　*无论 [谁] 一起 [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
　　Wulun 誰　Yiqi 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

yiqi(一起)は、α-with-GIC をチェックする要素である。(5)が容認不可能であるということは、不定語の shei(谁)が α-with-GIC ではないということになる。

(58)　　Yiqi は、叙述関係 yiqi-predication を作るものである。

(59)　　Yiqi は、Item2 において、[1-ClP$_{\text{-Group}}$-ZP]が含まれていることを check できていなければならない。

4.4. 不定語疑問文

ところで、(6a)のように、不定語が現れる構文の文末に「疑问语气词」ma(吗)、もしくは、上昇調のイントネーションを伴えば、MA 疑問文となる。これをどう解釈すべきだろうか？

(6)　a.　[谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 吗 ？
　　誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰かが、一台のピアノを持ち上げたの？

4.4.1. 先行研究

4.4.1.1. 疑問文の分類

吕叔湘 (2002, p.282)は、疑問語気について以下のように述べている。

(60) 疑问语气是一个总名，“疑”和“问”的范围不完全一致。（中略）询问，反诘，测度，总称为疑问语气，除一部分测度句外，都取问句的形式。

[吕叔湘 (2002): p.282]

（疑問語気とは、総称である。「疑」と「問」の範囲は必ずしも一致していない。尋問、反問、推測の３つが合わせて「疑問語気」と呼ばれている。）

そして、３つの疑問語気の「疑」と「問」について、以下のように例を挙げて説明している。

(61) a. 测度（推測）：
一方面，有传疑而不发问的句子（一方では、疑いを示すが、聞かない文がある）
例：也许会下雨吧（雨が降るだろう）[14]

b. 反诘（反問）：
另一方面，也有不疑而故问的句子（もう一方では、疑いを示さずに、故意に聞く文もある）
例：这还用说？（これ言う必要があるの？）＝“这不用说”（これは言うまでもない）

c. 询问（尋問）：
疑而且问（疑いがあり、さらに聞く）
例：前次的信收到没有？（先日の手紙は届いたの？）

吕叔湘 (1985)をはじめ、中国語の疑問文は、普通大まかに４つのタイプに分けられているようである。

---

[14] 吕叔湘 (2002, p.282)は、「语调」を使えば、「疑問」か「推量」かが分かれると述べている。彼は「可以用问话的语调，也可以不用问话的语调（疑問のイントネーションを使ってもいいし、疑問ではないイントネーションを使ってもいい。）」としている。

(62)　　问句有四种格式：甲、特指问，乙、是非问，丙、正反问，丁、选择问。其中甲和乙是基本，丙和丁是从乙派生的。（也可以说正反问和是非问是选择问的特殊形式。）甲和乙的区别：甲句中必有疑问词（疑问指别词或疑问代词），乙句中没有疑问词。乙可以用对，不对回答，甲不能这样回答。

[吕叔湘 (1985): p.426]

疑問文には、４つのパターンがあり、それぞれ甲：「特指问（疑問詞疑問文）[15]」、乙：「是非问（諾否疑問文）」、丙：「正反问（反復疑問文）」、丁：「选择问（選択疑問文）」である。そのうち、甲、乙は基本であり、丙と丁は、乙からの派生である。甲と乙の区別：甲には、必ず疑問詞が含まれるが、乙には、疑問詞が含まれない。そして、乙に対しては、「对（はい）, 不对（いいえ）」で答えられるが、甲に対しては、このような答え方ができない。

(62)を簡単にまとめると、(63)のようになる。

(63)　甲：特指问（疑問詞疑問文）
例　你笑什么？（あなたは、何を笑っているの？）
乙：是非问（諾否疑問文）
例　你要吃点什么吗？（何か食べたくない？）
丙：正反问（反復疑問文）
例　你认得不认得这个人？（この人を知っているの？）
丁：选择问（選択疑問文）
例：你今天去还是明天去？（あなたは今日行くの？明日行くの？）

[吕叔湘 (1985): pp.426-432]

そして、甲と乙の区別は、以下のように述べられている。

(64)　　甲的句子里有一个成分是未知数，是 X，乙是一个完整的句子，没有 X，但这个句子的真实性有疑问。丙正反问是由两个是非问句合并而成，丁选择问也是由两个是非问句合并而成。　[吕叔湘 (1985): p.426]

（甲の文には、未知のもの X が含まれている。乙の文は、完全な文であり、X が含まれていないが、しかし、その文の真偽性に疑問がある。丙、丁は、二つの「是非问句」が合併したものである。）

---

[15] 訳し方は劉月華 他 (1988) を参考にしている。

例： 你去？你不去？ ⇒ 你去不去？（あなたは行くの？行かないの？）
你去？我去？⇒ 你去还是我去？（あなたが行く？それとも、私が行く？）

また、疑問文を表す手段として以下の３つが挙げられている。

(65) 问句应有的手段（疑問文によく使われる手段）：
a. 语调（イントネーション）[16]
b. 语助词（語気助詞）
c. 疑问词及其他词语（疑問詞及びその他のことば） [吕叔湘 (1985): p.426]

本論文では、基本的には吕叔湘 (1985)の２種類の分け方を支持する。つまり、おおまかに言えば、(63)の甲と乙が疑問文のベースとなっており、本論文では、(63)の甲を NE 疑問文、乙を MA 疑問文と称する。ただし、(63)にある甲と乙を区別する基準が本当に(62)だけでいいのか、「疑问词」（不定語）とは一体何なのか、なお不明瞭だと言わざるを得ない。

4.4.1.2. 疑問語気助詞

次に、疑問を表す語気助詞に関する先行研究を見てみる。王力 (1988, p.587)によると、上古時代には「疑问语气词」が四つあったという。

(66) 上古疑问语气词主要是四个：乎、哉、与（欤）、邪（耶）。（上古の疑問語は、主に四つある。「乎、哉、与（欤）、邪（耶）」）
1. 纯粹传疑：乎（純粋に疑わしく思う）
2. 纯粹反诘：哉（純粋に詰問を表す）
3. 要求证实：与（欤）、邪（耶）。（実証を求める）
例：管仲俭乎？（管仲は倹なるか？）（《论语・八佾》）

王力 (1990, p.452)によると、その上古時代の「语气词」が近代においては、ほとんど跡形もなくなり、新しい「语气词」に代わられてしまった。例えば、ma(吗)と ne(呢)がそれである。しかし、ma(吗)と ne(呢)にも、歴史上の変遷を見ることができる。現代中国語「语

---

[16]「语调（イントネーション）」に関して、吕叔湘 (2002, p.258)は、以下のように指摘している。

(i) 语气的表达，兼用语调和语气词：语调是必需的，语气词则有时可以不用，尤其是在直陈语气。（語気を表すには、イントネーションと語気助詞が兼用されている。イントネーションは、必須であるが、語気助詞は、必ずしもつかなくても良い。特に陳述語気を表す場合。）

气词」の研究分野では、疑問を表す「语气助词」ma(吗)は、昔の「麽」から来ており、そしてその「麽」は、「无（無）」を語源にしているという共通認識がある。

(67) a. “无”字就是白话里的“麽”和“吗”的前身。 [吕叔湘 (2002): p.288, 16.45]
（「无」は現代口語にある「麽」と「吗」の前身である。）

b. “吗”的较古形式是“麽”，“麽”应该是从“無”演变来的。[王力 (1990): p.593]
（「吗」の古い形は、「麽」であり、「麽」は、「無」が変化したものである。）

c. 是非疑問（肯定か否定かを問う）に用いる。古代では時として《不》《否》その他、否定の意味をもつ語を句末において疑問句をつくることがあるが、唐代になると《無》もそのようにもちいられるようになった。これが《磨》《摩》とかかれるようになり、宋代になると《麽》が用いられるようになった。なお《吗》がつかわれるようになったのは清代である。[太田 (1957): p.360]

(68) a. 子去寡人之楚，亦思寡人**不**？（史记 • 张仪列传） [太田 (1957): p.360]
（子寡人を去りて楚にゆく、また寡人を思うやいなや）

b. 晚来天欲雪，能饮一杯**无**？（唐诗 •白居易《问刘十九》） [王力 (1988): p.440]
（晩来（ばんらい）天雪ふらんと欲す、能（よ）く一杯を飲むや無（いな）や）

c. 君自故乡来，应知故乡事，来日绮窗前，寒梅着花**未**？（唐诗 王维《杂诗》）
（君故郷より来る、まさに故郷の事を知るべし。来日綺窓の前、寒梅花をつけしや未だしや。）

d. 丞相可得见**否**？（史记 •秦始皇本纪） [太田 (1957): p.361]
（丞相にはお会いできますか）

以上のような事実から、黄国营 (1986)は、ma(吗)について以下のようにまとめている。

(69) 一般认为，“吗”字句来源于“不、否、无”等构成的正反问句，“吗”就是从正反问句末表示“反”（否定）的那一部分虚化而来的。 [黄国营 (1986): p.127]
（普通、「吗」が含まれる文は、「不」「否」「无」などの正否疑問文に由来していると考えられている。「吗」は、正否疑問文の「反」（否定）の部分が「虚化（虚構化）」したものである。）

一方、ne(呢)という語気助詞は、ma(吗)よりかなり遅れて現れていると言われている[17]。

---

[17] 具体的な分析は、王力 (1988), 孙锡信 (1999), 吕叔湘 (2002)などを参照されたい。ne(呢)の語

太田 (1957), 、劉月華 他 (1988)は、ne(呢)が疑問文に使われるときには、およそ①疑問詞疑問文“特指问句”、②選択疑問文“选择问句”、③反復疑問文“正反问句”があると述べている。

太田 (1957, pp.363-364)では、甲類の《呢》は承前疑問・假定（仮定），および疑問の強調に用いられるとされている[18]。また、「疑問の語調」について、(70)のように３種類に分類した上で、「もともと疑問句であるものにさらに添加されたものであるから、これをとっても疑問をあらわすことはかわりなく、この点で疑問句をつくる《吗》とは同じではない。また是非疑問にはさらに《呢》を添えることがない。」としている。

(70)　疑問の強調：

a. 特指疑問（なに、いつ、どこ、どれ、たれ、なぜなどの意味をもつ疑問の代名詞や副詞などをもち、話の内容についてきくもの）

b. 選択疑問（相反する二つの事柄をあげ、そのどちらであるかをきくもの）

c. 反復疑問（肯定否定によるもの）　[太田 (1957): p.363]

劉月華 他 (1988)にも、太田 (1957)と似たような分類が見られる。

(71) a. 疑問詞疑問文（特指问句）：
これは疑問代詞を用いて尋ねる疑問文である。

b. 反復疑問文（正反问句）：
主に述語の肯定形と否定形を並べてつくるもので、答える人はそのうちの一方を返答として選ぶ。

c. 選択疑問文（选择问句）：
選択しようとする二つ或いは数個の可能性を“.....（是）..... 还是 .....”或いは“.....（是）..... 还是 ..... 还是 .....”を使ってつなげ、回答者にそのうちの一つを答えとして選ぶよう求めるものである。

[劉月華 他 (1988): pp.672-676]

そして、ne(呢)の使い方に関しては、以下のように述べられている。

(72) a. 疑問を表す語気助詞“呢”（表記上は“呐”とも書かれる）は疑問詞疑問文

源が何なのか、様々な議論があり、定説がないため、ここでは詳述しない。

[18] 本論文では、承前疑問、假定に関して、議論を展開しないので、これらの用法についての記述は割愛する。

“特指问句”に用いられ、文中にはふつう、さらに“谁”（だれ）、“什么”（なに）、“怎么样”（どう）、“哪儿”（どこ）などの疑問を表す代詞がある。文の疑問を表すはたらきは主に疑問代詞によって担われ、“呢”はあってもなくてもいい。“呢”を用いると「不思議に思う気持ち」、「いぶかしく思う気持ち」が含まれることが多い。

① 这是怎么回事呢？（これはどうしたことだ。）

② 小英啊，部队明天就要走了，咱们送给同志们些什么呢？（英くん、部隊はあした出発するんだが、われわれは同志たちに何をあげようか。）

b. 選択疑問文“选择问句”、反復疑問文“正反问句”に用いられ、この時、文末のイントネーションはふつう低く、緩やかである。選択疑問文、反復疑問文に“呢”を用いると、語気は婉曲でおだやかになり、相談、意向伺いに用いられることが多い。

① 咱们是去颐和园呢，还是去北海呢？（わたしたちは頤和園に行きましょうか、それとも、北海公園に行きましょうか。）

② 今天晚上你去不去呢？（今夜あなたは行きますか？）

[劉月華 他 (1988): pp.327-328]

上に述べた ma(吗)と ne(呢)の特徴に基づいて、本論文では、疑問文について、以下のように提案する。

(73) 疑問素性[QF]を付与する２種類の疑問マーカーQ_{-MA}と Q_{-NE}が文末に生起する。

(74) 疑問素性[QF]が付与されると、疑問文解釈になる。

問題は、[QF]は、どのようにして、どこに付与されるのかということである。

4.4.2. dou(都)が生起しない疑問文

4.4.2.1. MA 疑問文

(75)は、文末に疑問を表す語気助詞 ma(吗)が生起する典型的な MA 疑問文である。

(75) [$_{IP}$张三 抬 起 了 一 架 钢琴] 吗？
張三 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma
張三は、一台のピアノを持ち上げたの？

前述したとおり、ma(吗)という疑問の語気助詞は、歴史上、「无，不，未，否」といった否定の要素と関わっているため、(75)の ma(吗)は、実際には、(76)のような二つの部分、[Neg]と Q_{-MA} からなっていると考えられる。

(76)　　[$_{IP}$ 张三　抬 起　了 一 架 钢琴] [Neg] Q_{-MA}?

(77)　　Q_{-MA} は、IP の sister 位置に、否定を表す[Neg]素性を作っておかなければならない。

(76)では、「张三」という人が「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」という event(=IP)がある。その event について何も疑いがなければ、普通の肯定の平叙文に終わってしまう。ところが、Q_{-MA} によって、否定の[Neg]が作られたため、その event がある（正）かない（否）か、もしくは真 (True) か偽 (Neg)か、分からなくなり、質問される必要性が生じる[19]。つまり、正と否、真と偽は、相反する（矛盾する）二つの選択肢なので、正否、真偽の間には[真 eor 偽]のように、排他的選言関係が介在しているといえる。

(78)　　[Neg]素性と、その Merge する相手との間に、排他的な選択関係（eor 関係）が自然に現れる。

実質的に、排他的選言関係（eor 関係）があるからこそ、event そのものが疑わしくなり、質問されるということになる。そこで、疑問素性[QF]の付与を以下のように仮定する。

(79)　　[QF]は、排他的な選択関係（eor 関係）に付与されなければならない。

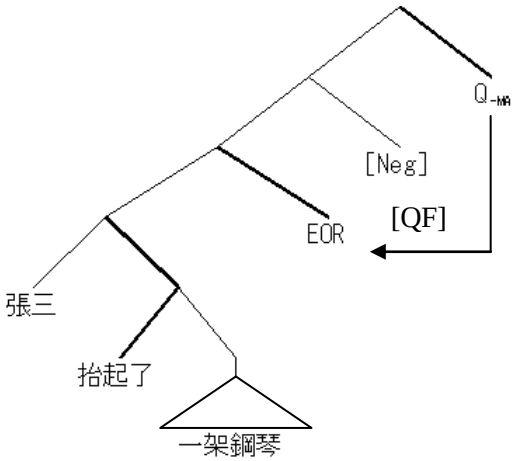
すると、(76)の LF は、(80)のようになる。

---

[19] Chao (1968)は、ma(吗)が現れる疑問文は、肯定的な答えについて 50%以下の見込みが含まれると述べている。

(i)　　This form of a question contains either a slight or considerable doubt about an affirmative answer, implying a probability of less than 50%.　　[Chao (1968): p.800]

(80)　　(76)の LF：



(75)の答えとして、正の場合は、「是（はい）」となり、否の場合は、「不是（いいえ）」となる。これがいわゆる「是非疑问句（諾否疑問文）」である。(81a)についても同様のことが言える。

(81)　a.　[$_{IP}$张三 或 李四 抬 起　了 一 架 钢琴] 吗?
　　張三 Huo 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma
　　張三、もしくは李四が一台のピアノを持ち上げたの？
　　b.　[$_{IP}$张三 或 李四 抬 起　了 一 架 钢琴] [Neg] Q_{-MA}?

huo(或)は、α-GIC の構造をなしており、主語位置に生起しているため、(27)〜(29)のような操作を行わなければならない。

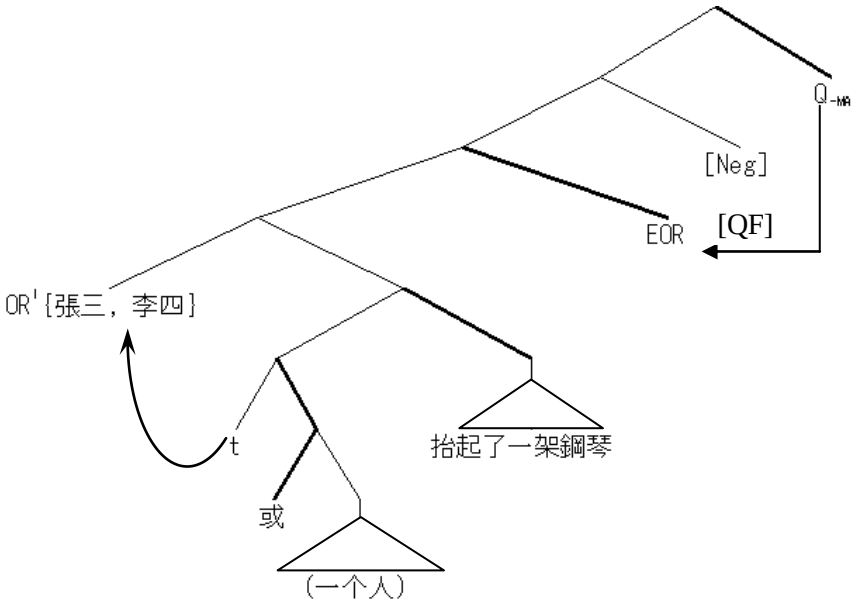
(27)　　α-GIC そのものは、叙述関係、修飾関係を介してほかの構成素と Merge できるが、普通直接述語の項として *θ*-role の付与をうけることができない。

(28)　　α-GIC において、Item1 しか、述語の項として、*θ*-role の付与を受けることができない。

(29)　　Item1 が *θ*-role を付与されると、Item2 が主部へ QR しなければならない。

その結果、(81b)は、(82)のような LF となる。

(82)　　(81b)の LF：



(82)においては、「张三」、もしくは「李四」が「抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた）」という event に加わっているが、この event 自体についての「正 eor 否」が問われることになる。したがって、その答えも、「张三」、もしくは「李四」と答えるのではなく、正の場合は「是（はい）」、否の場合は、「不是（いいえ）」と答えなければならない。

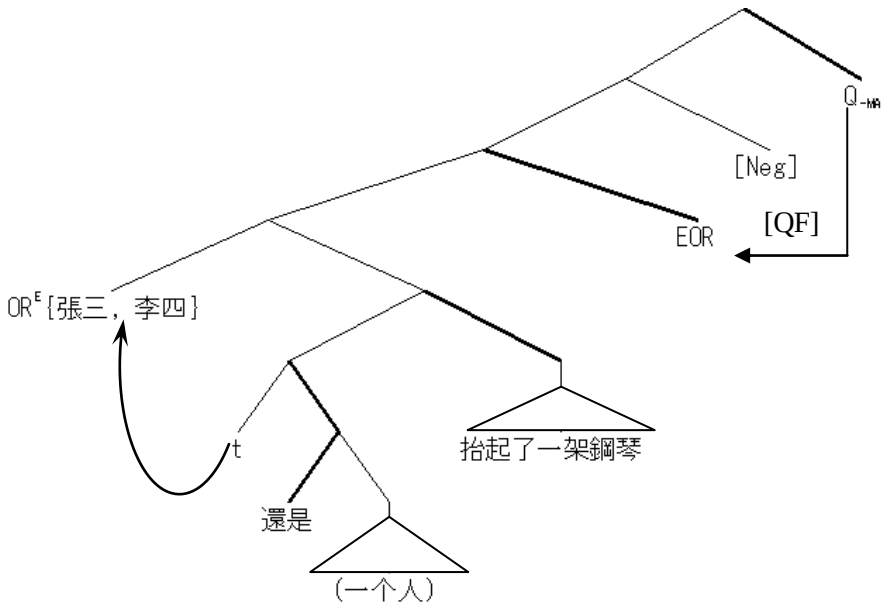
一方、(83a)は、「是非疑问句（諾否疑問文）」としては成立しない。(83a)にも(83b)のように、[Neg]と Q_{-MA} が生起していると仮定できる。

(83)　a.　*[$_{IP}$ 张三 还是 李四 抬 起 了 一 架 钢琴] 吗?
　　張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

　　b.　* [$_{IP}$ 张三 还是 李四 抬 起 了 一 架 钢琴] [Neg] Q_{-MA}?

すると、(83b)は、(84)のような LF となるはずであるが、これは容認できない。

(84)　　(83b)の LF：*



(83b)の非容認性は、(35)と(43)の制約によるものだと考えられる。つまり、OR^E集合が含まれる「张三还是李四」にある eor 関係には、(35)と(43)の制限がかかるが、(83a)には、wulun(无论)タイプの要素が現れていないため、文全体が容認できなくなるのである。

(35)　　eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

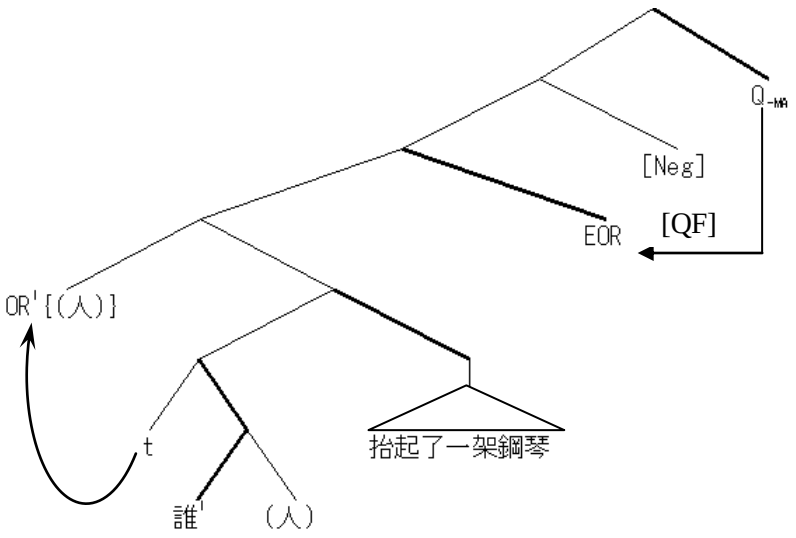
(43)　　eor 関係を and 関係に変換できるのは、wulun(无论)タイプの要素しかない。

それでは、不定語 shei(谁)の「是非疑问句（諾否疑問文）」(6a)をどう解釈するべきだろうか。(6a)は、(85)のようになっていると考えられる。

(85)　　[$_{IP}$ 谁 [抬 起　了 一 架 钢琴] [Neg] Q_{-MA} ？　cf. (6a)
　　誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

　　<u>誰かが</u>、一台のピアノを持ち上げたの？

(86)　　(85)の LF:



(86)では、「谁抬起了一架钢琴（誰かが一台のピアノを持ち上げた）」という event (IP)があるが、これが「正」であるか、「否 (Neg)」であるか問われると、MA 疑問文になる。要するに、(85)に不定語 shei(谁)が現れても、不定語の内容を聞かれるのではなく、不定語を含む event が正か否かという選択疑問文になるのである。その答え方も、同様に、正の場合は「是（はい）」、否の場合は、「不是（いいえ）」と答えなければならない。同様のことが(7a)についても言える。(7a)は、実際には(87b)のような構造をしていると考えられる。

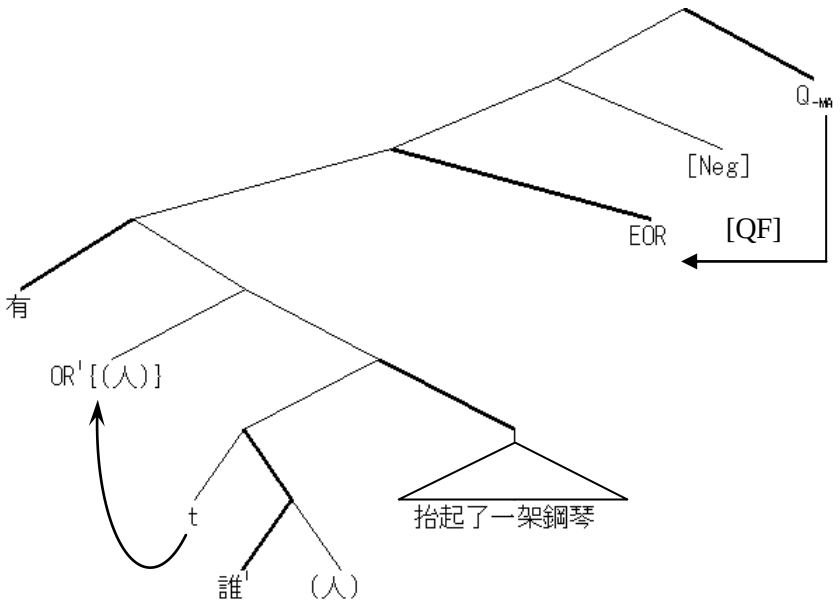
(87)　a.　有 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 吗 ？ cf. (7a)
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

<u>誰かが</u>一台のピアノを持ち上げたの？

b.　[$_{IP}$ 有 谁 抬 起　了 一 架 钢琴] [Neg] Q_{-MA}?
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ　　QF

<u>誰か</u>一台のピアノを持ち上げた人がいるということが本当なの？

(88)　　(87b)の LF：



(88)では、「誰か、一台のピアノを持ち上げた人がいる」というような event (IP)があり、このことが「正」か、「否」かが問われている。

一方、(8a)は、うまくいかない。これは、正否疑問文解釈の問題ではなく、[Neg]と Merge する前の段階、つまり、そもそも(3c)の全称量化が容認されないので、MA 疑問文としても容認できない。

(8)　a.　*无论 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 吗 ？
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

(3)　c.　*无论 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 。
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ

4.4.2.2. NE 疑問文

以下では、太田 (1957)と劉月華 他 (1988)の分類にしたがって、NE 疑問文を分析する。

選択疑問文

前述したとおり、(83)は、容認できない。しかし、もし文末に ma(吗)ではなく、(89)のように、ne(呢)、もしくは上昇調のイントネーションを伴えば、容認可能になる。

(89)　　[张三 还是 李四] [抬 起　了] [一 架 钢琴] (呢) ？

張三 Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

張三、それとも、李四が一台のピアノを持ち上げたの？

脚注 17 で述べたように、ne(呢)は語源が定まらず、用法もさまざまあるにもかかわらず、疑問文に用いられる際に、否定を作らず、単に疑念を表しているということが確実である[20]。そこで Q_{-NE} に関して、(90)のように仮定する。

(90) Q_{-NE} は、否定を表す[Neg]素性を作ってはいけない。

すると、(89)は、(91)のように書き換えられる。この LF は、(93)のようになるしかない。

(91) [张三 还是 李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] Q_{-NE} ？

(81)と比較して分かるように、(91)においては、「一个人抬起了一架钢琴（一人が一台のピアノを持ち上げた」ということは確実であり、その人が「张三」か「李四」か分からない。つまり、正否、真偽値に対する疑問ではなく、OR^{E}{张三, 李四}という集合のメンバーの選択になる。これはふたたび(79)が正しいことの裏づけになる。

(79) [QF]は、排他的な選択関係（eor 関係）に付与されなければならない。

ということは、同時に、(35)の制約も(92)のように修正しなければならない。

(35) eor 関係は、and 関係に変換されなければならない。

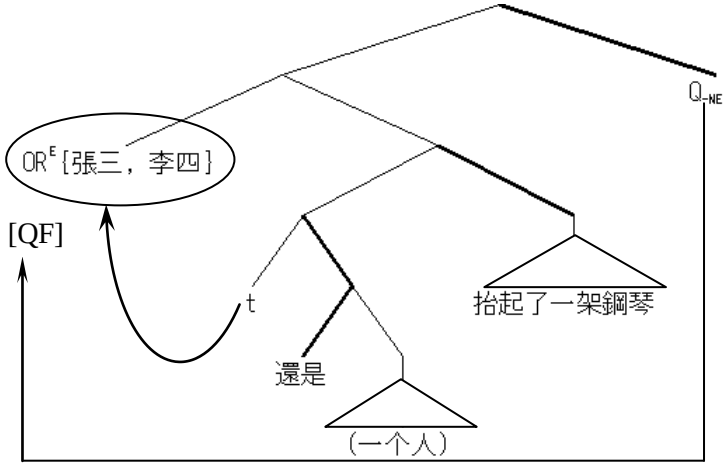
(92) eor 関係は、and 関係への変換、もしくは、疑問素性[QF]の付与のいずれかを受けなければならない。

すると、(91)の LF は、(93)のようになる。

---

[20] Chao (1968, p.802)では、「Questions with a Specific Point」とされている。

(93)　　(91)の LF：



(20)　　集合が叙述関係の主部になると、連続的スキャニング (Sequential Scanning) 操作が行われなければならない。

(21)　　連続的スキャニング：
集合のメンバーが述部と叙述関係によって逐一結ばれる操作である。

(22)　　連続的スキャニングを経て構成された新しい構築物同士は、元々の集合にあった関係によってつながれる。

つまり、(91)の LF の output として、実質的には、以下のような二つの疑問文が排他的選言として並べて産出されることになると考えてかまわない。

(94)　　[张三] [抬起了] [一 架 钢琴] (呢)?还是 [李四] [抬 起 了] [一 架 钢琴] (呢)?
張三 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne Haishi 李四 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne
張三が一台のピアノを持ち上げたの？それとも、李四が一台のピアノを持ち上げたの？

したがって、答えるほうも、「是（はい）、「不是（いいえ）」ではなく、集合のメンバーの名前で答えなければならない。これはいわゆる「选择疑问句（選択疑問文）」である。また、太田 (1957)の(70b)は不適切だと言わざるを得ない。「张三还是李四」は、「相反する二つの事柄」ではなく、単なる二つの選択肢にすぎない[21]。

---

[21] 同様の説明が太田 (1957, p.406)の以下の選択疑問文にも適用できる。太田 (1957)は、選択疑問文には以下の２式があるとしている。

(70) b. 選択疑問（相反する二つの事柄をあげ、そのどちらであるかをきくもの）

反復疑問文

生成文法の研究分野では、反復疑問文は、よく A-not-A Questions と呼ばれている[22]。(95)の３種類の A-not-A question の派生に関して、Li and Thompson (1981)は、(96a)の肯定文と(96b)の否定文を並立させた上で、二つ目の節の主語を削除すれば、(95a)となり、さらに前後の「家」をどれか一つ削除すれば、(95b), (95c)になるとしている。

(95) a. 他 在 家 不 在 家 ?
彼 いる 家 Neg いる 家

彼は家にいるの、いないの？

b. 他 在 不 在 家 ?
彼 いる Neg いる 家

彼は家にいるの、いないの？

c. 他 在 家 不 在 ?
彼 いる 家 Neg いる

彼は家にいるの、いないの？ [Li and Thompson (1981): p.536, (67)-(69)]

(96) a. 他 在 家。
彼 いる 家

彼は家にいる。

b. 他 不 在 家。

A 式（助詞を用いる）
a. 你 吃 饭 呢，还是 吃 面 呢?
きみ 食べるご飯 QF Haishi 食べる 麺類 Ne

b. 你 吃 饭 啊，还是 吃 面 呢?
きみ 食べるご飯 QF Haishi 食べる 麺類 Ne

B 式（助詞を用いない）
你 吃 饭 吃 面?
きみ 食べるご飯食べる 麺類

きみは飯をたべるか、それともうどんをたべるか？

[22] Li and Thompson (1981, p.535)は、以下のように定義している。

(i) The A-not-A question is a type of disjunctive question. The choice presented to the respondent is the choice between an affirmative sentene and its negative counterpart.

彼 Neg いる 家

彼は家にいない。 [Li and Thompson (1981): p.535, (65), (66)]

本論文では、A-not-A question は、一見「A-not-A」の形になっているが、実は、正か否かの並立となっているので、そこにも排他的な選択関係（eor 関係）が含まれていると提案する。

(97) 反復疑問文は、[A]-EOR-[not-A]疑問文である。

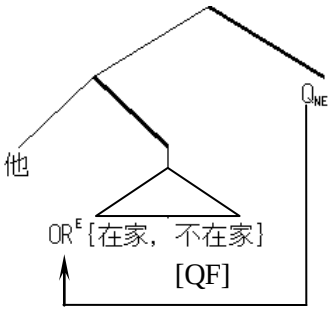
要するに、(95)の例には、どれも not=Neg が生起しているので、自然に eor 関係が生起することになる。

(78) [Neg]素性と、その Merge する相手との間に、排他的な選択関係（eor 関係）が自然に現れる。

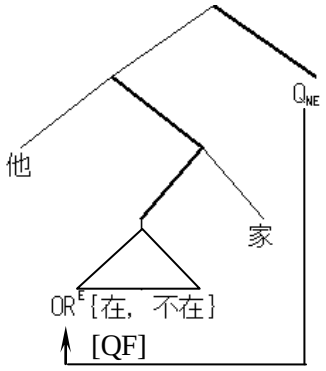
したがって、(79)の[QF]付与の規則にしたがって、(95)の LF は、(98)のようになる。

(79) [QF]は、排他的な選択関係（eor 関係）に付与されなければならない。

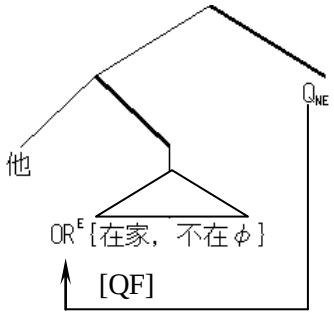
(98) a. (95a)の LF：



b.　(95b)の LF：



c.　(95c)の LF：



(98)の回答は、いずれも「是（はい）、「不是（いいえ）」ではなく、集合のメンバーで答えなければならない。すなわち、「他在家（彼は家にいる）」、もしくは「他不在家（彼は家にいない）」の二者択一となる。

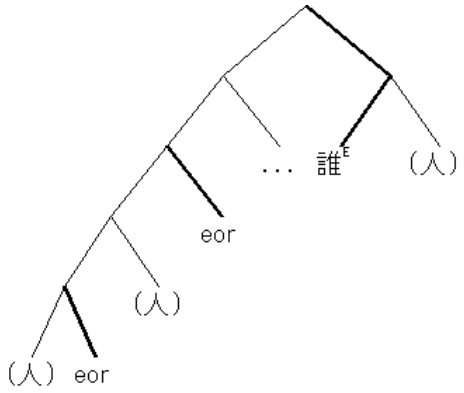
疑問詞疑問文

問題は、疑問詞疑問文の解釈である。(99a)の ne(呢)が疑問マーカーQ_{-NE}ならば、(99b)となる。

(99)　a.　[谁] [抬　起　了] [一　架　钢琴] 呢　？ cf.(6b)
　　誰　持ち上げる Asp　一　Cl　ピアノ　Ne
　　<u>誰が</u>、一台のピアノを持ち上げたの？
　　b.　[谁] [抬　起　了] [一　架　钢琴] Q_{-NE}？

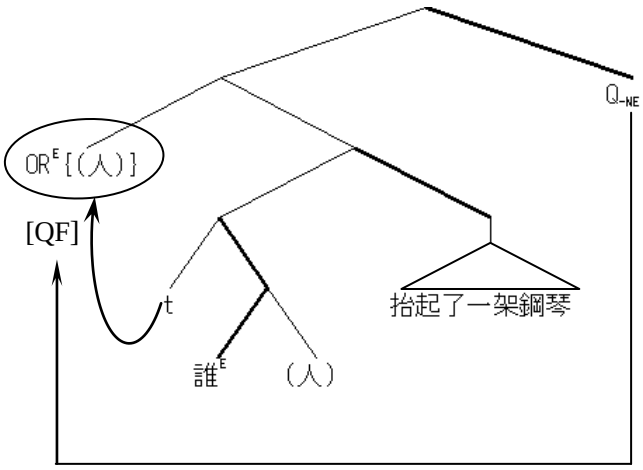
(99b)において、[QF]の付与先は、不定語の shei(谁)しかない。これは、不定語には、２種類の異形態があり、eor 関係を含む shei-eor-GIC になれるからである。

(52)　　shei-eor-GIC である「谁 ^{E}」の LF：



そうすると、(99b)の LF は、(100)になるはずである。

(100)　　(99b)の LF：



(100)をそのまま読み下すと、「（一个）人抬起了一架钢琴（一台のピアノを持ち上げた人がいる）」という event が OR^{E}{（人）}という集合と何らかの関係を持つ。そして、集合 OR^{E}{（人）}に疑問の[QF]が付与されると、メンバーの「人」の値が問われることになる。しかし、(91)と比較すると分かるように、(91)に見られるのは、{张三 eor 李四}という集合であり、選択肢には、値がついているため、そのままでも回答になる。しかし、(99)の場合、集合のメンバーは、値がついていない普通名詞「人」であるため、このままでは、疑問文の回答にはなれない。

木村 (2008)によると、中国語の shei(谁)は、属性記述を要求する機能を持っている。

(101)　　〈人〉を対象に用いる“谁”は，統語上は，日本語の「だれ」と同様，名詞相当の機能をもつ。意味的には大きく分けて二つの機能をもち，そのうちの一つは，如何ような人物であるかを問い，属性の記述を求めて対象の同定を

図ろうとするものである。すなわち属性記述を要求する機能である。

[木村 (2008): p.17, §3.1]

吕叔湘 (2002, p.173)は、shei(谁)と「什么人」について以下のように記述している。

(102) 我们有时不用“谁”而用“什么人”和“何人”。“什么人”的涵义本来和“谁”不同。回答“谁？”只要说出一个人来便了，“什么人”却是打听这个人的底细--职业、家世之类。所以有些方言里简直不用“谁”，只用“什么人”（如吴语“啥人”）

（私たちは時々「谁」の代わりに「什么人」と「何人」を使っている。「什么人」の意味は、もともと「谁」と違う。「谁？」に対して答えるとき、一人をあげればいいはずであるが、「什么人」の場合、その人の詳細―職業、家柄などまで聞かれてしまう。さらに、一部の方言では全く「谁」が使われていない。「什么人」のみ使用されている。（例えば呉方言の「啥人」）

例 他独来了？还有什么人？（彼は一人で来たの？ほかに誰がいる？）

便纵有千种风情，更与何人说？（宋词・柳永《雨霖铃》）

（便縱（たと）へ千種の風情有るとも，更に何人（なんぴと）與（と）か説（はな）さん。）

以上の木村 (2008), 吕叔湘 (2002)の記述を踏まえると、つまり、(99a)は、ほぼ(103)と同じ意味だと言える。(103)において、一台のピアノを持ち上げたのは一人の人間であるが、(103)の主語位置に生起しているのは、OR^E{(property)人，(property)人}の集合であるため、実際には、[QF]が付与されると、集合のメンバーである人（一人あるいは複数の人）の property が聞かれることになる。これに対する答えも、実際の人名（张三）や役職（課長）などとなる。

(103) 什么 人 抬 起 了 一 架 钢琴（呢）？
何 人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

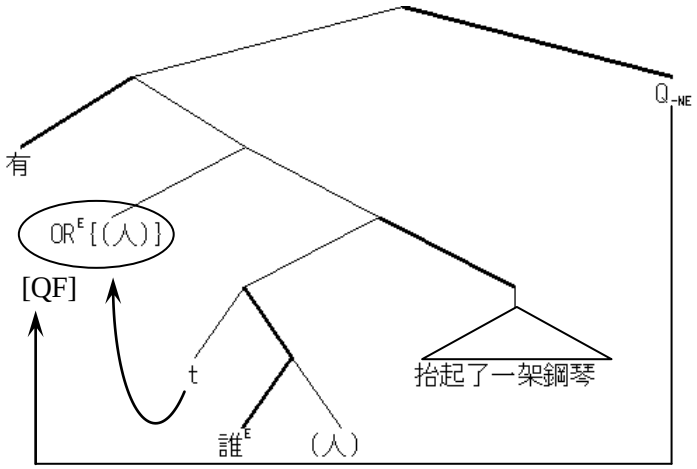
どんな人が一台のピアノを持ち上げたの？

同様に、文頭に you(有)が現れても、(104)のような LF となり、容認可能である。

(7) b. 有 [谁] [抬 起 了] [一 架 钢琴] 呢 ？
You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰が、一台のピアノを持ち上げたの？

(104)　　(7b)の LF：



しかし、(8a)と同じ理由で、疑問文解釈は、wulun(无论)が生起する(8b)には適用できない。

(8)　b.　*无论 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

4.4.3. dou(都)が生起する疑問文

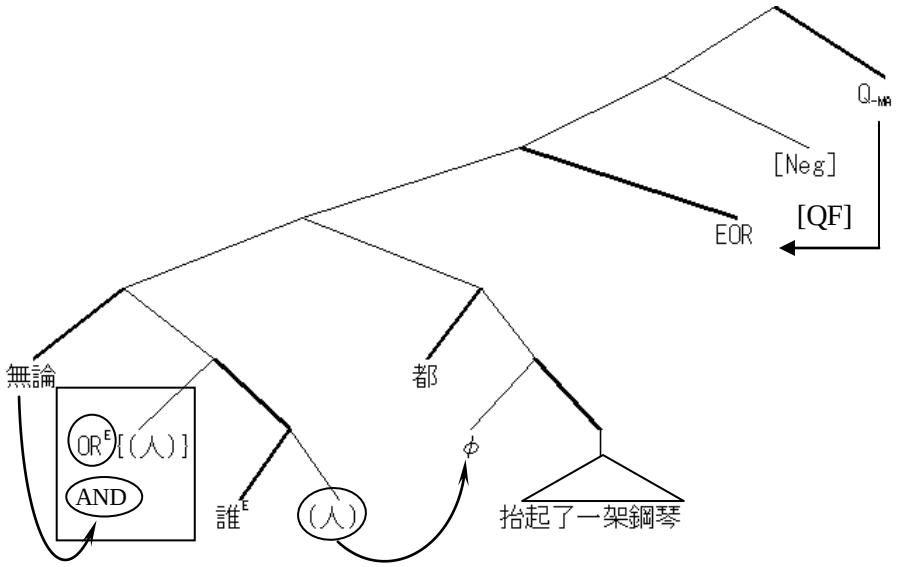
[wulun(无论)+不定語]の語系列で、容認できるのは、dou(都)が後続する(9a)のような MA 疑問文しかない。NE 疑問文は容認不可能である。

(105) a.　[IP 无论 谁 **都** 抬 起　了 一 架 钢琴] 吗 ？ = (9a)
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

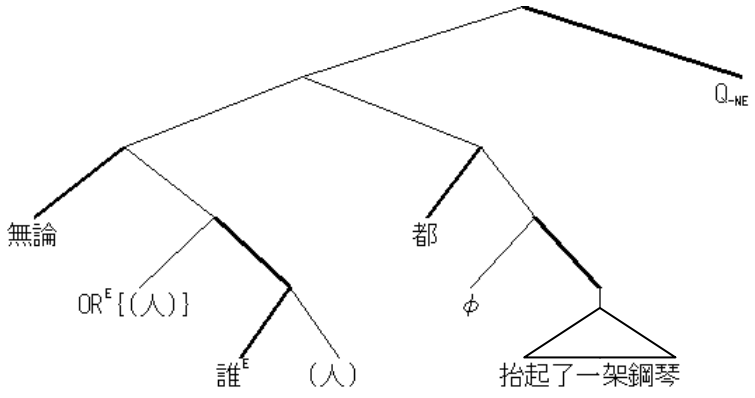
b.　*无论 [谁] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？ = (9b)
Wulun 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

(106)　　(105a)の LF：



(106)では、wulun(无论)と dou(都)の働きにより、(53)と同様の全称量化の効果が生じる。つまり、（ある範囲内で）そこにいる人は漏れなく一台のピアノを持ち上げたという event がある。ところが、その event が正か否か分からないので、疑問マーカーQ_{-MA}によって、[Neg]が作られ、[QF]が付与されることになる。その結果、「是非疑问句（諾否疑問文）」となる。一方、これに対して、(105b)は容認できない。

(107)　　(105b)の LF：*



(107)から分かるように、(105b)が容認できないのは、(79)の条件が満たされていないからである。(107)においては、wulun(无论)と dou(都)の働きにより、不定語に含まれる eor 関係は、and 関係に変えられた。また、Q_{-NE}は、[Neg]素性を作らない。

(90)　　Q_{-NE}は、否定を表す[Neg]素性を作ってはいけない。

結局、排他的な選択関係（eor 関係）がないため、[QF]の付与ができず、疑問文解釈が生まれない。

(79)　[QF]は、排他的な選択関係（eor 関係）に付与されなければならない。

(108) a.　[谁] 都 [抬 起　了] [一 架 钢琴] 吗 ？= (10)
　　誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

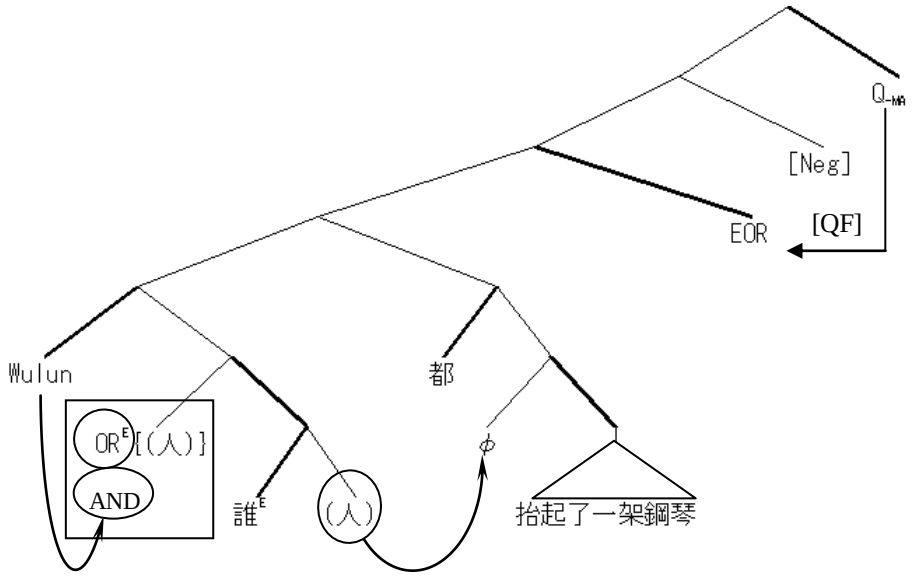
　　誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

　　b.　*[谁] 都 [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？
　　誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

(4a)と同様に、(108)には、音形を持たない wulun(无论)が生起しており、その LF は、(109)と(110)となっている。

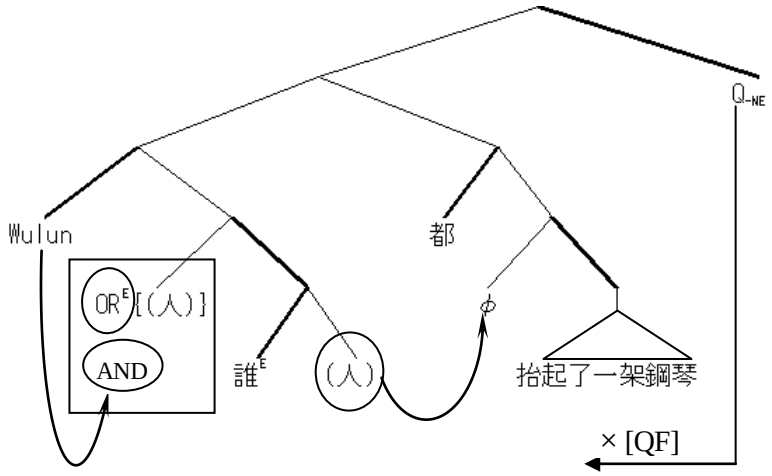
(55)　音形を持たない wulun(无论)タイプの要素が音形を持たない eor 関係を and 関係に変換する。

(109)　(108a)の LF：



(109)においては、Q_{-MA}が[Neg]を新たに作ったため、eor 関係が現れて、[QF]の付与が可能となるが、(110)においては、eor 関係が生起していないため、[QF]の付与ができない。

(110)　　(108b)の LF：*



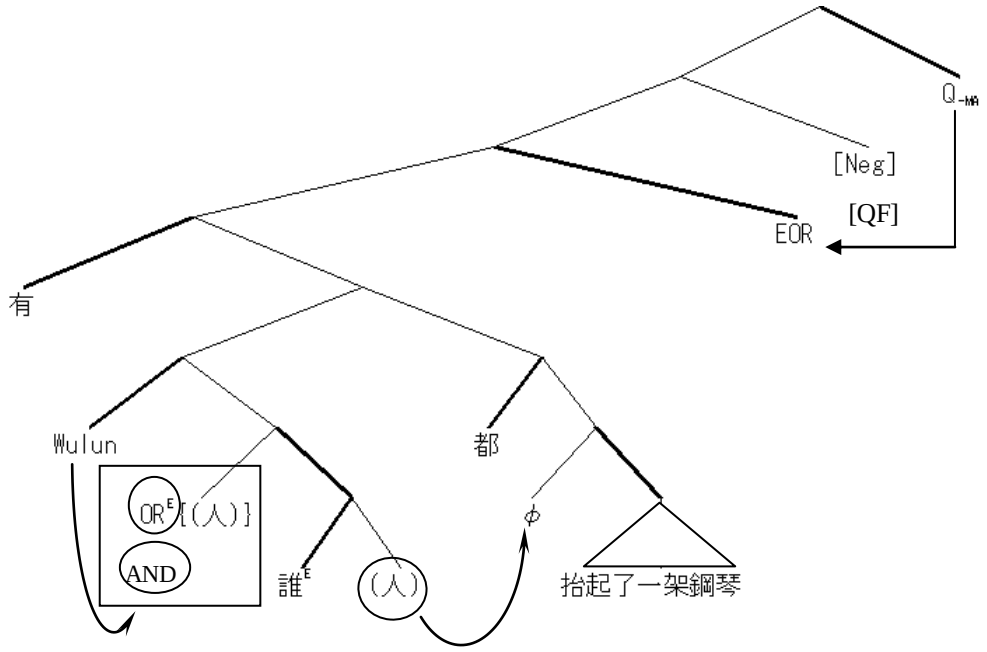
一方、(105)に対して、(111)の[you(有)+不定語+dou(都)]の連続では、MA 疑問文も NE 疑問文も容認できない。

(111) a.　*有 [谁] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 吗 ？ =(11)
　　You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ma

　　誰もが、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

　　b.　*有 [谁] **都** [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？
　　You 誰 Dou 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

(112)　　(111a)の LF：*

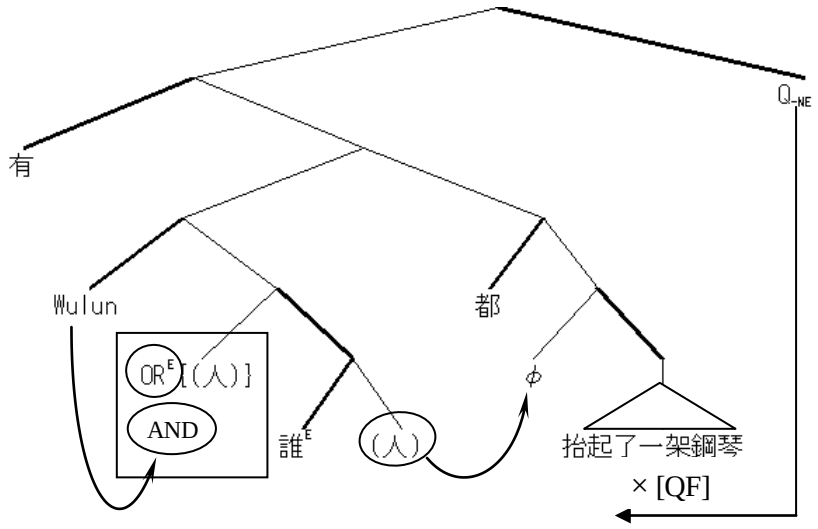


(112)においては、[QF]の付与が可能であるが、you(有)の制約によって、容認できなくなる。

(41)　　You の c 統御領域には、α-or-GIC が生起しなければならない。

一方、(113)は、[QF]が付与されるべき eor 関係もなければ、you(有)の(41)の制約も満たせない。

(113)　　(111b)の LF：



(114) a.　**都** 有 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？＝(12)
Dou You 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰と誰が、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

b.　**都** [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Dou 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

誰と誰が、それぞれ、一台のピアノを持ち上げたの？

c.　***都** 无论 [谁] [抬 起　了] [一 架 钢琴] 呢 ？
Dou Wulun 誰 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

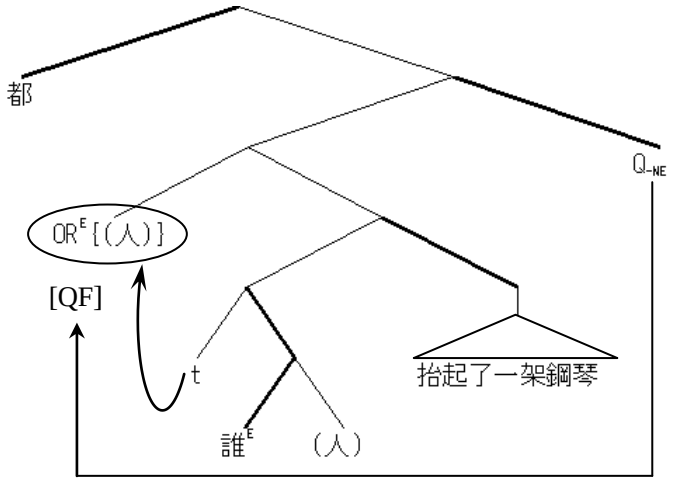
(99a)が(103)で言い換えられるのと同様に、(114b)も(115)で言い換えられる。

(115)　　都 什么 人 抬 起　了 一 架 钢琴（呢）？
Dou 何　人 持ち上げる Asp 一 Cl ピアノ Ne

どんな人とどんな人が一台のピアノを持ち上げたの？

また、(114b)の LF は、(116)となる。

(116)　　(114b)の LF：

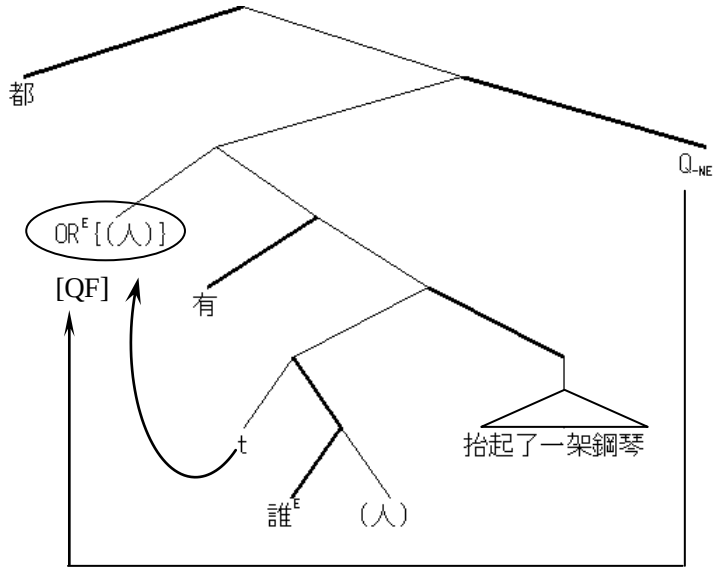


(98)との比較から分かるように、(116)では、dou(都)が(100)の LF 全体を c 統御している。(103)と違って、(114b)、もしくは、(115)では、必ず複数の人が想定されているということは、以下の仮定をしなければならないということである。

(117)　　dou(都)の c 統御領域にある OR^E 集合から複数のメンバーの property が問われなければならない。

すなわち、dou(都)の c 統御領域に生起している OR^E{(property)人，(property)人}の集合に、[QF]が付与されると、集合のメンバーである複数の人の property が問われることになる。これに対する答えも、実際の人名（张三，李四...）や役職（课长，局长...）などとなる。you(有)が生起している(114a)についても同様のことが言える。(114a)の LF は、(118)となる。

(118)　　(114a)の LF：



(114c)が容認できないのは、そもそも(3c)のような文、「无论谁抬起了一架钢琴」が容認できないためである。

4.5.まとめ

最後に本章で述べた主な主張を以下のようにまとめる。

4.5.1. 不定語

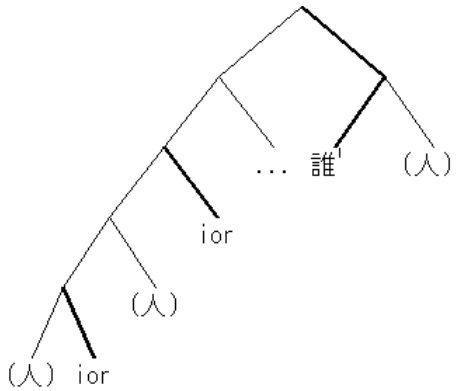
(119)　　不定語 shei(谁)は、shei を主要部とする α-GIC である。

(120)　　shei(谁)は、Shei の音形の具現形である。

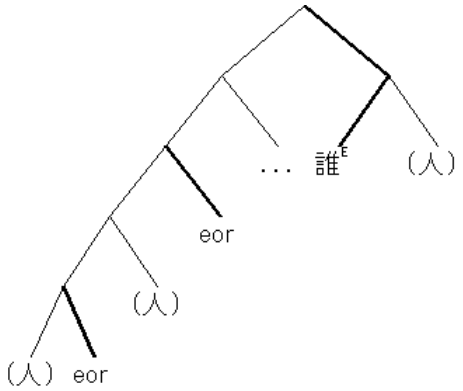
(121)　　shei-GIC には、属性 (attribute) の値 (value)が不明のままの集合が含まれる。

(122)　　shei-GIC には、shei-eor-GIC, shei-ior-GIC の２種類の異形態がある。

(49)　shei-ior-GIC である「谁 I」の LF：



(52)　shei-eor-GIC である「谁 E」の LF：



4.5.2. 疑問マーカー

(123)　疑問素性[QF]を付与するモダリティ・マーカーが文末に生起する。

(79)　[QF]は、eor 関係に付与しなければならない。

(124)　[QF]の付与の仕方：

a. NE 疑問文：
[QF]が QR^E 集合の eor 関係に付与されている場合

b. MA 疑問文：
[QF]が IP と[Neg]の間にある EOR 関係に付与されている場合

4.5.3. 疑問文

(125)　疑問構文の定義：
疑問構文とは、eor 関係でつながる構成素に[QF]が付与されて、その構成素の

どれなのか、もしくは値は何かを問われる構文である。

(126) MA 疑問文の Schema：

IP + EOR + [Neg] + $Q_{\text{-MA}}$

(127) NE 疑問文の Schema：

XP + eor + YP + $Q_{\text{-NE}}$

第五章　終章

この終章では、まず、本論文で取り組んだ問題、提案したことをまとめる。次に、各章において残された課題を提示する。そして、最後に、本論文で得られた提案を踏まえて、今後の研究の方向性を述べて、本論文の結語とする。

5.1. 虚実からなる中国思想

中国文明には、漢方の陰陽説、五行説にしろ、唐詩、宋詞にしろ、いたるところに、「虚」と「実」の対立が見られる。

(128)　《秋浦歌・其十五・李白》

[原文]：

白发三千丈，缘愁是个长，不知明镜里，何处得秋霜

[書き下し文]：

白髪三千丈、愁に縁りて箇（かく）の似（ごと）く長し、知らず明鏡の裏、何れの処にか秋霜を得たる

[訳文]：

私の白髪は三千丈、憂愁の末にこんなにも長くなってしまった。これほどに真っ白な秋の霜、一体どこから降ってきたのだろうか。

李白の詩を例にとれば､白い髪の毛が三千丈もの長さになるはずがなく､これは単なる｢虚｣であり、裏にある「実」は、作者の憂いである。

中国思想も同様である。哲学、芸術、文学などは、序章で言及した道教から受けた影響が多いが、ここにも、有無、虚実の対立がある。老子の『道徳経』では、「道」「名」について以下のように述べてある。

(129)　《老子・道德经・第一章》

道可道，非常道。名可名，非常名。无名，天地之始，有名，万物之母。

道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。名無きは天地の始め、名有るは万物の母。　[金谷 (1997): p.15]

金谷 (1997, p.16)によると、「『名』とは、名称、言語、概念の意味。それは必ずある実体に対してつけられて、一つの約束ごととして世間で通用することになるが、物の名称は本来どのようにもつけられるわけであるから、『名』は実に対して第二義的なものである。」

一方、「『常の道』とは、単なる人間世界の約束ごとではなくて、宇宙自然をもあわせつらぬく唯一絶対の根源的な道であって、それは「名」によってはあらわすことのできない究極の原理であった。」つまり、「名」というのは、「実」であり、「道」というのは、「虚」である。司馬遷の『史記』では、道教（＝老荘思想）について、以下のように述べられている。

(130)　《史记・卷百三十・太史公自序: p.1553》
其術以虚無為本，以因循用，無成勢，無成形，故能究萬物之情。
その術は、虚無を本として、因循を用とする、成った態勢がなく、成った形がなく、故に万物の情を究める可となり。

しかし、老子と荘子の間にも区別がある。序章に取り上げた金谷 (1971)の冒頭では、老荘の違いについて以下のように記述してある。

(131)　ただ、老荘とひとくちではいっても、そのもとの老子と荘子とではいくらかの違いがある。ちょうど、孔子と孟子との間にも違いがあるようにである。違いの著しい点は、老子ではなお現実世界での成功を目ざす現実関心が強いのに、荘子ではそれをまったく乗りこえているということであろう。荘子において目ざされたのは、この人間社会の束縛から解放された絶対的な精神の自由であり、自然と冥合した魂の安らぎであった。　[金谷 (1971): p.7]

老子は、常に実在社会をリアルに語っている。これに対して、「胡蝶の夢」で語られているように、荘子は、精神の自由ともいえる「虚」を重んじているのである[1]。

さらに、中国語研究のほうにも虚実の対立が鮮明に現れている。『馬氏文通』は、1898年に馬建忠氏が西洋の文法を倣って書いた中国最初の文法書だという[2]。それ以来、百年余がたっており、非難されたり、謳歌されたりの繰り返しだったが、その大きな成果の一つとして、中国語の文法理論の構築に「実」と「虚」という概念が持ち出されたことは、否めない。

---

[1] 実在社会について語ることが多い儒教でも、陰陽、虚実を語る『易経』が、基本テキストである五経（『詩経』、『書経』、『礼経』、『楽経』、『易経』）の筆頭に挙げられている。『史記・孔子世家』には、孔子は晩年易を好み、その傾倒ぶりは、易をあまりに繰り返し読んだため、竹簡の紐が三度も切れてしまった、という「韋編三絶」の故事が残っているほどである。

[2] 《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》(p. 9)を参照されたい。

(132) 构文之道，不外虚实两字，实字其体骨，虚字其神情也。而经传中实字易训，虚字难释。 [《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》: p.9]

文を構成する道は、虚と実の二字[3]に他ならない。「実」は、その「骨格」であり、「虚」は、その「表情」である。経、伝においては、「実」の字は、解釈しやすいが、「虚」の字は、解釈しにくい。

「实字」「虚字」は、(133)のように定義され、それぞれ(134), (135)に分類されている。

(133) 凡字有事理可解者，曰**实字**。无解而惟以助实字之情态者，曰**虚字**。

[《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》: 绪论 p.1]

「事理」があり、かつ、解釈可能なものは、「实字」であり、解釈不可で、「实字」の状態の助役としてしか働かないものは、「虚字」である。

(134) 实字：

a. 凡实字以名一切事物者，曰名字，省曰“名”。（≒名詞）[4]
b. 凡实字用以指名者，曰代字。（≒代名詞）
c. 凡实字以言事物之行者，曰动字。（≒動詞）
d. 凡实字以肖事物之形者，曰静字。（≒形容詞）
e. 凡实字以貌动静之容这，曰状字。（≒副詞）

(135) 虚字：

a. 凡虚字以联实字相关之义者，曰介字。（≒介詞）
b. 凡虚字用以为提承展转字句者，统曰连字。（≒連詞）
c. 凡虚字用以煞字与句读者，曰助字。（≒助詞）
d. 凡虚字以鸣人心中不平之声者，曰叹字。（≒感嘆詞）

5.1. 提案の総まとめ

---

[3] 《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》(p. 15)によると、ここの「字」には２種類の理解がある。筆者は品詞として理解している。

(i) 《文通》中所说的“字”，有两种不同的涵义：一是指文字，即汉字，一是指能独立运用的语言单位，即词。
『文通』で言われる「字」は、２種類の含みがある。一つは、文字、すなわち「漢字」、もう一つは、単独で使用可能な言語単位、すなわち「詞」である。

[4] 括弧の中の注釈は、筆者によるものである。

本論文では、不定語「谁」の意味解釈を究めることを目標とした。「谁」の解釈、すなわち不定語の量化解釈、疑問解釈にも虚実の対立が並立している。

不定語の量化解釈に際して、吕叔湘 (1980)などを代表とする、中国語学の研究分野では、とかく「任指（任意指定）」と「虚指（不定指示）」という概念が使われてきた。一方、生成文法的な立場からは「negative polarity existential quantifier」と「free-choice universal」という、内実が不明のままの分析がなされてきた。

また、不定語の疑問解釈に際しては、中国語学の分野では、「特指问（疑問詞疑問文）」、「是非问（諾否疑問文）」、「正反问（反復疑問文）」、「选择问（選択疑問文）」という４種類に分けただけで、さらにこれら４種類の構文の間にある関連性を明示的に分析した研究がない。これに対して、生成文法の分野では、英語の wh-words に類似して、Logical Form において移動が起こると提案されてはいるものの、そもそも移動が必要不可欠な操作であるかどうかということについての分析がなされていない。

本論文では、中国語の不定語「谁」の意味解釈に量化解釈（存在量化、全称量化）と疑問解釈が関わっていることを視野に入れつつ、個体と集合から構成される構造 (α-GIC)（どちらか一方が虚であり、他方が実である）が存在する観点から分析し、量化解釈と疑問解釈の仕組み、及び、両者の相関関係を解明しようとしたものである。

本論文では、量化解釈には基本的に分配解釈と集団解釈しかないという立場に立っており、分配解釈がとれるのは、母集団に含まれるメンバーが and 関係で結ばれる場合 (α-and-GIC)のみだと主張した。一方、集団解釈がとれるのは、母集団に含まれるメンバーが with 関係で結ばれる場合 (α-with-GIC)のみである。これをチェックするためには、dou(都)[⇒分配解釈]と、yiqi(一起) [⇒集団解釈]、もしくは、量化繰上げ (QR)という操作が必要であることを指摘した。これに対して、疑問解釈は、顕在的であるにせよ、非顕在的であるにせよ、構成素同士が eor 関係で結ばれている場合のみだと明らかにした。本論文の内容をまとめると、以下のようになる。

(136) 取り組んだ問題：

不定語「谁」は、なぜ量化解釈（存在量化、全称量化）と疑問解釈がとれるのか？

(137) 着眼点：

a. 集合と個体で構成される α-GIC 構造

b. 集合のメンバーの間に含まれる関係 (and, with, eor, ior)

(138) 研究対象：

conjunction：「和」，「或」，「还是」,「无论」

quantificational expression：「每」, QP，「个个」,「大家」,「所有」
affix：「连」,「们」
interrogative word：「谁」
interrogative particle：「吗」，「呢」

(139) 研究手法：
分配解釈(都)、集団解釈(一起)による分析
主語位置、目的語位置、主部位置の非対称性
symmetry predicate（是夫妻、结婚了）に見られる非対称性

(140) 結論：
a. α-and-GIC ⇒ 分配解釈：
「和」,「每（三種類）」,「QP」,「大家」,「所有」,「个个」,「连」,「们」
b. α-with-GIC ⇒ 集団解釈：
「和」,「大家」,「所有」,「们」
c. α-ior-GIC ⇒ 二者択一（平叙文）：
「或」，「谁」⇒（存在量化解釈）
d. α-eor-GIC
i. 全称量化解釈：
「无论...还是...」,「谁」,「无论...谁」
ii. 二者択一疑問解釈：
「呢」：「还是 (explicit eor)」（選択疑問文）,「A-not-A (implicit eor)」（反復疑問文），「谁 (implicit eor)」（疑問詞疑問文）
「吗」:「yes-no」（諾否疑問文）⇒ 「吗」は、[Neg]を作り出す morpheme (implicit eor)

5.2. 課題の総まとめ

しかし、本論文では、未解決の問題がいくつか残っている。主なものを取り上げてみると、以下のとおりとなる。

(141) 「和」には、He-with-GIC と He-and-GIC の２種類の α-GIC の可能性があるが、なぜ He-with-GIC が優先的に考えられるのか。（第二章　脚注 12）

(142) dou-predication と yiqi-predication により出現した空範疇 φ は、どう解釈すべき

か。φと主部位置のα-GICとなぜ同一指標を持たなければならないのか。

（第二章　(25)）

(143)　implicit な yiqi(一起)と explicit な yiqi(一起)が同時に生起すると、なぜ２個目のφが同時に生起するのか。（dou(都)の連続に伴うφ生起も同様）

(144)　Mei の c-command 領域には、なぜ以下の a か b がなくてはならないのか。

a. 割り当て (quota)：
[N-ClP-XP]と[M-ClP-XP]の比例 (proportion) である仕組み。(N, M ≧ 1)

b. 条件節 (conditional clause)：
[当，逢，到...]などの動詞が含まれる従属節　（第三章　(61)）

(145)　修飾部となるα-GICは、どのように処理されるのか。

5.3. 今後の研究の方向性

中国の著名な歴史学者・言語学者陈寅恪 (2001)は、『金明館叢稿二編』[5]という本の中で、ある特定の言語の文法について、以下のように述べた。

(146)　夫所谓某种语言之文法者，其中一小部分，符于世界语言之公律，除此之外，其大部分皆由研究此种语言之特殊现相，归纳为若干通则，成立一有独立个性之统系学说，定为此特种语言之规律，并非根据某一特种语言之规律，即能推之以概括万族，放诸四海而准者也。假使能之，亦已变为普通语言学音韵学，名学，或文法哲学等等，而不复为某特种语言之文法矣。[陈寅恪 (2001): p.250]
ある言語の文法というのは、その一部が世界の言語の規則に符合しているが、それ以外、そのほとんどは、その言語特有の現象の研究を通して、若干の通則にまとめられ、独立した個性を持つ学説系統として成り立つ。これは、当該特殊言語の規則であり、某特殊言語の規則に基づいて、あらゆる言語（万族）に適用し、全世界（四海）にあまねく適用するものではない。仮にそれができるとしたら、それは、一般言語の音韻学、人名学、あるいは文法哲学などなどになり、その特殊言語の文法にはなれない。

『馬氏文通』は、西洋の文法を見習ったことで、さまざまな批判を受けた。しかし、そ

[5] 陈寅恪 (2001)は、その出版説明によると、元々1980 年代の初版を再版したものであるが、具体的な年代は記載されていない。

れらの批判は、適切な認識に基づいていたものとはいえない。吕叔湘は、『馬氏文通』を客観的に見て、以下のように適切な総評を下している。

(147) 总之，《马氏文通》这部书，缺点不少，优点也很多。总观全书，还是很值得现代的读者用心一读的。但是，全书组织貌似整齐，实多轇轕，分疏通贯，有待学人。也许《文通》之所以能吸引研究者，历久不衰，正在于它的头绪纷繁，瑕瑜互见吧？ [《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》: p.55]

総じて言えば、『馬氏文通』という本は、欠点も多ければ、優れた点も多い。現代の読者にとって身を入れて一読するに値する本である。ただし、全書は、整然として述べられているようであるが、実は、誤りも多く、訂正、整理は、これからの学者に期待する。『文通』が多くの研究者を引き付けて、長い間経っても色褪せることがないのは、複雑な内容の裏に、玉のつやも傷も共存しているからではないだろうか。

陈寅恪 (2001)は、『金明館叢稿二編』で言語研究の姿勢を以下のように述べている。

(148) 故欲详知确证一种语言之特殊现相及其性质如何，非综合分析，互相比较，以研究之，不能为功。 [陈寅恪 (2001): p.251]

したがって、ある言語の特殊現象及びその性質如何を詳しく知り、検証するには、総合的に分析し、お互いに比較し、研究を行わないことには、奏功しない。

上述したように、言語研究は、ある分野のみの偏った研究ではなく、その言語固有の特性を総合的に概観し、通時的、共時的研究成果を踏まえた上で、他分野の研究手法を借りつつ、研究を進めていくことが本来あるべき姿である。

あとがき

春秋戦国時代（紀元前 770 年－紀元前 221 年）は、中国文明が歴史上最も輝いた時期である。儒家、道家、墨家、法家、陰陽家など、多くの思想家が活動し、中国の思想が一気に花開いた。諸子百家、百家争鳴、百花斉放の時代とよく言われている。

ドイツの哲学者であったカール・ヤスパース (Karl Theodor Jaspers)は、紀元前 500 年ごろに起こった世界史的、文明史的な一大エポックの時代を「Axial Period（枢軸時代）」と呼び、その時代の特徴を以下のようにまとめた。

(1) 最不平常的事件集中在这一时期。在中国，孔子和老子非常活跃，中国所有的哲学流派，包括墨子，庄子，列子和诸子百家都出现了。象中国一样，印度出现了《奥义书》 (Upanishiads) 和佛陀 (Buddha) ,探究了一直到怀疑主义，唯物主义，诡辩派和虚无主义的全部范围的哲学可能性。伊朗的琐罗亚斯德 (Zarathustra) 传授了一种挑战性的观点，认为人世生活就是一场善与恶的斗争。在巴勒斯坦，从以利亚 (Elijah) 经由以赛亚 (Isaiah) 和耶利米 (Jeremiah) 到以赛亚第二 (Deutero-Isaiah) ,先知们纷纷涌现。希腊贤哲如云，其中有荷马，哲学家巴门尼德(Parmenides)，赫拉克利特和柏拉图，许多悲剧作者，以及修昔底德和阿基米德。在这数世纪内，这些名字所包含的一切，几乎同时在中国、印度和西方这三个互不知晓的地区发展起来。 [雅斯贝斯 (1949): p.8]

最も尋常ではないことがこの時期に集中して起きた。中国では、孔子と老子が盛んに活躍しており、中国あらゆる哲学の流派、墨子、荘子、列子及び諸子百家がみな出揃った。中国と同様に、インドにはウバニシャッドとブッダが現れ、「懐疑論、唯物論、詭弁術や虚無主義に至るまでのあらゆる哲学的可能性」を探求した。イランにはザラスシュトラ(Zarathustra)が現れ、「善と悪との闘争という挑戦的な世界像」を指摘した。パレスチナでは、エリヤ(Elijah)から、第一イザヤ(Isaiah)、エレミヤ(Jeremiah)などの預言者が現れた。ギリシアには、ホメーロス、ヘラクレイトス、プラトンなどの哲学者、更に悲劇詩人や、トゥキディデス、アルキメデスなどが活躍した。これらの名前に含意されているすべてが、ほぼ同時に中国、インド、西欧という互いに交流のない地域で発展してきた。

ヤスパースの枢軸時代説には、賛否両論がある。それはともかくとして、運良くその時代に生まれ、同時代を過ごすことのできた先哲たちは幸せだったと筆者は常に嘆じている次第である。

言語学の分野も同様である。広い意味で言えば、比較言語学のみならず、歴史言語学、社会言語学、認知言語学、心理言語学、計算言語学などなどの分野が連携してこそ、人

類が使用する言語の本質や構造の科学的な記述、分析につながる。狭い意味で言えば、国境を越えて、中国語、日本語、英語、ドイツ語などの対照比較をし、分野を越えて、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論のあらゆる分野の研究者が協力することが不可欠である。本論文が、そういった滄海の一粟の役でも果たせたらと期待している。

次に、本論文を執筆するにあたり、ご指導いただいた先生方や、応援してくれた同じ研究に携わる大学院生の諸氏に、この場を借りて感謝の意を表したい。孔子の愛弟子とされる顔淵が、孔子の教育方法の素晴らしさと孔子の仁徳や人間性の偉大さについて述べた章がある。

(2) 《论语・子罕篇・第十一》

顔渊喟然叹曰、仰之弥高，钻之弥坚，瞻之在前，忽焉在后。夫子循循然善诱人，博我以文，约我以礼，欲罢不能。即竭吾才，如有所立卓尔。虽欲从之，末由也已。

［書き下し文］：

顔淵、喟然（きぜん）として歎じて（たんじて）曰く、これを仰げば弥（いよいよ）高く、これを鑽れば（きれば）弥堅く、これを瞻る（みる）に前に在れば、忽焉（こつえん）として後（しりえ）に在り。夫子、循循然（じゅんじゅんぜん）として善く人を誘う。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷まん（やまん）と欲すれども能わず（あたわず）。既に吾が才を竭くす。立つ所ありて卓爾（たくじ）たるが如し。これに従わんと欲すと雖ども由（よし）末き（なき）のみ。

［訳文］：

顔淵がああと感歎していった。「仰げば仰ぐほどいよいよ高く、きりこめばきりこむほどいよいよ堅い。前方に認められたかと思うと、ふいにまたうしろにある。うちの先生は、順序よくたくみに人を導びかれ、書物でわたくしを広め、礼でわたくしをひきしめてくださる。私は何度も学問をやめようと思ってもやめられず、もはやわたしの才能を出しつくしているのだが、まるで足場があって高々と立たれているかのようで、ついていきたいと思っても手立てがないのだ。」 [金谷 (1999): p.172]

これを以て、最高の研究環境を与えてくださった九州大学言語学研究室の指導教員である上山あゆみ先生、及び同じ言語学研究室の稲田俊明先生、坂本勉先生、久保智之先生に敬意を表し、お礼を申し上げたい。

次に、九州大学へ集中講義に御出でくださったお忙しい中にもかかわらず、論文内容についてご指導いただいた東京大学の木村英樹先生に感謝したい。本論文では先生の集中講義や発表論文に啓発された論点が多く、それらを出発点としてもっと詳しく調べて

おこうという動機付けに至った次第である。さらに、学会での発表時や、その後のメールのやり取りで有益なご意見やご助言を数多くいただいた麗沢大学の井上優先生にも感謝の意を申し上げたい。

また、大学時代から二十年近く指導してくださった恩師・談建浩先生、戸部守先生ご夫妻、そして、来日してから長年面倒を見てくださった青木麗子先生、松井道明氏、恵美子氏ご家族、磯野達雄先生ご夫妻に御礼申し上げたい。先生方の叱咤激励がなければ、今の私は存在しない。

そして、折にふれて、助言をいただいた九州大学言語学研究室の先輩、高井岩生氏、山本将司氏、田中大輝氏にお礼申し上げたい。特に、本論文の書き上げに際して日本語のチェック、校正、助言をしてくれた市原佳子氏、例文の文法性及び容認可能性判断の調査に根気よく協力してくれた郭杨氏、张婉平氏に深く感謝の意を申し上げたい。九州大学言語学研究室の、備瀬優氏、池田則之氏、東寺祐亮氏、菅沼健太郎氏、大口恵理氏、立山憂氏の大学院生の友情と励ましにも感謝する。

最後に、陰ながら長く支え、応援してくれた家族にお礼を申し上げたい。“执子之手，与子偕老”、延々と続いている博士論文の執筆作業に対しても文句も言わず見守ってくれた妻・邢红燕に感謝する。また、絶えず作文を書いて勇気付けてくれた娘・欣语、例文の文法性判断に協力してくれた姪・吴茜にも深く感謝する次第である。また、『論語』にある次の教えを自分への激励としておく。

(3) 《论语・学而篇・第十四》

子曰、君子食无求饱，居无求安，敏于事而慎于言，就有道而正焉，可谓好学也已。

なお、本論文における不備・誤り等は、無論、筆者の責任である。

参考文献

Barwise, Jon and Robin, Cooper (1981) Generalized quantifiers and natural language. *Linguistics and Philosophy* 4: 159-219.

Bennett, Michael, R. (1974) Some Extensions of a Montague Fragment of English. Doctoral dissertation, Los Angeles: University of California.

Carlson, Gregory N. (1977) Reference to Kinds in English. Doctoral dissertation, University of Massachusetts Amherst.

Carlson, Gregory N. (1995) Truth-conditions of generic sentences. In: G. Carlson and F.J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, 224-237. Chicago: University of Chicago Press.

Chao, Yuen Ren (1968) *A grammar of spoken Chinese*. Berkeley: University of California Press.

Cheng, Lisa L.-S. (1995) On dou-quantification. *Journal of East Asian Linguistics* 4: 197-234.

Chierchia, Gennaro (1989) Structured meanings, thematic roles and control. In: Gennaro Chierchia, Barbara Partee, and Raymond Turner (eds.) *Properties, types and meanings* II, 131–166. Dordrecht: Kluwer.

Chiu, Hui-Chun Bonnie (1993) The Inflectional structure of Mandarin Chinese. Doctoral dissertation, Los Angeles: University of California.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*. Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its nature, Origins and Use*. New York: Praeger.

Chomsky, Noam (1999) *Derivation by phase*. Cambridge, MA: MIT.

Curme, George Oliver (1931) *A Grammar of English: Syntax*, Boston: D.C. Heath & Company.

Dougherty, Ray C. (1968) A Transformational Grammar of Coordinate Conjoined Structures, Doctoral dissertation, MIT.

Dowty, David. R. (1987) Collective predicates, distributive predicates, and All. In: *Proceedings of the Third Eastern States Conference on Linguistics* (*ESCOL* 3), 97–115. Columbus (OH): The Ohio State University.

Frege, Gottlob (1879) (藤村龍雄訳) *Begriffsschrift: eine der arithmetischen nachgebildete Formelsprache des reinen Denkens*. Halle.

Gamut, L.T.F. (1991) *Logic, language, and meaning*. Chicago: University of Chicago Press.

Gentzen, Gerhard (1935) Untersuchungen über das logische Schließen I, *Mathematische Zeitschrift*, Bd.39, S. 178.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge: MIT Press.

Heim, Irene (1982) The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Hsu, Pei-Ling (2010) The Licensing Condition on Dou-Quantification in Mandarin Chinese.

Chuugokugogaku 257: 161-180.

Hsyu, Shu-ing (1995) The Syntax of Focus and Topic in Mandarin Chinese. Doctoral dissertation, Los Angeles: University of Southern California.

Huang, C.-T.James (1982) Logical Relation in Chinese and the theory of Grammar. Doctoral dissertation, MIT.

Huang, C.-T.James (1987) Existential sentences in Chinese and (in)definiteness. In: Eric J. Reuland and Alice G.B. ter Meulen (eds.) *The Representation of (In)definiteness*, 226-253. London: MIT Press.

Huang, C.-T.James (1989) Pro drop in Chinese: a generalized control approach, In: O. Jaeggli and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*, 185-214. Dordrecht: D. Reidel.

Huang, C.-T.James, Li, Y.-H. Audrey, Li, Yafei (2009) *The Syntax of Chinese*. UK: Cambridge University Press.

Huang, Shi-Zhe (1996) Quantification and Predication in Mandarin Chinese: A Case Study of Dou. Doctoral dissertation, Philadelphia: University of Pennsylvania.

Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray (1983a) *Semantics and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.

Jackendoff, Ray (1983b) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.

Johnson, Spencer (1998) *Who Moved My Cheese?: An A-Mazing Way to Deal with Change in Your Work and in Your Life*. London: Vermilion.

Kamp, Hans (2008) A Theory of Truth and Semantic Representation. In: P. Portner and B. H. Partee (eds.) *Formal Semantics: The Essential Readings*, 189-222. Oxford: Blackwell.

Kayne, Richard S (1994) The antisymmetry of syntax. Cambridge: MIT Press.

Kroch, Anthony (1974) The Semantics of Scope in English. Doctoral dissertation, MIT.

Lakoff, George and Stanley, Peters (1969) Phrasal conjunction and symmetric predicates, In: D. Reibel and S. Schane (eds.) *Modern studies in English*, 113-142. NJ: Prentice Hall.

Lakoff, George (1970a) Linguistics and natural logic. *Synthese* 22 (1-2): 151-271.

Lee, Thomas, (1986) Studies on quantification in Chinese. Doctoral dissertation. Los Angeles: University of California.

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.

Li, Xiao guang (1997) Deriving Distributivity in Mandarin Chinese. UCI dissertations in Linguistics.

Lin, Jo-wang (1996) A Formal Semantic Analysis of Dou 'all', paper presented at the Fifth International Conference on Chinese Linguistics. Taiwan: National Tsing Hua University.

Lin, Jo-Wang (1998) Distributivity in Chinese and its Implications, *Natural Language Semantics* 6: 201-243.

Link, Godehard (1983) The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms: A Lattice-Theoretical Approach, In: R. Baeuerle, C.Schawarze, A. von Stechow (eds.) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, 302-323. Berlin: De Gruyter.

Link, Godehard (1987) Generalized quantifiers and plurals. In P. Gårdenfors (ed.) *Generalised Quantifiers: Linguistic and Logical Approaches*, 151–180. Dordrecht: D. Reidel.

Liu, Feng-his (1990) Scope dependency in English and Chinese. Doctoral dissertation, Los Angeles: University of California.

Ming, Xiang (2008) Plurality, maximality and scalar inferences: A case study of Mandarin Dou, *Journal of East Asian Linguistics* 17: 227–245.

Montague, Richard (1973) The proper treatment of quantification in ordinary English. In: Jaakko Hintikka, J.M.E. Moravcsik and Patrick Suppes (eds.) *Approaches to natural Language*: 221-242. Dordrecht: D. Reidel.

Montague, Richard (1974) *Formal philosophy: Selected papers of Richard Montague*. Richmond H. Thomason (ed.) New Haven: Yale University Press.

Palmer, Frank Robert (2001) *Mood and Modality*.UK: Oxford University Press.

Partee, Barbara H, Alice Ter Meulen and Robert E, Wall (1990) *Mathematical Methods in Linguistics*. Dordrecht: Kluwer.

Peirce, Charles Sanders (1883) Studies in Logic by Members of the Johns Hopkins University, Boston, MA: Little, Brown, and Company.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Reinhart, Tanya (1976) The Syntactic Domain of Anaphora. Doctoral dissertation, MIT.

Reinhart, Tanya (1983) *Anaphora and Semantic Interpretation.* Chicago: The University of Chicago Press.

Roberts, Craige (1990) *Modal Subordination, Anaphora, and Distributivity*. New York: Garland Press.

Ross, John R. (1967) Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.

Schwarzschild, Roger (1996) *Pluralities.* Dordrect: Kulwer.

Stowell, Tim (1981) Origins of Phrase Structure. Doctoral dissertation, Cambridge, MA: MIT.

Whitehead, Alfred North and Russell, Bertrand (1910-13) *Principia Mathematica*. Second edition. 1925-27. UK: Cambridge University Press.

Wu, Jian xin (1999) Syntax and Semantics of Quantification in Chinese. Doctoral dissertation, University of Maryland College Park.

陈寅恪 (2001) 《陈寅恪集 金明馆丛稿二编》，北京：新知三联书店。

黄国营 (1986) 汉语‘吗’字句纵横初探， *Journal of Asian and African Studies* 32.

黄瓒辉 (2004) 量化副词“都”与句子的焦点结构, 北京大学博士论文。

黄正德 (1990) 說「是」和「有」，《中央研究院歷史語言研究所集刊》第五十九本, 43-64。

蒋严 (1998) 语用推理与“都”的句法/语义特征,现代外语:语言学与应用语言学,第 1 期,10-30 页。
蒋严，潘海华 (1998)《形式语义学引论》，北京：中国社会科学出版社。
陆俭明 (1993) 周遍性主语及其他，《现代汉语句法论》，73-84。
吕叔湘等 (1980)《现代汉语八百词》，北京：商务印书馆。
吕叔湘 (1985)《近代汉语指代词》，上海：学林出版社。
吕叔湘 (2002)《吕叔湘全集第一卷-中国文法要略》（1942 初版），沈阳：辽宁教育出版社。
吕叔湘 (2002)《吕叔湘全集 第十卷 马氏文通读本》（1986 初版），沈阳：辽宁教育出版社。
孙锡信 (1992)《汉语历史语法要略》，上海：复旦大学出版社。
孙锡信 (1999)《近代汉语语气词》，北京：语文出版社。
（清）王夫之 (1964)《庄子解》，北京：中华书局。
王力 (1988)《王力文集第 9 卷-汉语史稿》，山东：山东教育出版社。
王力 (1990)《王力文集第 11 卷-汉语语法史、汉语词汇史》，山东：山东教育出版社。
雅斯贝斯，卡尔著、魏楚雄，俞新天译(1989)《历史的起源与目标》，北京：华夏出版社。
杨凯荣 (2002)“疑问代词+也/都+VP”的肯定与否定，徐烈炯、邵静敏 (2002)，《汉语语法研究的新拓展(一)-21 世纪首届现代汉语语法国际研讨会论文集》，杭州：杭州教育出版社。
杨凯荣 (2003)“量词重叠+(都)+VP”的句式语义及其动因，《世界汉语教学》2003 年第 4 期（总第 66 期），13-21 页。
袁毓林 (2004)“都、也”在“Wh+ 都 / 也+VP”中的语义贡献,《语言科学》第 3 卷,第 5 期（总第 12 期）3-14。
袁毓林 (2005)“都”的语义功能和关联方向新解,《中国语文》第 2 期。
张蕾，李宝伦，潘海华 (2009)“所有”的加合功能與全稱量化 (Sum operator suoyou and universal quantification in Mandarin Chinese)，世界漢語教學 23：457-464 页。
张斌，张谊生 (2000)《现代汉语虚词》，上海：华东师范大学出版社。
朱德熙 (1982)《语法讲义》，北京：商务印书馆。
朱德熙 (1999)《朱德熙文集》，北京：商务印书馆。
许嘉璐主编，安平秋副主编 (2004)《史记》，上海：汉语大词典出版社。
中国社会科学院语言研究所词典编辑室 (1994)《现代汉语词典》，北京：商务印书馆。
上山あゆみ (2008)「量化表現の意味は量化子を用いなければ表せないのか」日本語文法学会第 9 回大会発表用資料，甲南大学. 2008.10.19.
上山あゆみ (2011a)「統語論に基づく新しい意味理論の提案」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101: 35-40.
上山あゆみ (2011b)「生成文法と意味解釈」未発表原稿 九州大学.
王慶 (2010)「中国語の量化表現 dou(都)に関する一考察」『九大言語学論集』第 31 号 : 159-173.
太田辰夫 (1957)『中国語歴史文法』 京都 : 朋友書店.

大西智之 (1997)「中国語疑問詞の不定用法と日本語の不定指示詞」大河内康憲教授退官記念論文集刊行会（編）『中国語学論文集: 大河内康憲教授退官記念』65-80. 東京：東方書店.
金谷治訳 (1971)『荘子第一冊内篇』東京：岩波文庫.
金谷治訳 (1997)『老子―無知無欲のすすめ』東京：講談社学術文庫.
金谷治訳 (1999)『論語』東京：岩波書店.
木村英樹 (2008)「中国語疑問詞の意味機能――属性記述と個体記述」『日中言語研究と日本語教育』1(1): 12-24.
木村英樹 (2011)「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特性」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』(14): 89-117.
久野暲 (1973)『日本文法研究』東京：大修館書店.
藤村龍雄 (2006)『現代における哲学の存在意味－論理・言語・認識－』東京：北樹出版.
益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』東京：くろしお出版.
山田史生 (2007)『日曜日に読む「荘子（ちくま新書）』東京：筑摩書房.
劉月華 他 (1988) 相原茂監訳『現代中国語文法総覧』（上，下）東京：くろしお出版.